

和歌山県橋本市

隅田八幡神社経塚発掘調査報告書

2023年3月

橋本市教育委員会



隅田八幡神社経塚出土遺物 集合写真



第1 経塚出土遺物 集合写真



第2 経塚出土遺物 集合写真



銅鏡 集合写真



外容器 集合写真



青白磁 集合写真

序 文

隅田八幡神社は、橋本市隅田町垂井に鎮座する神社で、国宝人物画像鏡を所蔵する神社として広く知られています。また10月に挙行される秋祭は和歌山県指定文化財となっており、多くの参拝者で賑わいます。

隅田八幡神社経塚は、平成9年（1997）8月、正遷宮に伴う境内整備の際、偶然経筒が発見されたことが契機となり、同年に第1次調査を、翌年には第2次調査を実施しました。この調査により、妙法蓮華経が書かれた紙本経を納めた経筒の他、銅鏡、青白磁小壺・合子、短刀、ガラス小玉等、平安時代末期の当時の人々の信仰を示す多数の遺物が発見されました。これらの調査は、『平成10年度 隅田八幡神社経塚発掘調査概報』（橋本市教育委員会 1999）で報告し、隅田八幡神社経塚は平成17年（2005）に和歌山県指定文化財となりました。このように、多くの遺物が出土し、経塚研究の重要な遺跡ではありますが、長く概報の発刊のみにとどまっていました。

この度、この貴重な経塚の出土遺物を再整理し、再検討した調査研究の成果を、発掘調査報告書として刊行できることを大変喜ばしく思っております。本書が研究資料としてだけでなく、広く学校教育や生涯学習等の場で活用され、史跡や文化財保護の理解の一助になれば幸いです。

結びに、報告書の刊行に至るまでご指導並びにご協力をいただきました関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、当時の発掘調査にあたって全面的なご協力をいただきました隅田八幡神社に厚く御礼申し上げます。

令和5年3月31日

橋本市教育委員会

教育長 今 田 実

例 言

1. 本書は和歌山県橋本市隅田町垂井 622 に所在する隅田八幡神社経塚の平成 9 年度（1997）及び平成 10 年度（1998）に実施した発掘調査報告書である。発掘調査成果の一部は「平成 10 年度 隅田八幡神社経塚発掘調査概報」（橋本市教育委員会 1999）において報告されている。
2. 本書は「平成 10 年度 隅田八幡神社経塚発掘調査概報」の内容に、平成 10 年度（1998）から 13 年度（2001）に実施した出土品の保存処理事業の成果報告と、令和 4 年度（2022）に実施した再整理事業によって得られた新たな知見を加えてまとめたものである。
3. 平成 10 年度（1998）の発掘調査は、橋本市が国庫補助金並びに県費補助金の交付を受けて実施した。
4. 発掘調査は、和歌山県教育委員会の指導のもとに橋本市教育委員会が実施した。調査組織は下記のとおりである。

調査組織（平成 10 年度）

橋本市教育委員会	教育長	森脇 秀和
	教育次長	丸澤 耕作
	生涯学習課 課長	仲 完治
	＊ 課長補佐	栗林 哲夫
	＊ 社会教育係長	大岡 康之（調査員）
	＊ 社会教育係	山本 美智子
	＊	和田 麻紀
	＊	窪田 憲志
	＊ 臨時職員	大林 順子（平成 11.2.8～3.31）

5. 出土遺物の保存処理は、平成 10 年度（1998）から 13 年度（2001）に公益財団法人元興寺文化財研究所に委託し、実施した。
6. 発掘調査は大岡康之が担当し、大林順子、大前裕美、寺本祥子、寺本佳文、花園久美子の諸氏の参加、協力を得た。
7. 本書の刊行に係る事務及び編集は橋本市教育委員会が実施した。また再整理作業の一部は有志の協力を得て実施した（令和 4 年 5 月～令和 5 年 2 月）。
8. 本書刊行に係る調査組織は下記のとおりである。

調査組織（令和 4 年度）

橋本市教育委員会	教育長	今田 実
	教育部長	堀畑 明秀
	生涯学習課 課長	萱野 健治
	＊ 課長補佐	中岡 祥子
	＊ 文化係長	内藤健一郎
	＊ 文化係	佐々木彩乃
	＊ 会計年度任用職員	富加見泰彦・中利恵・奥田由香里

9. 本書の執筆は佐々木のほか、再整理作業協力者が行った。執筆担当箇所は本文及び目次にした通りである。再整理作業は以下の者の協力を得た。（五十音順）

- 金澤舞（和歌山県立紀伊風土記の丘）、重金誠（能勢町文化財保護審議会委員）、杉原陽子、瀬谷今日子（和歌山県教育庁）、仲辻慧大（和歌山県教育庁）、中西瑠花（有田市教育委員会）、中原七菜子（湯浅町教育委員会）
- 出土品の実測・トレース・拓本は富加見及び整理作業参加者で分担した。遺構のトレースは奥田・佐々木・中が行った。また、備前焼甕の復元作業は杉原陽子氏の協力のもと佐々木・中で実施した。
 - 全体の編集は佐々木が行った。
 - 第5章において、岩倉哲夫氏（橋本市文化財保護審議会委員）、中川あや氏（奈良国立博物館）、中村浩道氏（和歌山県立紀伊風土記の丘館長）、吉川聡氏（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）より玉稿を賜った。なお、第5章は個別の記名論文からなるため、用語や表記による統一は行っていない。
 - 写真図版に掲載した遺構写真は、平成9・10年（1997・1998）に大岡が撮影した。また、保存処理時の写真は公益財団法人元興寺文化財研究所にて撮影された。出土品については、集合写真を加茂幸彦氏に依頼した。
 - 本遺跡出土品は平成17年（2005）5月31日に和歌山県指定文化財（考古資料）、本遺跡は平成19年（2007）6月12日に和歌山県指定文化財（史跡）の指定を受けた。令和5年（2023）3月現在、経塚及び一部の石垣は埋め戻され、周囲は柵で覆われ整備されている。また石垣の一部を地表で再現し、宝篋印塔を建て直した。
 - 調査ならびに報告書作成において、以下の方々と諸機関より多くのご教示とご協力を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略・五十音順）
 かつらぎ町教育委員会 粉河産土神社 公益財団法人元興寺文化財研究所 坂田墨珠堂
 新宮市教育委員会 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 文化庁 和歌山県教育庁
 和歌山県立紀伊風土記の丘
 綾村宏 井口喜晴 石丸彩 稲城信子 岩倉哲夫 雨森久晃 大久保治 加茂幸彦
 岸本直文 北野隆亮 久保智康 工業善通 肥塚隆保 坂井秀弥 坂田雅之 桜井隆治
 杉原陽子 杉山洋 武内雅人 館野和己 辻林浩 辻村泰善 中川あや 中村浩道
 西川寿勝 野口淳 服部敦子 初村武寛 原田昌幸 船木佳代子 増澤文武 宮本佳典
 村田忠繁 湯山賢一 吉川聡 和田大作

凡 例

- 本書の図中の北方位は磁北（MN.）を示し、遺構断面図のレベルは標高を表す。
- 発掘調査時の土層の色調は、調査担当者などが任意の判断で行っている。土器などの色調は、農林水産省技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』（平成5年版）に拠る。
- 図及び写真は第1章から第6章で通し番号を付している。ただし、第5章は、個別の記名論文からなるため、この限りではない。
- 遺構・遺物写真などの図版の縮尺については、任意であり、統一していない。

目 次

巻頭カラー写真

第1章 経緯と経過

- 第1節 調査の経緯 (佐々木) 1
- 第2節 調査の経過 (佐々木) 1
- 第3節 整理作業の経過 (佐々木) 2

第2章 遺跡の位置と環境

- 第1節 地理的環境 (佐々木) 5
- 第2節 歴史的環境 (佐々木) 5

第3章 調査の方法と成果

- 第1節 調査の方法 (佐々木) 9
- 第2節 調査成果 (佐々木) 10

第4章 出土遺物の検討

第1節 第1経塚出土遺物

- (1) 概要 (佐々木) 19
- (2) 出土遺物
 - 1. 備前焼甕・須恵器甕 (重金・中原) 19
 - 2. 経筒及び関連部品 (瀬谷) 19
 - 3. 銅鏡 (佐々木) 23
 - 4. 青白磁小壺・青白磁合子 (重金) 24
 - 5. 銅銭 (佐々木) 25

第2節 第2経塚出土遺物

- (1) 概要 (佐々木) 27
- (2) 出土遺物
 - 1. 常滑焼甕 (重金) 27
 - 2. 経筒 (瀬谷) 27
 - 3. 紙本経 (金澤) 29
 - 4. 銅鏡 (佐々木) 30
 - 5. 青白磁小壺・青白磁合子・白磁皿 (重金) 33
 - 6. 短刀 (金澤) 35
 - 7. 火打鎌 (中西) 38
 - 8. 銅銭 (佐々木) 38

第3節 第3経塚出土遺物

- (1) 概要 (佐々木) 44
- (2) 出土遺物
 - 1. 銅鏡 (佐々木) 44
 - 2. 火打鎌 (中西) 45

第4節 その他の出土遺物

- (1) 概要 (佐々木) 46
- (2) 出土遺物
 - 1. 銅鏡 (佐々木) 46
 - 2. 青白磁合子 (重金) 47
 - 3. 短刀 (金澤) 48

写真目次

写真1	第2経塚出土経筒 開蓋前	写真8	坂田黒珠堂 作業説明状況
写真2	第2経塚出土経筒 開蓋状況	写真9	第2経塚出土紙本経 仮貼り作業
写真3	第2経塚出土経筒内紙本経 取り出し状況	写真10	第2経塚出土紙本経 貼り合わせ
写真4	第2経塚出土経筒内紙本経 8巻集合	写真11	検討会(令和4年9月4日)
写真5	第2経塚出土経筒内紙本経 埋納状況	写真12	復元作業
写真6	第2経塚出土経筒 底板	写真13	遺物撮影
写真7	第2経塚出土紙本経 開巻作業	写真14	検討会(令和4年12月1日)

巻頭図版目次

巻頭写真1	1. 隅田八幡神社経塚出土遺物 集合写真
巻頭写真2	1. 第1経塚出土遺物 集合写真
巻頭写真3	1. 第2経塚出土遺物 集合写真
巻頭写真4	1. 外容器 集合写真
	2. 銅鏡 集合写真
	2. 青白磁 集合写真

図版目次

写真図版1	1. 隅田八幡神社経塚(かつての状況)	写真図版6	1. 第2区土層跡1 南から
	2. 平成9年経筒発見状況		2. 第2区土層跡2 北から
	3. 平成9年経筒・常滑焼甕出土状況		3. 第3区全景 北西から
写真図版2	1. 隅田八幡神社経塚(第2次調査前状況)		4. 第3区サブトレンチ 南側土層断面
	2. 第1区全景		5. 宝篋印塔 遠景
	3. 第1区南西から		6. 宝篋印塔 正面から
	4. 第1区北西から	写真図版7	第1経塚掘削検査(1)・須恵器類(2)
	5. 第1区北東から	写真図版8	第1経塚経筒
	6. 第1区南側礫堆積状況 南東から	写真図版9	1. 経筒 X線写真
写真図版3	1. 第1区南側礫堆積 東半分掘削状況		2. 経筒 環状部品
	2. 第1区南側完掘状況 北から		3. 経筒 蓋
	3. 第1区石垣2・3 南東から		4. 不明部品
	4. 第1経塚掘削途中	写真図版10	第1経塚小型経筒
	5. 第1経塚	写真図版11	第1経塚小型経筒 細部
	6. 第1経塚青白磁合子身検出状況	写真図版12	第1経塚銅鏡1 堀田菅草鏡
写真図版4	1. 第2経塚青白磁小壺検出状況	写真図版13	第1経塚銅鏡2 荒磯松飛雁鏡
	2. 第2経塚	写真図版14	第1経塚銅鏡3 州浜秋草双鳥鏡
	3. 第2経塚常滑焼甕、青白磁、短刀検出状況	写真図版15	第1経塚銅鏡4 浮線絳菊丸文散葉鳥鏡
	4. 第2経塚青白磁小壺検出状況	写真図版16	1. 第1経塚青白磁小壺蓋
	5. 第2経塚青白磁小壺蓋検出状況		2. 第1経塚青白磁合子身1
	6. 第2経塚銅鏡、青白磁小壺蓋検出状況		3. 第1経塚青白磁合子身2
写真図版5	1. 第3経塚	写真図版17	第1経塚銅鏡
	2. 第3経塚銅鏡検出状況1	写真図版18	第2経塚常滑焼甕
	3. 第3経塚銅鏡検出状況2	写真図版19	第2経塚経筒
	4. 第2区全景 南から	写真図版20	第2経塚経筒蓋 薄草草鳥鏡
	5. 第2区西側土層断面	写真図版21	第2経塚紙本経木製軸 巻第一～八
	6. 第2区土層跡1・2 東から	写真図版22	第2経塚紙本経巻第一(1)
		写真図版23	第2経塚紙本経巻第一(2)

- 写真図版24 第2経塚紙本経巻第一 (3)
- 写真図版25 第2経塚紙本経巻第一 (4)
- 写真図版26 第2経塚紙本経巻第一 (5)
- 写真図版27 第2経塚紙本経巻第一 (6)
- 写真図版28 第2経塚紙本経巻第二 (1)
- 写真図版29 第2経塚紙本経巻第二 (2)
- 写真図版30 第2経塚紙本経巻第二 (3)
- 写真図版31 第2経塚紙本経巻第二 (4)
- 写真図版32 第2経塚紙本経巻第二 (5)
- 写真図版33 第2経塚紙本経巻第二 (6)
- 写真図版34 第2経塚紙本経巻第二 (7)
- 写真図版35 第2経塚紙本経巻第三 (1)
- 写真図版36 第2経塚紙本経巻第三 (2)
- 写真図版37 第2経塚紙本経巻第三 (3)
- 写真図版38 第2経塚紙本経巻第三 (4)
- 写真図版39 第2経塚紙本経巻第三 (5)
- 写真図版40 第2経塚紙本経巻第三 (6)
- 写真図版41 第2経塚紙本経巻第三 (7)、巻第四 (1)
- 写真図版42 第2経塚紙本経巻第四 (2)
- 写真図版43 第2経塚紙本経巻第四 (3)
- 写真図版44 第2経塚紙本経巻第四 (4)
- 写真図版45 第2経塚紙本経巻第四 (5)
- 写真図版46 第2経塚紙本経巻第四 (6)、巻第五 (1)
- 写真図版47 第2経塚紙本経巻第五 (2)
- 写真図版48 第2経塚紙本経巻第五 (3)
- 写真図版49 第2経塚紙本経巻第五 (4)
- 写真図版50 第2経塚紙本経巻第五 (5)
- 写真図版51 第2経塚紙本経巻第五 (6)
- 写真図版52 第2経塚紙本経巻第五 (7)、巻第六 (1)
- 写真図版53 第2経塚紙本経巻第六 (2)
- 写真図版54 第2経塚紙本経巻第六 (3)
- 写真図版55 第2経塚紙本経巻第六 (4)
- 写真図版56 第2経塚紙本経巻第六 (5)
- 写真図版57 第2経塚紙本経巻第六 (6)
- 写真図版58 第2経塚紙本経巻第七 (1)
- 写真図版59 第2経塚紙本経巻第七 (2)
- 写真図版60 第2経塚紙本経巻第七 (3)
- 写真図版61 第2経塚紙本経巻第七 (4)
- 写真図版62 第2経塚紙本経巻第七 (5)
- 写真図版63 第2経塚紙本経巻第八 (1)
- 写真図版64 第2経塚紙本経巻第八 (2)
- 写真図版65 第2経塚紙本経巻第八 (3)
- 写真図版66 第2経塚紙本経巻第八 (4)
- 写真図版67 第2経塚紙本経巻第八 (5)
- 写真図版68 第2経塚紙本経巻第八 (6)
- 写真図版69 1. 第2経塚銅鏡 1 海獣葡萄鏡
2. 第2経塚銅鏡 2 網代双鳥鏡
- 写真図版70 第2経塚銅鏡 3 萩蝶鳥鏡
- 写真図版71 第2経塚銅鏡 4 竹垣山吹草鳥鏡
- 写真図版72 第2経塚銅鏡 5 松歌鶴鏡
- 写真図版73 第2経塚銅鏡 6 薄菊蝶鳥鏡
- 写真図版74 第2経塚銅鏡 7 流水水草双鷺鏡
- 写真図版75 第2経塚銅鏡 8 松歌鶴鏡
- 写真図版76 第2経塚銅鏡 9 草葉蝶鳥鏡
- 写真図版77 第2経塚青白磁 1
- 写真図版78 第2経塚青白磁 2
- 写真図版79 第2経塚青白磁 3
- 写真図版80 第2経塚短刀 1
- 写真図版81 1. 第2経塚短刀 2
2. 第2経塚火打鎌
- 写真図版82 第2経塚銅鏡 1
- 写真図版83 第2経塚銅鏡 2
- 写真図版84 第2経塚銅鏡 3
- 写真図版85 第3経塚銅鏡 1 流水草葉双鳥鏡
- 写真図版86 第3経塚銅鏡 2 萩双鳥鏡
- 写真図版87 第3経塚銅鏡 3 流水草花双鶴鏡
- 写真図版88 1. 第3経塚火打鎌
2. その他出土銅鏡 1 草花双鳥鏡
- 写真図版89 その他出土銅鏡 2
- 写真図版90 1. その他出土青白磁合子蓋
2. その他出土火打鎌
3. その他出土ガラス小玉
- 写真図版91 その他出土短刀及び鉄製品
- 写真図版92 その他出土銅鏡
- 写真図版93 銅鏡 鈕

第1章 経緯と経過

第1節 調査の経緯

隅田八幡神社経塚は、平成9年度（1997）の隅田八幡神社正遷宮に伴う境内整備事業において、「御廟塚」と呼ばれる約5m四方の石垣で区画された区域の土堀の改修と切株の除去中に偶然発見された。この際、大きく破損した経筒1点が出土した（第1経塚）。隅田八幡神社から橋本市教育委員会に経筒発見の報告があり、橋本市教育委員会と和歌山県教育委員会及び関係者間でこの対応について協議し、記録保存を目的とした発掘調査を緊急的に実施した（第1次調査）。翌年、平成10年度（1998）に国庫補助金及び県費補助金の交付を受けて、橋本市教育委員会が遺跡の内容把握を目的とした発掘調査を実施することとなった（第2次調査）。

第2節 調査の経過

平成9年度（1997）及び10年度（1998）に実施した発掘調査の経過について以下に述べる。

(1) 第1次調査

平成9年（1997）年8月8日に隅田八幡神社境内にて経筒が発見された報告を受け、8月11日に橋本市教育委員会が現地確認した。9月24日から10月17日にかけて発掘調査を緊急的に実施した。当初経塚は1基（第1経塚）だけであると考えられていたが、もう1基（第2経塚）の存在が明らかとなり、当地に経塚が数基存在する見通しが立てられた。また、ほぼ完全な経筒が良好な保存状態で発見されたことから緊急的な調査では対応できず、発掘調査事業を計画する必要があると判断した。10月17日に調査を打ち切り、現場を保存した。このときの調査で、第2経塚からはほぼ完形の経筒のほか、銅鏡や青白磁小壺等の遺物が出土した。

平成9年 8月8日	隅田八幡神社境内にて経筒が発見される（第1経塚）。
8月11日	橋本市教育委員会が現地確認する。
8月20日	隅田八幡神社から遺跡の発見届が提出される。
9月24日	橋本市教育委員会が発掘調査を開始する（第1次調査）。
9月26日	第2経塚にて陶製外容器を検出する。
10月16日	陶製外容器内の経筒、銅鏡、青白磁小壺等の遺物を取り上げる。
10月17日	調査を打ち切り、現場を保存する（以上、第1次調査）。
10月21日	経筒、銅鏡等の遺物を独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所へ搬入する。X線調査の結果で、経筒内に8巻の経巻が残存していることが明らかとなる。

(2) 第2次調査

第2次発掘調査は、平成10年（1998）10月12日から12月25日にかけて実施した。調査は石垣区画内の経塚の把握と石垣との関係性、石垣区画周辺の遺物及び遺構の有無と経塚との関係性を明らかにするように進められた。

平成10年10月12日	発掘調査を開始する（第2次調査）。
11月16日	「石垣1」、「石垣2」を検出する。銅鏡片1点が出土する。

11月19日	第1区の中心部を「第1経塚」とし、第1経塚より東側に位置する常滑焼の甕がある経塚を「第2経塚」とする。
11月27日	第1経塚の西に「第3経塚」を検出する。 南北で石垣2が西へ延長されていることを確認する（「石垣2'」とする）。石垣2の北に「石垣3」を検出する。
11月30日	第2経塚の南東隅から短刀数本、北隅から青白磁小壺、北西隅から銅鏡を取り上げる。このとき、銅鏡及び短刀の下から銅銭が出土する。
12月3日	第2区南部に3段積み石垣を検出する（土層跡1）。 第1区第1経塚の底とみられるところに、備前焼甕の底部が出土する。経塚を構成する石の積み方を石組とする。石組のうち、側石のほとんどに遺物がはさまっており、取り除く。 第2経塚の側石の間には瓦器片がはさまる。
12月10日	第2区南部石垣の北側に土層跡2を検出する。
12月23日	現地説明会を開く。
12月25日	埋め戻し作業を完了する（以上、第2次調査）。

第3節 整理作業の経過

隅田八幡神社経塚の発掘調査成果は、『平成10年度 隅田八幡神社経塚発掘調査概報』（橋本市教育委員会 1999）にて報告されている。平成9年度（1997）から平成13年度（2001）には経筒・銅鏡・短刀・火打鎌・銅銭等の金属品及び紙本経の保存処理事業を実施した。令和4年度（2022）には、実施した出土品の再整理及び検討を行った。

(1) 保存処理の経過

まず、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所において、平成9年（1997）に発見された外容器に納入された経筒の調査を実施した。平成10年度（1998）から13年度（2001）にかけて、第2次調査で出土した金属器の保存処理を公益財団法人元興寺文化財研究所に委託した。また、銅鏡や紙本経について公益財団法人元興寺文化財研究所と橋本市教育委員会と和歌山県教育委員会及び専門家による検討会において、銅鏡の製作時期や紙本経の修復方法を検討した。

平成9年10月	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所でX線調査を実施し、第2経塚出土経筒内に8巻の経巻が良好に遺存していることが明らかとなる。
11月	公益財団法人元興寺文化財研究所で中性子ラジオグラフィ調査を実施し、経巻の軸部が鮮明に見えることが判明する。
平成10年度～平成13年度	国庫補助事業として、隅田八幡神社経塚出土遺物保存処理事業を実施する。
平成10年5月	公益財団法人元興寺文化財研究所にて経筒の開蓋作業を実施する。8巻中1巻を取り出す。
8月	同研究所にて、経筒から残りの7巻を取り出す。
9月	同研究所にて、紙本経を開く作業を実施する。
平成12年1月	紙本経をはじめとした出土品の検討を実施する。
3月	紙本経の保存処理仕様について、元興寺文化財研究所保存科学センターで「和

歌山県橋本市隅田八幡神社経塚出土経筒内紙本経の修復検討会」が開催される。経筒内の紙本経収納状況、書写年代、軸木が割軸になっていることなどが明らかとなる。紙本経の修復については、裏打ちし、最も現物に負担の少ない現代の表具様式を採用することなどが決まる。

4月～6月

坂田墨珠堂で、紙本経の修復作業が行われる。紙本経の復元には、繊維組成検査の結果に基づき、同質の紙を復元的に作成し、楊梅で染めた補修紙を用いた。表紙は矢車染紙で新調し、軸木は先端を墨で塗って使用した。また、八双・紐等を新調し、卷子装に仕立て紙掛紗に包んだ。



写真1 第2経塚出土経筒 開蓋前



写真2 第2経塚出土経筒 開蓋状況



写真3 第2経塚出土経筒内紙本経取り出し状況



写真4 第2経塚出土経筒内紙本経8巻集合



写真5 第2経塚出土経筒内紙本経埋納状況



写真6 第2経塚出土経筒 底板



写真7 第2経塚出土紙本経 開巻作業



写真8 坂田墨珠堂 作業説明状況



写真9 第2経塚出土紙本経
飯貼り作業



写真10 第2経塚出土紙本経
貼り合わせ

(2) 整理作業の経過

令和4年度(2022)に、『平成10年度 隅田八幡神社経塚発掘調査概報』(橋本市教育委員会1999)に未掲載の銅鏡や紙本経の調査成果を踏まえ、出土品の再検討及び隅田八幡神社経塚の発掘調査成果を再整理した。なお、出土品の実測・復元作業・写真撮影等の一部は有志による協力を得て実施した。

- 令和4年5月7日 あさもよし歴史館に、有志の協力者と出土品の確認と報告書の刊行及び今後の作業について協議した。
- 9月4日 山田地区公民館にて、中川あや氏(独立行政法人国立文化財機構奈良国立博物館)と吉川聡氏(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)を招き、整理作業の進捗報告と出土品の整理について指導を得た(写真11)。
- 12月1日 あさもよし歴史館にて、久保智康氏(独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館名誉館員)、中川氏を招き、出土品の指導を得た(写真14)。



写真11 検討会(令和4年9月4日)



写真12 復元作業



写真13 遺物撮影



写真14 検討会(令和4年12月1日)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

隅田八幡神社経塚は和歌山県橋本市に所在する(図1)。橋本市は和歌山県北東部の県境付近に位置し、北は和泉山脈を隔てて大阪府河内長野市と、東は東ノ川・落合川を境にして奈良県五條市に接する。

橋本市の地形は、大きく山地・河岸段丘・沖積地の三つに分けられる。北部には和泉山脈、南部には紀伊山地が位置し、橋本市のほぼ中央に一級河川の紀ノ川が東から西へと貫流する。山地から紀ノ川へと流れ込む小河川周辺には小規模の沖積地が広がるほか、紀ノ川兩岸には南北の山地に向かって3~4段の河岸段丘が形成されている。河岸段丘は、標高が低い場所から順に、橋本市妻・赤塚・芋生が1段目にあたり、2段目に隅田・河瀬・中道・真土、3~4段目に山田や柏原があたる。また、恋野地区の大部分や古佐田・市脇などの地域にも河岸段丘が認められる。

隅田八幡神社経塚は、橋本市の中でも東部の隅田町垂井に所在し、隅田八幡神社境内北側に位置する。隅田地区は紀ノ川から2段目の河岸段丘上にあたり、なかでも当該地は標高約120mの台地端部にある。そのため、隅田八幡神社経塚は南側一面に1段目の河岸段丘平坦面が広がり、極めて眺望が良好な地点に立地していると言える。

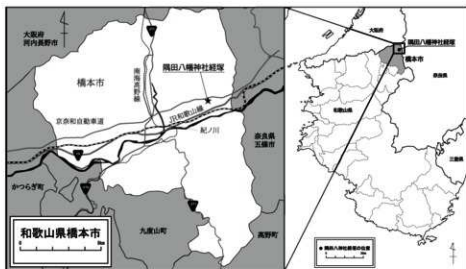


図1 和歌山県と隅田八幡神社経塚の位置

第2節 歴史的環境

(1) 隅田八幡経塚と周辺の遺跡

橋本市域の紀ノ川左右兩岸の河岸段丘上には多くの遺跡が存在する。縄文時代中期から後期の遺跡では、市脇遺跡、芋生小島遺跡、血縄遺跡、土井遺跡、北馬場遺跡、柏原遺跡がある。いずれも集落遺跡と考えられるが、明確な住居跡は確認されていない。市脇遺跡では縄文土器・サヌカイト裂石鎌のほか、石錘が出土し、柏原遺跡では県下でも出土例が少ない土偶が出土している。弥生時代前期から中期の遺跡では、垂井女房が坪遺跡、血縄遺跡、上田遺跡、市脇遺跡、東家遺跡、北馬場遺跡、名古曾Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡がある。血縄遺跡や上田遺跡では竪穴住居跡が確認さ

れ、柏原遺跡では方形周溝墓や堅穴住居跡が確認されている。垂井女房が坪遺跡では甕に別の土器が蓋をした形で甕棺が出土している。血繩遺跡では、弥生時代中期から後期の弥生土器、紡錘車や石廬丁等の磨製石器、石鏃や石錐・石剣等の打製石器等のほかに、瀬戸内海沿岸で出土例の多いイダコ壺が出土している。当該遺跡では、大阪沿岸との交易が考えられ、遺跡の立地からも紀ノ川河口付近にあることから紀ノ川流域で特別な意味を持った重要な遺跡と考えられる。

古墳時代前期から後期の遺跡では、陵山古墳、八幡宮古墳、上兵庫古墳群、市脇古墳群、市脇東勝那古墳群や東家遺跡がある。陵山古墳は和歌山県指定史跡であり、中期に築造された直径45mの県内最大の円墳である。当古墳は近畿地方で最古段階の横穴式石室をもち、埴輪片及び須恵器、土師器、鉄製武器や武具が出土している。八幡宮古墳は橋本市指定文化財であり、後期に築造された切石の横穴式石室をもち、原形が損なわれているが、円墳と考えられる。ほかにも、前期から後期の上兵庫古墳群、市脇古墳群や市脇東勝那古墳群等の古墳が確認されている。東家遺跡では、この時代の堅穴建物が確認されている。なお、同時代には隅田八幡神社に伝わる国宝の人物画像鏡が製作された。

古代では大化の改新をへて、中央集権的な律令国家体制の整備が進められ、都と地方の国府を結ぶ官道が整備された。橋本市域は伊都郡に属し、大和から紀伊・淡路国や四国の諸国をつなぐ南海道が通過していた。飛鳥・奈良・平安時代では、隅田地区及び高野口地区に条里が設定され、現在もその痕跡が残されている。また、古代寺院が存在したことが確認されており、和歌山県指定史跡の神野々廃寺跡、名古屋廃寺跡が知られている。神野々廃寺跡は塔跡が残されており、塔跡から火頭三尊仏が出土しているほか、複弁八弁蓮華文瓦や軒平瓦が出土している。名古屋廃寺跡も塔跡から、白鳳時代から奈良時代の複弁六葉軒丸瓦や三重弧文と偏行唐草文の軒平瓦が出土している。また金堂跡から名古屋廃寺跡は法起寺式伽藍配置であることが判明した。古佐田遺跡では遺構が確認できていないが、白鳳時代の複弁蓮華文の軒丸瓦と唐草文の軒平瓦が出土している。名古屋廃寺跡から北には石櫃が納められた奈良三彩（重要文化財）が出土した名古屋墳墓がある。ほかにも、飛鳥・奈良時代には柏原遺跡で、掘立柱建物跡、堅穴式石櫓、合わせ口式土器棺墓等が確認された。平安時代後期には、本書で報告する和歌山県指定史跡の隅田八幡神社経塚があり、経筒や常滑焼甕、銅鏡、青白磁小壺をはじめとした出土遺物に加え、長寛2年（1164）の記銘がある紙本経が埋納されていた。また、平安時代末期までに、橋本市域はいくつかの庄園に分かれており、現在の橋本市東部には隅田庄、中央部には相賀庄、西端の山田付近及び高野口町域を中心とする官省符荘があった。隅田八幡神社経塚は隅田庄にあり、隅田八幡宮（現在の隅田八幡神社）は隅田庄支配拠点のため、石清水八幡宮の別宮として創建された。

中世には、岩倉城跡、霜山城跡、岡山城跡、小峯寺砦跡、長敷城跡、銭坂城跡等の城跡があり、胡麻生館跡、東家館跡、高尾遺跡、堀坂氏館跡等の館跡がある。中世寺院跡では、小峯寺田境内遺跡や利生護国寺田境内遺跡、医王寺跡がある。代表的な遺跡では、岩倉城跡には濠、土塁、空堀が確認され、霜山城跡には濠が確認され、小峯寺砦跡には堀切が確認された。東家館跡では居館を囲む区画溝が確認され、瓦器、土師器小皿等が出土している。小峯寺田境内遺跡では黒色土器や瓦器、銅銭、鉄鏃、経石等が出土しており、利生護国寺田境内遺跡では室町時代の椀や茶筌、柄杓等が出土している。また、医王寺跡では、中世瓦のほかにわずかながら青磁皿、備前焼埴鉢等の破片が出土している

江戸時代の遺跡には、柏原遺跡、橋本一里松の株跡がある。柏原遺跡では、鑄造に関連する土坑群が確認されている。また、天正13年（1585）には、高野山中興の僧 木食応其によって橋本

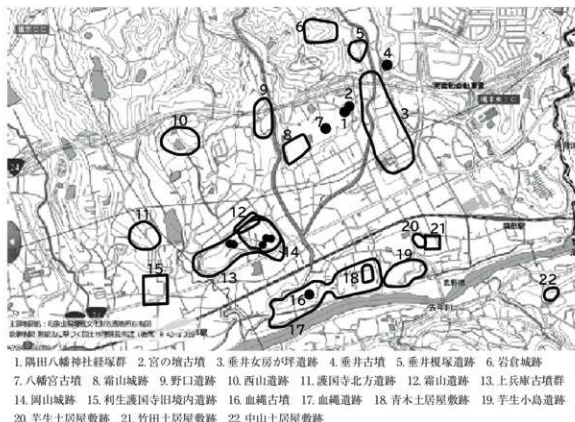


図2 隅田八幡神社経塚と周辺の遺跡
(和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』(令和5年1月31日現在)に加筆・番号は改変)

町が開かれ、水陸交通の要として、紀伊・大和・河内の物資集散地として繁栄し、この地域の政治・経済の中心地となった。

(2) 隅田八幡神社の沿革

隅田八幡神社経塚は隅田八幡神社の境内に築かれていることから、関連が深いとみられるこの神社の沿革について整理する。隅田八幡神社は、日本最古の金石文の一つとされる国宝人物画像鏡を神宝とし、ほかにも当地域の研究に欠かせない隅田文書(和歌山県指定文化財)のうち隅田八幡神社文書を所蔵する。また、隅田八幡神社の秋祭(和歌山県指定文化財)、正月の管祭り(橋本市指定文化財)といった神事を今に伝えるなど、隅田地区にとって極めて重要な神社である。

当社の造営時期は明らかではないが、天明5年(1785)に藩へ提出した『隅田八幡宮由来略記』の控えによると、造営は貞観年中(859~77)とされている。また、当社は石清水八幡宮の隅田庄支配拠点のため、石清水八幡宮の別宮である隅田八幡神社として創建された。当社の存在が文献史料に登場するのは12世紀初めであり、長治2年(1105)には在地の有力豪族「長 忠延」が別宮俗別当職として登場する。また、彼は天永2年(1111)に隅田荘公文職にも任じられ、この2つの役職を持ったことから信仰と行政を一手につかさどる立場となったと考えられる。彼の子の忠村は藤原姓を名乗り、これらの職はその子孫に受け継がれた。そして藤原氏は鎌倉時代になると「隅田」を名字とし、当社を氏社として、饗会や神事芸能の運営を行った。隅田八幡神社経塚発見の契機となる元中2年(1385)銘の宝篋印塔が建てられた時期は隅田一族が台頭していた時期と重なる。

やがて、隅田八幡神社の別当として勢力を誇示していた隅田氏が滅ぶと、葛原氏や上田氏が中心となって武士団「隅田一族」を形成するようになった。

近世には、『紀伊名所図会』によると、当社が荘中16村の産土神として祀られるようになることが記される。

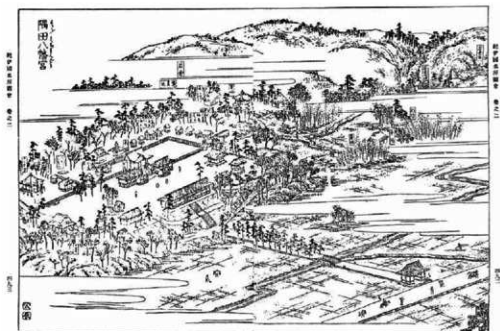


図3 隅田八幡神社 出典：『紀伊名所図会』

(3) 隅田八幡神社と寺

隅田八幡神社経塚が成立したとされる平安時代院政期に、隅田八幡神社と関わりがあったと考えられる寺は、神社に隣接する大高能寺と行基開創の「近畿四十九院」の一つとされる利生護国寺である。大高能寺は真言宗の寺であり、隅田八幡神社と同様に建立時期は明らかでないが、隅田八幡神社の神宮寺として神社と同時期に成立したものと考えられる(岩倉 1992)。「紀伊名所図会」と同じく、近世の『紀伊統風土記』によると、大高能寺は隅田八幡神社の別当であり、仁和寺の末寺に編成されていることが記されている。また、当寺は隅田をはじめとした周辺の村々21寺を末寺としていることから、地域の中本山的な立ち位置であったことがうかがえる。明治時代に入ると、明治維新の神仏分離令によって隅田八幡神社は大高能寺と分離し、現在に至っている。

利生護国寺は奈良時代創建とされ、一時期荒廃したものの、弘安年中(1278~88)に北条時頼によって再建され、弘安8年(1285)の「沙弥願心寄進状案」によると伊都地域有数の寺院として知られていることが記載されている。また当寺は奈良県にある真言律宗西大寺の末寺であり、西大寺の寂尊が利生護国寺の興隆に関与したとみられ、彼の弟子である忍性によって鎌倉幕府の祈禱寺34か寺の一つに挙げられている。隅田八幡神社の別当として勢力を誇示していた隅田氏が滅び、葛原氏や上田氏が隅田氏に代わり、武士団「隅田一族」が勢力を強め、当寺はその氏寺になったといわれている。

このように隅田八幡神社経塚が形成されたと考えられる平安時代院政期から鎌倉時代には在地の有力豪族である隅田一族の存在や隅田八幡神社・大高能寺・利生護国寺といった有力な寺社が存在しており、同時期の地域信仰との関連が想定される。

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

(1) 調査前の状況

隅田八幡神社経塚が発見された場所は、隅田八幡神社本殿の北に位置する。当地は「御廟塚」または「神功皇后遺物塚」と呼ばれているが、江戸時代後期に編纂された『紀伊続風土記』や『紀伊国名所図会』にはこれらの名称は見られず、名称は明治以降のものと考えられる。『紀伊国名所図会』には隅田八幡神社の絵図があり、当地の様子をある程度うかがい知ることができる。これによると、神社内の建物の構成は、鐘楼など一部の建物を除いて、現在と大きく変わらず、本殿の背後には末社が並ぶ。本殿の真後ろには名称等は記されていないが、塙で囲まれた石塔が描かれる。この石塔は「元中第二乙丑(1385)五月 日」銘の宝篋印塔とみられる。

当地に経筒が発見される前の状況は、一辺約5mの石垣が4面あり、中心には宝篋印塔が建てられていた。石垣の上には南面の一部を除き、四方に土塙がめぐっていた。なお、石垣の南面は神社本殿と背後の微高地を区画する東西の石垣の一部を兼ねており、この東西の石垣の上には末社が並ぶ。当地の石垣の上面は末社のある石垣の上面より高く造られており、石垣の上は塚状に盛り上がっていた。

宝篋印塔銘文(橋本市歴)
(正面) 右爲志趣者天長
地久御願圓滿
(左面) 殊十方且那奉加
施主現當二世所
(背面) 願成就法界有情
無情皆成佛道也
(右面) 元中第二乙丑五月 日
勳進沙門正願

(2) 調査の目的 (図4)

平成9年(1997)8月8日に橋本市教育委員会は隅田八幡神社から経筒発見の報告を受け、同年9月24日から10月17日にかけて、経塚1基(第1経塚)の記録保存することを目的とした緊急的な発掘調査を実施した(第1次調査)。その結果、経塚が2基(第1経塚、第2経塚)を確認でき、そのうちの1基(第2経塚)には良好な保存状態で経筒が検出された。また、2基の経塚以外にも複数の経塚が存在する可能性があったため、記録保存による発掘調査を中断し、平成10年(1998)には国庫補助金及び和歌山県費補助金の交付を受け、石垣区画(石垣1)内の経塚の構造把握、石垣1周辺の遺構の有無の確認を中心とした発掘調査を実施した(第2次調査)。

(3) 調査区の設定 (図5・図6)

第2次調査では、一等水準点(024-089)を用いて、調査区を3地点設定した(図5)。調査区は、本殿北側にある一辺約5m四方の石垣に囲まれた範囲を第1区とし、第1区北側石垣から北の社叢に向けた東西約1.3m、南北約11.9mの範囲を第2区とし、第1区西側石垣に接する東西約1.45m、南北約0.8mの範囲を第3区とした。第1区の石垣の中心を(0,0)とし、これを通る南北(N0、S0)及び東西(W0、E0)を主軸と設定して、主軸から東西南北2mずつにグリッドを設定した。

発掘調査は、石垣1の南面石垣の北側に集積する礫の除去と石垣1の範囲確認を行なった後、石垣区画内の経塚の構造把握及び石垣1周辺の遺構の有無の確認のため、石垣1内を掘削するとともに、第2区及び第3区を設定した。

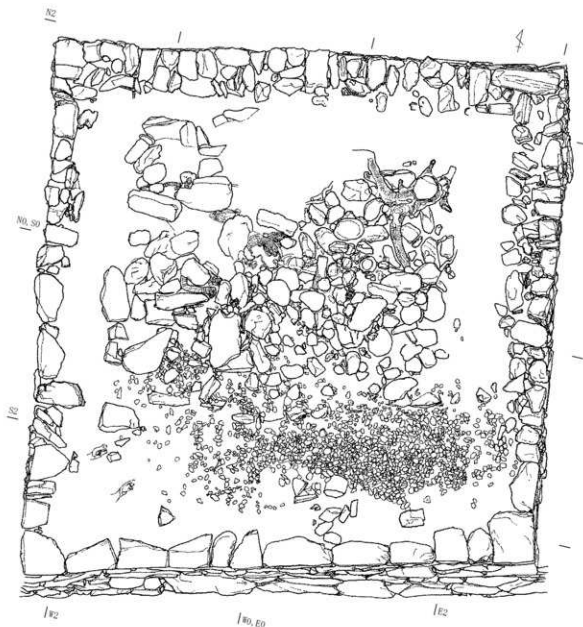


図4 経筒発見時（第1次調査）平面図（S-1/40）

第2節 調査成果

本節では、層序及び遺構について記載するにあたり、「平成10年度 隅田八幡神社経塚発掘調査概報」（橋本市教育委員会 1999）の表記に準拠している。本報告では、経塚の周りを囲む石積を石垣とする。経塚は外容器及び経筒を埋納するため、底に平たい石を据え、その周囲にも石が囲むように配置されている。この底にある石と周囲をめぐらす石の積み方を石組とする。用語に関する記載については経塚を囲む石組に関する記載については石と表記し、このほかは礫に統一する。

(1) 第1区（図5・図7）

第1区は、本殿の北側に位置する約5m四方の石垣内（石垣1）に設定した調査区である。第2次調査前の状況は、石垣1の区画内の南側上面には長さ約5～10cmの礫が集中して散乱し、石垣



図5 粟田八幡神社境内とトレンチ配置図 (S=1/1000)

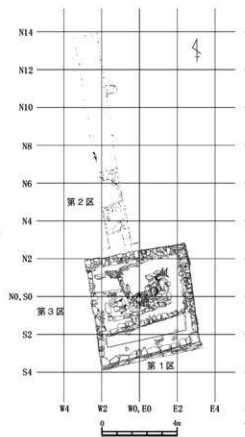


図6 グリッド図 (S=1/200)

1区画内の中心付近と北東部に長さ10cm以上の大きさの礫が散乱していた。宝篋印塔は石垣1区画内の中心に位置していた。調査では、石垣1区画内の南側の礫の集積部の堆積状況を確認した後、経塚及び石垣の範囲確認を行った。調査の結果、第1区は経塚が3基(第1~3経塚)と石垣3基(石垣1~3)が検出された。3基の経塚は、石垣1のほぼ中央に第1経塚を配置し、第1経塚から東に約50cmの位置に第2経塚を配置し、第1経塚から西に約80cmの位置に第3経塚を配置する。石垣の配置は石垣1の南面石垣に平行して北に約1.5mの位置に石垣2・2があり、石垣2の南面石垣に平行して北に約70cmの位置に石垣3がある。

石垣1 (図7・図8・図9)

石垣1は本殿の北側に位置する。石材はおおむね緑泥片岩で、一辺約5m四方のほぼ正方形に造られていた。第2次調査以前は石垣1上面に、石垣1に沿って土層がめぐっていた。石垣1は4面あり、東西南北に面をもつ。基盤面が平らではなく、北西から南東へ傾斜している地形となっているため、4面の石垣は天端をほぼ同じ高さに揃うように石垣を組み、面によって石垣の段長が異なる。

北面石垣は東端が約40cm、西端が約18cmの高さに礫が積まれている。石垣の段長及び展開範囲を把握するため、北面石垣の周辺を調査した結果、北面石垣の下から江戸時代のものとみられ

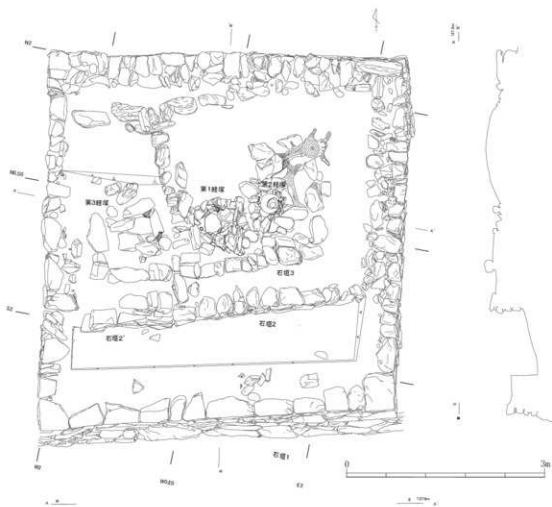


图7 第1区 平面·断面图 (S=1/60)

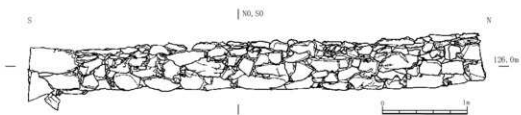


图8 第1区石垣1 东侧立面图 (S=1/40)

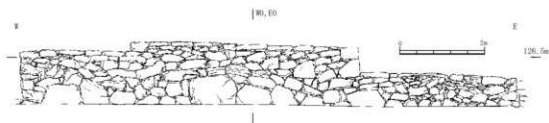


图9 第1区石垣1 南侧立面图 (S=1/80)

る瓦片が出土した。

西面石垣は西に隣接する末社との区画のために、約20cmの高さでおおむね2段で積まれている。

東面石垣は約50cmの高さで、3~4段で礫が積まれている。東面石垣は南端で65cm、北端で55cmの高さに積まれている。石垣は野面積みであり、1段目に幅約20~40cmの礫を敷き、2段目以降は礫が小さくなり、隙間に数cmの礫を詰めている。

南面石垣は打込接で、4~5段に礫が積まれている。石垣の東西端部約60cmは隣接する末社の石垣を兼ねている。最下段には幅約1m、高さ約60cm又は幅約80cm、高さ約45cmの大形の礫を据え、大形の礫の上に幅30~60cm、高さ20~30cmの礫を積み、石垣の隙間には数cmの礫を詰めている。南面石垣はほかの3面の石垣と異なり、大形の礫を据えた積み方をしていることや、隣接する末社と石垣を共有していることから、4面の石垣の中で最後に造られたとみられる。

石垣1及び石垣2の間には約5~10cmの河床礫が大量に敷き詰められており、礫の堆積状況の確認のためにS2から北に20cm、E2から東に約50cmの位置から東西に長さ約4.4m、南北に幅約0.65mのサブトレンチを設定した(図7・図10)。層序は表上下で3層に大別でき、第1層は長さ5~10cmの礫を大量に含む(敷石)黒色土礫層が厚さ10~20cm堆積する。第2層は黄色土含む下層礫層が厚さ30~40cm堆積し、下面からは瓦器片が検出された。なお、

大ききの揃った礫が大量に敷き詰められていることから軽石の可能性も考えられたが、墨書等は認められなかった。第3層は黄灰色粘質土層が厚さ15~25cm堆積する。土層断面の観察結果から、これらの礫は石垣2の南面から石垣1の南面石垣の裏側に向かって、南に斜傾して堆積していることが明らかとなった。このことから大量の礫は石垣1が築造された際に、石垣2の南面石垣と石垣1の南面石垣の間を土とともに敷き詰めたものとみられる。

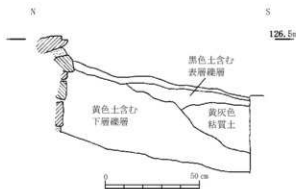


図10 第1区 石礎部土層断面図 (S=1/20)

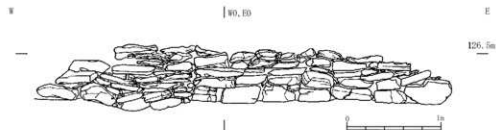


図11 第1区石垣2 南側立面図 (S=1/40)

石垣2 (図7・図11)

石垣2は石垣1の区画内で、石垣1の南面石垣から約1.5m北に配置されている。石垣は一辺が約3.3m(10尺=1丈)のほぼ正方形に造られている。石垣2の南面石垣は、E2より東に約45cm、S2より北に約1.2mの位置に約4.3mの長さで残存している。南面石垣の東西の両端は、石垣1の築造時に切り取られたものとみられることから、石垣1に先行する石垣と考えられる。

なお、南面石垣の西約1.5mの長さの石垣は後に継ぎ足された形跡がある（石垣2）。西面石垣はS0より南に約1.4m、W0より西に約0.3mの位置から北に約3.1mの長さで造られ、北面石垣はN2より南へ約0.6m、W0より西に約1.3mの位置から約3mの長さで造られている。東面石垣はN2より北へ約0.5m、E2線上の位置から南へ約3.3mの長さで造られている。

石垣2の南面石垣は約50～80cmの高さで、おおむね4段に礫が積まれている。野面積みであり、石垣の西と東で積み方が異なる。東側の石垣は長さ約3m、高さ約50cmであり、1段目に幅約30cm、高さ約15cmの礫が積まれている。4段目では幅約20cm、高さ約10cmの礫が並ぶ。下段から上段へ積む礫の大きさは小さくなる。礫の積み方が平たくするように積まれていることから野面積みの中でも布積である。西側の石垣は、長さ約1.5m、高さ約80cmであり、4段に礫が積まれている。大きさの異なる礫を積み、隙間に数cmの礫を詰めていることから野面積みの中でも乱積である。石積の方法が東西で異なることから、石垣2の一部は石垣2が造られた後に、さらに西側約1.5m継ぎ足されたと考えられる（石垣2）。

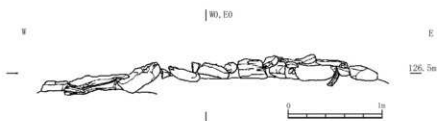


図12 第1区石垣3 南側立面図 (S=1/40)

石垣3 (図7・図12)

石垣3は石垣1の区画内で、石垣2の南面石垣に平行して、石垣2の南面石垣から約70cm北に配置されている。石積は2～3段の平積みで、東西長約3.5m、高さ約20cmである。石垣の天端と礫の大きさが不揃いであるが、礫はいずれも幅約20cm以上の礫を用いる。石垣3の南面石垣の西側は石垣2に延びており、石垣1の西面石垣の手前で北へ約1m折れ曲がることを確認した。また、石垣3の南面石垣の東側も北へ約1.5m折れる部分があることを確認したが、石垣3の北側は石材が残存していないことから石垣全体の範囲は明らかでない。北側は石垣1の築造によって切り取られたとみられることから石垣3は石垣1に先行すると考えられる。

第1経塚 (図7・図13・図14)

第1経塚は第1区のはほぼ中央(0.0)にあたり、検出当時、元中2年の宝篋印塔の真下にある。経塚は通常、経筒を外容器に入れ、小型の石室や土坑に納め、その上に土や石を盛った構造をとる。第1経塚は直径約30cmの土坑状の穴を掘り、長さ約30cmの板石を底石として据え、周囲を囲むように長さ約10～25cmの石が配置されている。石組の高さは20cmである。石組の西側では2～3個の石を高さ約25cmまで積み、石組の東側では1～2個の石を高さ約10cmまで積んでいることが確認された。第1経塚の底石検出面の標高は約126.3mである。第1経塚の上面では南東に長さ約15～20cmの石が7個、北西に長さ約15～20cmの石が5個確認された。なお、遺構の保存状況は良好ではない。

経塚発見の契機となる破損した経筒は宝篋印塔の下に埋められていたとみられ、第1経塚のほ

は中心から出土した。経筒は筒身が大きく破損しており、経筒に合致する大きさの蓋は確認されず、筒身の中に土石が詰まった状態であった。出土した経筒をX線写真で調査した結果、経筒の中には小型の破損した経筒の身や環状部品、経筒の蓋、不明部品、銅鏡4点が入っていた。経塚の石組の間や周辺からは須恵器甕や備前焼甕の破片が散乱した状態で検出している。このほか、表土直下から青白磁合子の身が1点、第1経塚付近及び石組の最下層から銅鏡が出土している。さらに第1経塚の南西約50cmの位置にガラス小玉2点が出土しているが、この地点が第1経塚と第3経塚の間であり、確実に第1経塚に伴う遺物であるかは不明である。

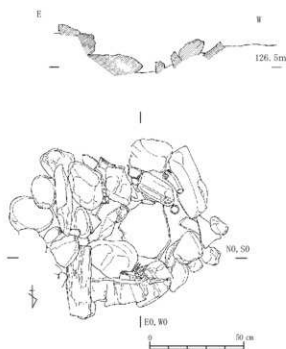


図13 第1経塚 平面・断面図 (S=1/20)

第2経塚 (図7・図15・図16)

第2経塚はN0から北に35cm、E2から西に約1.3mに位置している。第2経塚は直径20cmの土坑状の穴を掘り、長さ約25cmの板石を底石として据え、周囲を囲むように長さ10～20cmの板石が7～8個立てかけられている。石組の高さは約30cmである。石組の西側では約40cmまで積み、石組の東側は約35cmまで積んでいることが確認された。第2経塚の底石の検出面の標高は約126.35mである。

第2経塚の石組は上層と下層で2つの時期に分けられると考えられる。上層は石組の上面から斜めに立てかけた板石の検出上面までの厚さ約15cmを指し、下層は底石の周囲を囲む板石から底石検出上面までの厚さ約25cmを指す。下層では、常滑焼甕が底石に接した状態で検出され、経筒1点、銅鏡3点、青白磁小壺2点(身1点、蓋1点)が納められていた。底石の周囲に立てかけられた板石は外容器である常滑焼甕を据えるために配置したものと考えられる。下層の西側には銅鏡4点、青白磁小壺蓋1点、短刀2点、銅鏡が出土している。上層の石組の間には中世の瓦器片、短刀片が挟まって検出された。上層の常滑焼甕の頭部や口縁部付近では南東に銅鏡2点、青白磁小壺蓋3点、青白磁小壺身1点、短刀11点、青白磁合子、火打鎌、銅鏡等が出土している。

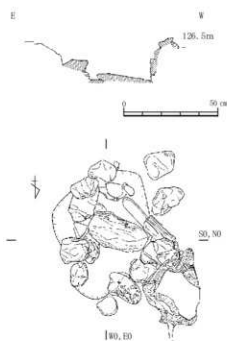


図14 第1経塚 底石検出状況 (S=1/20)

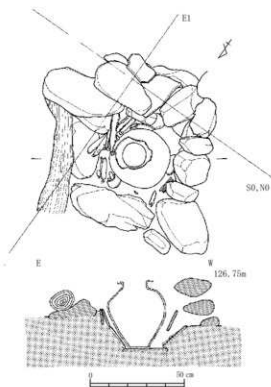


図15 第2経塚 平面・断面図 (S=1/20)

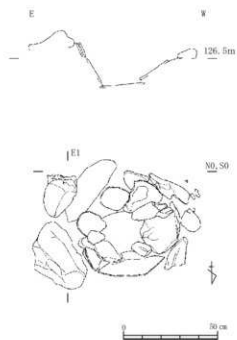


図16 第2経塚 底石検出状況 (S=1/20)

なお、常滑焼甕の外容器とその内容物は検出時に外容器に傾きが多少あるものの、外容器が底石に接した状態であることや外容器内外の納入物の保存状態が良好であることから、後世に大きな改変を受けなかったと考えられる。

第3経塚 (図7・図17)

第3経塚はS0から南に30cm、W0から西へ約1.1mに位置する。第3経塚は直径35cm以上の土坑状の穴を掘り、長さ35cm以上の平石を据え、周囲を囲むように長さ約20~35cmの石を配置する。上部は削平されたとみられ、確認できる石組の高さは5~10cmである。第3経塚の底石検出面の標高は約126.8mであり、他の2つの経塚の底石検出面の標高に比べ、約50cm高い位置にある。第3経塚からは銅鏡3点、火打録1点が検出された。銅鏡3点のうち1点は底石の上から検出され、残りの2点は表土直下から検出された。経筒は確認されなかった。経塚の位置や石垣の配置から、第3経塚は第1経塚及び第2経塚の造営後に造られたものと考えられる。第1経塚及び第2経塚と異なり経筒や外容器が出土していないことや、遺構の遺存状況が悪いため、経塚とは異なる性格で

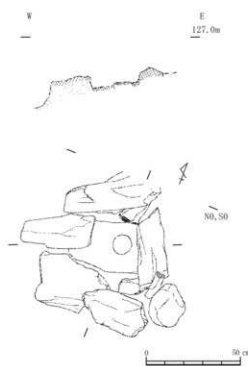


図17 第3経塚 平面・断面図 (S=1/20)

ある可能性も考えられるが、ここでは、第1経塚及び第2経塚と同様に銅鏡や火打鎌が出土していること、土坑状の穴の底部に平石を据えその周囲に石組を配置していることから、経塚と考える。

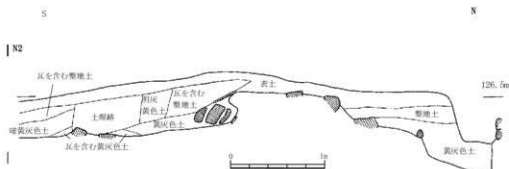


図18 第2区 西側土層断面図 (S=1/40)

(2) 第2区 (図6・図18・図19)

第2区は第1区の石垣1の北面石垣に接しており、北の社叢に向かって東西約1.3m、南北約11.9mに設定した調査区である。調査の結果、境内と北側の社叢を区画するものとみられる石列を伴う土堀跡を2箇所確認した(土堀跡1・2)。土堀跡より北側は調査以前に盛土がされており、地盤が高くなっているが、遺構は認められなかった。

層序は3層に大別でき、第1層は表土で、厚さ10~20cm堆積する。第2層は瓦を含む整地土層で、厚さ20~30cm堆積する。第3層は瓦を含む黄灰色土層で、厚さ20~50cm堆積する。

土堀跡1

第2区のN2から北へ1.3mの地点で南側に面をもつ石列と、N4から北へ0.5mの地点で北側に面をもつ石列を伴う土堀跡が検出された。南面の石列は、平らな礫が2~3段積み上げられている。北面の石列には楕円形の礫や平らな礫が2~3段で積み上げられている。調査前に、第1区に土堀がめぐっていたことから境内と北側の社叢とを区画する土堀跡と考えられる。

土堀跡2

N6から北へ0.3mの地点で幅約0.5mの2列に並んだ石列が検出された。2列とも礫が5個ずつ並び、土堀跡1と同様、境内と北側の社叢とを区画する土堀跡と考えられる。土層断面の観察の結果、表土直下に第3層から近世の瓦を検出したことから、土堀跡2は近世まで存続したものと、推定される。

(3) 第3区 (図6・図20・図21)

第3区は、第1区の西側に設定した東西約1.45m、南北0.8mの調査区で、第1区の石垣1の西面石垣の展開範囲のために設定した。第3区の西端で、W4から西へ約0.2mの地点で、南北に連なる石列が表土直下で検出された。石列は4個の礫の東面が検出され、礫は大きいもので幅約25cmである。調査当時、地表においても石列が認められた。石列は焼土や炭の混じる土で埋められており、時期は不明であるが、火災の後に整地されたと考えられる。また、石列は地表の南

側に土堀があったことから第2区と同様に、石列を伴う土堀跡であると考えられる。

W3から東に約18cmの地点に東西約1.1m、南北約0.4mのサブレンチを設定した。層序は3層に大別でき、第1層は表土で、焼土・炭・瓦片を含む整地土層が厚さ約20cm堆積する。第2層は黄灰色土層で厚さ約40~50cm堆積する。第3層は地山で、黄色粘質土層となる。

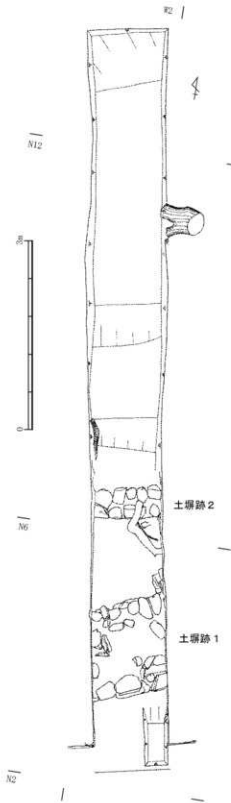


図19 第2区 平面図 (S=1/60)

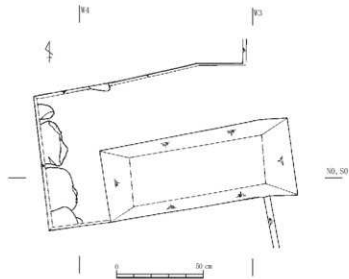


図20 第3区 平面図 (S=1/20)



図21 第3区サブレンチ 南側土層断面図 (S=1/40)

第4章 出土遺物の検討

第1節 第1経塚出土遺物

(1) 概要

第1経塚からは、備前焼甕1点(1)、須恵器甕1点(2)、経筒2点(3、7)、経筒蓋1点(5)、環状部品1点(4)、不明部品1点(6)、銅鏡4点(8~11)、青白磁小壺蓋1点(12)、青白磁合子身2点(13、14)、銅銭11点(15~25)出土している。不時発見であるため、経塚の一部は破壊されており、備前焼甕と須恵器甕は第1経塚から散乱した状態で検出された。経筒1点(3)は出土時に大きく破損しており、蓋は確認されておらず、中に土石が詰まった状態であった。経筒の中には、蓋1点(5)、小型経筒1点(7)、環状部品1点(4)、銅鏡4点(8~11)、不明部品1点(6)が納められていた。第2次調査では青白磁合子身2点が第1経塚を構成する石組の間で出土した。銅銭は第1経塚付近及び石組の底面や石垣2周辺で出土している。

(2) 出土遺物

1. 備前焼甕・須恵器甕 (図22・写真図版7)

1は備前焼甕で、ほぼ完形に復元できた。口径31.8cm、高さ62.3cm、胴部最大径は60.2cmである。口縁部は外反し、その端部を外側に折り返して帯状の玉縁(たまぶち)とする。ごく短い頸部は直立する。また、肩部の張りはそれほど顕著ではなく、胴部の最大径がやや下位にあり、時期の下るものと比べるとなだらかな印象の器形である。焼成は良好で堅致である。口縁部から胴部中位の外面には自然軸がみられる。底部は平底である。本品は、口縁部の形態や、肩部の屈曲が強くないこと、胴部最大径もやや下位であることなどの点からみて、備前焼における編年ではⅣ期併行とみられ、14世紀に比定される。

2は東播系須恵器もしくは河内和泉系瓦質土器の甕と考えられる。第1経塚の石組の間や周辺から破片が検出され、復元した結果、口径18.6cm、器高19.6cmと小型のものである。口頸部はくの字状に屈曲させ、口縁端部には横方向のナデを施している。外面は、頸部から胴部にかけて斜め方向のタタキ目が施されており、底部まではナデ調整が施されている。体部は球体で、底部は丸底である。内面は、全体的にナデ調整により仕上げられている。以上の特徴から、14世紀代に属すると思われる。

2. 経筒及び関連部品 (図23~24・写真図版8~11)

第1経塚からは経筒及び関連部品が出土している。筒身(3)は下半部を中心に一部欠損している。筒身(3)の内部には、蓋1点(5)、小型経筒1点(7)、環状部品1点(4)、銅鏡4点(8~11)、不明部品(6)が納められていた。

3は、銅板製経筒の筒身である。筒身の保存処理後の復元径は12.2cm、復元高は25.3cmである。筒身は、厚さ0.6~0.8mmの銅板を丸めて、幅0.5~0.8cmの合わせ部をつくり、22ヶ所を鉋留めして筒状とする。鉋頭は平らで、直径0.3~0.4cmを測る。鉋頭の平面形状にはばらつきがみられる。筒身の外側には、上端(口縁)に蓋もしくは帯金状の部品が装着されていた痕跡が幅1.7cmで残る。底板は、入れ底である。円形の銅板の端部を約0.5~0.6cm立ち上げ、筒身の内側に嵌めた後、引き合わせ部を1.5~2cm間隔で24ヶ所鉋留めし、固定する。

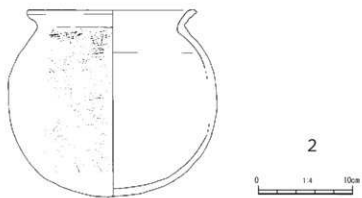
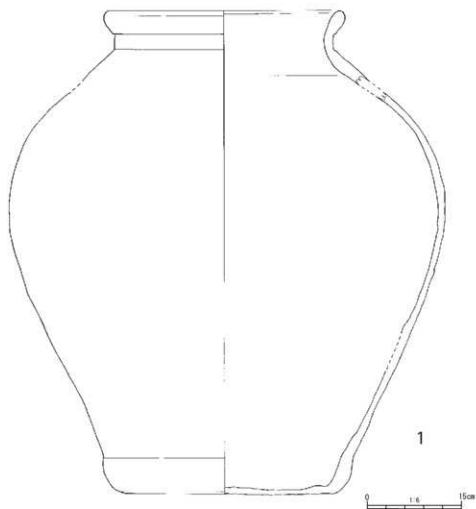


図22 第1経塚出土 備前焼甕 (S=1/6)、須恵器甕 (S=1/4)

4は、厚さ1mm、幅1.81cmの短冊状の銅板を直径12cmの環状にした環状部品である。一方の長辺には、幅2mm×長さ2mmの方形の突起が等間隔に8箇所作り出される。このうち1点は突起部が欠損しているが、残りの7点のうち4点は内方向に、3点は外方向に折れる。

環状部品は、その直径が経筒の筒身(3)の径とほぼ一致する。また、環状部品の幅と筒身(3)の上部に認められる帯状の装着痕跡の幅が一致することからも、この部品は筒身(3)の上部に嵌められていた可能性が高い。同様の事例は、福岡県久留米市稲荷山経塚出土の銅製経筒にもみられる。稲荷山経塚では、本部品と類似する環状にした短冊状の銅板を、一方の長辺に小さな切残し部分を7ヶ所作り、蓋側に入れた切れ込みに差し込んだ後、蓋からはみ出した部分を曲げて留めている(小澤 2008)。このことから、本部品も本来は突起を差し込む天蓋が存在し、組み合わせて蓋として使用していた可能性が考えられる。ただし、今回出土した遺物の中には天蓋に相当する銅板が確認されないことや、出土時にこの環状部品の突起部が蓋として用いる場合とは逆の下方に向けた状態で、筒身の内部に落ち込んでいた状況などから、使用方法については不明な点も多い。

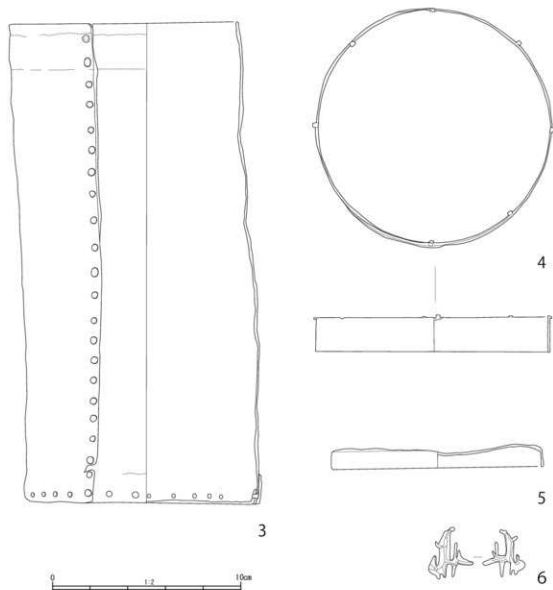


図23 第1経塚出土経筒①及び関連部品 (S=1/2)

5は経筒の蓋である。筒身(3)の内部から出土した。直径11.2cm、高さ0.9cm、厚さは0.9cmである。円形の銅板の端部を約0.7~0.9cm折り曲げた被せ蓋である。蓋の直径から、筒身(3)と組み合わせるものではなく、別の筒身の蓋であったとみられる。

6は筒身(3)の内部から出土した銅製の不明部品である。用途は不明である。

7は小型の経筒の筒身である。筒身(3)の内部から出土した。筒身は押し潰され大きく破損し、変形している。保存処理後も完全な形状に接合することができなかったが、接合されていない筒身の上半部の破片も全て遺存していた。筒身は、直径6.0cmの円形を呈し、復元高13.7cm、厚さ0.9mmの小型の銅鑄製経筒である。筒身外面上部には、「妙法蓮華經全部」と7文字の銘文が刻まれている。文字は、1文字が約1.0cm×約1.0cmで、筒身に対してやや斜めに配置されている。通常は「妙法蓮華經卷部」などと書くことが多いので本例はやや特殊である。嘉禎2年(1236)成立の「如法經現修作法」によると、妙法蓮華經一部八巻をただ一卷に巻き上げた場合、外題に「妙法蓮華經全部」と記すとある(『大正新修大藏經』第84巻894頁)。ただし出土例では「妙法蓮華經全部八巻」と記す例もあるので(福岡県遠賀郡芦屋町山鹿出土、徳治3年(1308)銘経筒、『経塚遺文』東京堂出版、1985年、194頁)、通常の妙法蓮華經のように一部八巻を納めた場合でも、このように表記することもあるのかもしれない。

筒身内側には、全面に横方向のケズリが施されているが、口縁端から幅0.4cmの範囲にのみ縦方向の研磨が施される。

底板は、直径5.8cmの円形の銅板で、筒身の内側に嵌め込まれている。底板を嵌め込んだ後に、

筒身下端を約0.1cm内側に折込み、底板を固定している。底板の内側には、複数の円形状の痕跡がわずかに認められることから、経筒内に経巻が納められていた痕跡である可能性が考えられる。高、出土時にはこの小型経筒の底板の外側に、錆とともに紙が付着していたことが確認されている。出土後に保存処理を実施し、筒身と同様に底板にも銘文が確認された。銘文は、底板の下半分に3行確認でき、右から「二十二日／三月／沙門良禪」となる。文字は草書体で1文字約0.6~0.8cm×

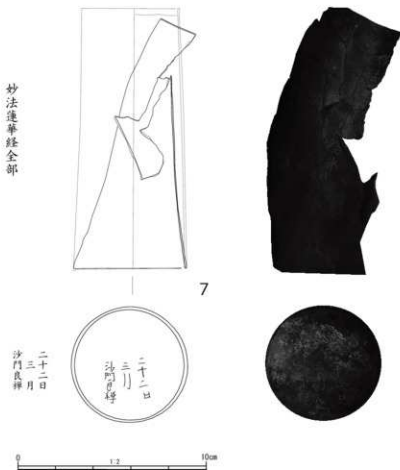


図24 第1経塚出土経筒② (S-1/2)

0.4~0.5cm、線刻はX線にも写らないほど浅くて薄い。文字の配置や内容から、底板の上半部にも線刻が施されている可能性が高いが、線刻が薄いことや錆などの影響もあり、上半部にも銘文が刻まれていたかについては確認できなかった。

銘文からは納入年代は明らかにならなかったが、本品は高さ13.7cmの小型の経筒であることから、鎌倉時代以降に流行する六十六部型の廻国納経の経筒など、中世の納経に伴う経筒である可能性が高い。ただし、内容器である経筒は、筒身に蓋が伴うものであるが、今回の出土品の中に小型経筒の蓋に該当するものは確認されていない。このことから、この小型経筒が一般的な経筒の使用法で使用されたものであるのか、あるいは埋納時の状態を保っていたかどうかについては疑問が残る。

3. 銅鏡 (図25・写真図版12~15、93)

銅鏡は直径、縁高、界圏径、重量を測る。文様名称は「橋本市史民俗編・文化財編」(橋本市 2005)に準拠した。鈕座及び縁の型式は「和鏡」(中野 1969)及び「和鏡の研究」(広瀬 1974)の区分に従った。第1経塚出土の銅鏡は4点(8~11)あり、いずれも経筒(3)内に納入されて

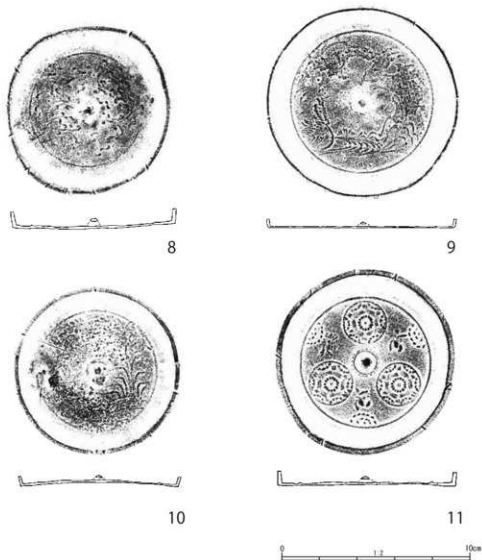


図25 第1経塚出土銅鏡 (S=1/2)

いた。4点それぞれの製作年代が異なると考えられ、11世紀後半から13世紀代と約200年の時期差がみられる。

8は瑞花唐草鏡である。面径8.6cm、縁高0.8cm、界圏径6.1cm、重量111.43gを測る。鈕は素鈕である。文様全体が不明瞭だが、唐草文が見られる。縁は細縁直角式である。鏡面及び外区に赤褐色の物質が付着している。11世紀後半～12世紀前半のものと考えられる。

9は荒磯松飛雁鏡である。面径9.7cm、縁高0.5cm、界圏径7.6cm、重量56.46gを測る。鈕は振菊座鈕である。画面下方に州浜文と雁が1羽、画面右側に岩山と松が配置されている。画面上部は不明瞭である。このような文様は蓬菜文に分類される。縁は細縁直角式である。12世紀中葉から後半のものと考えられる。

10は州浜秋草双鳥鏡である。面径8.3cm、縁高0.4cm、界圏径6.3cm、重量39.81gを測る。鈕は花蕊座鈕である。画面端に流水文があり、画面下方に州浜と薄、内区左上に草、鳥が2羽配置されているが不明瞭である。縁は細縁外傾式である。鏡面に凹みがあり、鈕周囲と上下方向に鉄錆が付着する。13世紀前半から中葉のものと考えられる。

11は浮線綾菊丸文散蝶鳥鏡である。面径9.5cm、縁高0.6cm、界圏径7.1cm、重量83.59gを測る。鈕は菊花座鈕である。画面端に形式化された流水文があり、流水文の穂先は上下交互に配置される。画面内には亀甲菊丸文が3つ、鳥2羽が鈕を挟んで対称に配置され、画面左側に花が配置されている。このような文様は有職文に分類される。縁は中縁直角式である。13世紀代のものと考えられる。

4. 青白磁小壺・青白磁合子 (図26・写真図版16)

青白磁小壺の年代観は「博多 170 一博多遺跡群第203次調査報告」(福岡市教育委員会 2021)で報告される、11世紀後半から12世紀後半の遺構(SK080030、SK080644、SK090725)からの出土例を参考に、伝世の可能性を考慮し年代幅を持たせたものとした。

12は青白磁小壺の蓋である。完形である。蓋の上面は施文せず平滑に仕上げられており、中央に管状のつまみを貼り付ける。軸は白色味が強く澄んだ印象である。本品は、後述の55に質感や軸調が似ており、一組の蓋身である可能性が高い。博多遺跡群の出土例から、11世紀後半から12世紀後半に比定される。

13は青白磁合子の身である。全体の3/4程度が遺存する。側面に菊弁が型造りにより、陽刻されている。身の内面は全面施軸され、口縁内端面は軸を掻きとる。体部外面は施軸されるが、立ち上がりの外面、底部外面は露胎である。軸は56に似た青味を帯びた色調である。本品は博多遺跡群の出土例から、11世紀後半から12世紀後半に比定される。

14は青白磁合子の身である。完形である。側面に菊弁が型造りにより、陽刻されている。内面は施軸されるが立ち上がりの内面は露胎で、13と比べると仕上げは丁寧さに欠ける印象を受ける。体部外面は施軸されるが、立ち上がりの外面、底部外面は露胎である。軸は56に似た青味を



12



13



14



図26 第1経塚出土青白磁小壺・青白磁合子 (S=1/2)

帯びた色調である。本品は博多遺跡群の出土例から、11世紀後半から12世紀後半に比定される。

5. 銅銭 (図27・写真図版17)

銅銭の計測は、外縁外径、外縁内径、内郭外径、内郭内径及び質量を計測した。銅銭名の判読は『新版中世出土銭の分類図版』(永井 2002)に基づいた。

第1経塚の銅銭は、第1経塚の石組内及び第1経塚底面、第1経塚周辺から11点(15~25)出土した。

15は皇宋通宝である。外縁外径24.98mm、外縁内径20.65mm、内郭外径9.26mm、内郭内径6.63mm、重量1.73gを測る。1038年初鑄の北宋銭で完形である。

16は治平元宝である。外縁外径24.22mm、外縁内径19.70mm、内郭外径8.99mm、内郭内径6.88mm、重量2.84gを測る。1064年初鑄の北宋銭で完形である。

17は熙寧元宝である。外縁外径24.84mm、外縁内径19.85mm、内郭外径9.03mm、内郭内径6.59mm、重量2.00gを測る。1068年初鑄の北宋銭で完形である。

18は元豊通宝である。外縁外径25.09mm、外縁内径19.65mm、内郭外径8.62mm、内郭内径6.21mm、重量1.83gを測る。1078年初鑄の北宋銭で、一部欠損している。

19は元祐通宝である。外縁外径・外縁内径ともに計測不能、内郭外径9.07mm、内郭内径6.23mm、重量1.33gを測る。1086年初鑄の北宋銭で、一部欠損している。

20は元祐通宝である。外縁外径23.26mm、外縁内径19.71mm、内郭外径7.11mm、内郭内径5.62mm、重量1.54gを測る。1086年初鑄の北宋銭で、一部欠損している。

21は紹聖元宝である。外縁外径24.36mm、外縁内径19.48mm、内郭外径9.16mm、内郭内径7.08mm、重量2.58gを測る。1094年初鑄の北宋銭で、完形である。

22は紹聖元宝である。外縁外径23.71mm、外縁内径19.21mm、内郭外径8.89mm、内郭内径6.88mm、重量1.60gを測る。1094年初鑄の北宋銭で、完形である。

23は大観通宝である。外縁外径24.23mm、外縁内径22.15mm、内郭外径7.98mm、内郭内径6.18mm、重量2.46gを測る。1107年初鑄の北宋銭で、一部欠損している。

24は□平通宝と判読でき、残存部の重量は0.61gを測る。約1/4が欠損している。北宋銭だとすると、太平通宝が考えられる。

25は判読できず、残存部の重量は0.75gを測る。「元」と「宋」の字が判読できる。しかし、どちらも銅銭下部に位置すると考えられるため、別々の銅銭である可能性が高い。

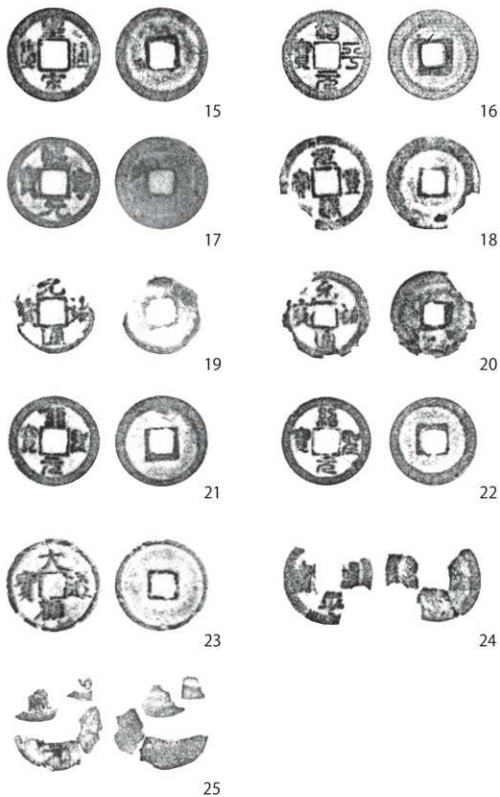


图27 第1 号塚出土铜钱 (S=1/1)

第2節 第2経塚出土遺物

(1) 概要

第2経塚からは常滑焼甕1点(26)、経筒1点(27、28)、紙本経8巻(29~36)、銅鏡9点(37~45)、青白磁小壺蓋5点(46~50)、青白磁小壺身5点(51~55)、青白磁合子蓋1点(56)、白磁皿1点(57)、短刀13点(58~70)、火打鎌2点(71、72)、銅銭44点(73~116)、瓦器片が出土している。常滑焼甕の中には経筒1点(27、28)、銅鏡3点(39~41)、青白磁小壺蓋1点(46)・身1点(51)が納められていた。経筒には鏡を転用した蓋(28)が用いられ、中には紙本経が8巻(29~36)納入されていた。第2経塚は底石から平石を立てかけた「下層」とその上部の石を平積みした「上層」に分けられ、銅鏡2点(42、43)、青白磁小壺蓋3点(48~50)、青白磁小壺身1点(54)、青白磁合子、銅銭、短刀11点(58~68)、火打鎌等は上層、銅鏡4点(37、38、44、45)、青白磁小壺蓋1点(49)、短刀2点(69、70)は下層から出土している。また上層と下層の石組の間に青白磁小壺蓋1点が挟まって出土している。ほかにも、上層の石組の間からは瓦器片が出土している。

(2) 出土遺物

1. 常滑焼甕 (図28・写真図版18)

26は常滑焼甕である。完形である。口径19.3cm、高さ30.7cm、胴部最大径は36.1cmである。頸部は直立し口縁部はゆるやかに外反する。口縁端部は内側に幅の広い緩やかな凹線がめぐる。胴部外面はおおむね横ナデにより平滑化され、常滑焼甕特有の、押印文と呼ばれるタタキ目を持たない。口縁部から胴部上位の外面には自然釉がみられる。底部は平底である。本品は、小型で壺形態に近いこと、口径と胴部最大径との差が大きいこと、倒卵形で肩部の屈曲は強くないこと、などの点に初期の常滑焼甕の特徴を有している。常滑窯における編年では2~3形式期併行とみられ、12世紀第3~4四半期に比定される。

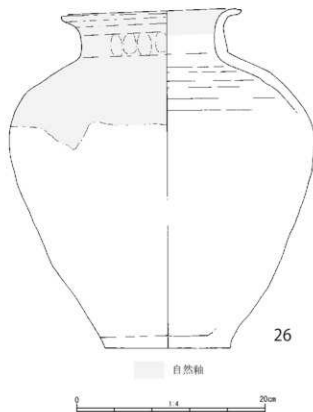


図28 第2経塚出土常滑焼甕(S=1/4)

2. 経筒 (図29・写真図版19~20、93)

27は紙本経8巻が埋納された銅鑄製経筒である。出土後、保存処理が施された。

筒身は高さ26.1cm、厚さ1.6~2.4cmで、直径10.9cmの円筒形を呈する。筒身の外面には、全面に幅約3mmの縦方向のケズリが丁寧に施されている。外面に銘文はない。公益財団法人元興寺文化財研究所による蛍光X線分析の結果、筒身外面に金の成分は検出されなかったことから、

鍍金がなされていた可能性は低い。

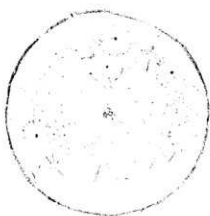
筒身の口縁から幅 0.3~0.4cm の範囲には、漆のような液体状の物質が附着していた痕跡がある。蛍光 X 線分析では、経筒上部に鉛のピークが顕著に表れていることから、筒身と被せ蓋の被せ目に、鉛又は鉛合金を用いて蓋を接着していた可能性が考えられる。

筒身の下部には、欠損部分が 3 箇所確認できる。腐食によるものか、あるいは鑄造欠損であるのかは不明で、一部は型持ち孔の可能性もある。本品は出土時に水に浸っていたためか、内部は泥等の汚れや紙本経の劣化により焦茶色を呈する。筒身の内側は、口縁端から幅 1.3cm の範囲に横方向にケズリが確認できる。下端から 0.3cm の位置には底板の受けとなる鑄出しの突帯が一条設けられている。

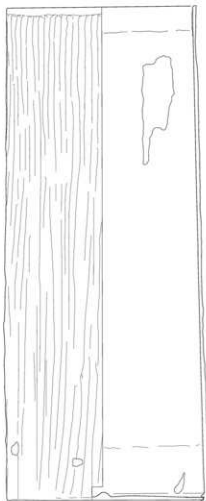
底板は、銅鏡が用いられている。銅鏡は、素文鏡（宋鏡式）で、面径 10.1cm で、縁の立ち上がりを持たない。文様は不明である。本経筒は、蓋（28）にも銅鏡が転用されており、蓋と底板の両者に銅鏡を用いた事例である。底板に用いられた素文鏡は、蓋に用いられた銅鏡と同様に、12 世紀頃に比定される。底板の外表面（鏡面）には、全面に敲打された痕跡が確認される。敲打痕は、底板を筒身に嵌め込む際についたものと考えられる。経筒は、筒身の内面に設けられた一条の突帯に底板を当てた後、筒身の下端部を内側に 0.1~0.2cm 折り込むことで、底板を固定している。

28 は、銅鏡を転用した経筒の蓋である。鏡面を外側、背面を内側にした被せ蓋となる。銅鏡は、薄菊草鳥鏡で、面径 10.7cm、縁高 0.6cm、界圏径 8.1cm、重量 86.9g を測る。鈕は根菊座鈕である。画面内には菊がめぐり、画面の上部に鳥が 2 羽、画面下部

に薄、その他秋草が配置されている。縁は細線内傾式である。12 世紀中葉から後半のものと考えられ、経筒内に納められていた紙本経の年銘（長寛 2 年、1164 年）とも相違はない。



28(経筒蓋)



29



図29 第2経塚出土経筒 (S=1/2)

3. 紙本経 (図30~31・写真図版21~68)

紙本経は、妙法蓮華経8巻が確認された(図30、31)。経筒内の各経巻は、すべて蓋筒を天としており、経筒内に紙が残存することから、さらに8巻を一枚の紙で3重以上に巻き付け納められていたとみられる。紙本経は、日本で一般的な8巻本であり、28品を8巻のうち巻第一に1・2品、巻第二に3・4品、巻第三に5~7品、巻第四に8~11品、巻第五に12~15品、巻第六に16~19品、巻第七に20~24品、巻第八に25~28品と分けている。現在の紙本経の観察や保存処理を行った元興寺文化財研究所の事前調査資料を参考によると、本紙一紙分の大きさは平均縦23.4cm、横54.1cmで、賽目は一寸幅で約16本、糸の間隔は一寸二分、重さは3.9~6.4gとされる。また、軸木は軸先両端に墨が残存することから、墨頂の軸とみられる。軸木は5mm程度の細軸で、割軸(合軸)となっており、巻頭に付く。巻第一・巻第三・巻第七・巻第八は、軸を右端に付けて折り返すが、巻第四では軸を少し内側に付け付ける。巻き方は、いずれも巻頭から巻末に向けて巻く逆巻の形である。逆巻のため、当紙本経は、巻末に向かうほど破損が大きく保存状態が不良となる。そのため、巻第七は尾欠で、品第24の35行まではかろうじて確認できる箇所があるが、以降の89行を欠損する。巻第三も末尾2行、巻第八も末尾5行ほどは破損のため確認できない。一方で、他の巻も巻末は破損が激しいが、かろうじて尾題や奥書まで確認できる。巻第一・巻第二・巻第四では巻末に紙紐が認められる。このため、巻末の紙紐で経巻を巻き留めていたと考えられる。このような軸木が割軸であることや逆巻に巻き紙帯で留める方法は、残存状況が良好でない他の巻についても同様とみられる。

また、高知県立紙産業技術センターによる分析の結果、紙の繊維組成は楮で、軸木の樹種はヒノキであることが明らかにされている。本紙は頓写経と呼ばれる形式で書かれており、文字の幅、大きさが一定でなく界線もない。巻第八は巻首に「八」と巻号が記されていることから、他の巻も巻号注記があった可能性があり、巻第一の巻頭端上の墨は巻号「一」と記した可能性がある。奥書・識語等は全8巻のうち巻第一に7箇所、巻第二に1箇所計8箇所に確認され、必ずしも巻末ではなく、品末の改行した余白に記されている。この経巻は、巻第一末に長寛2年(1164)9月6日の書写奥書があることから、平安時代院政期に書き写されたものであることがわかる。

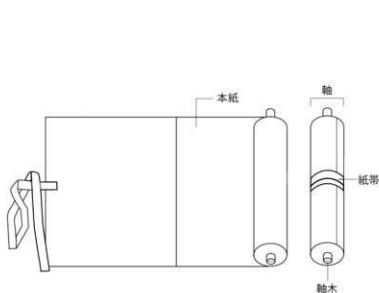


図30 経巻模式図及び部位名称

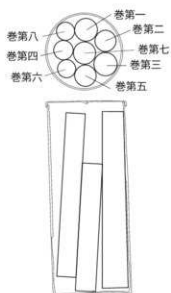


図31 第2経塚出土経筒内の経巻収納状況模式図

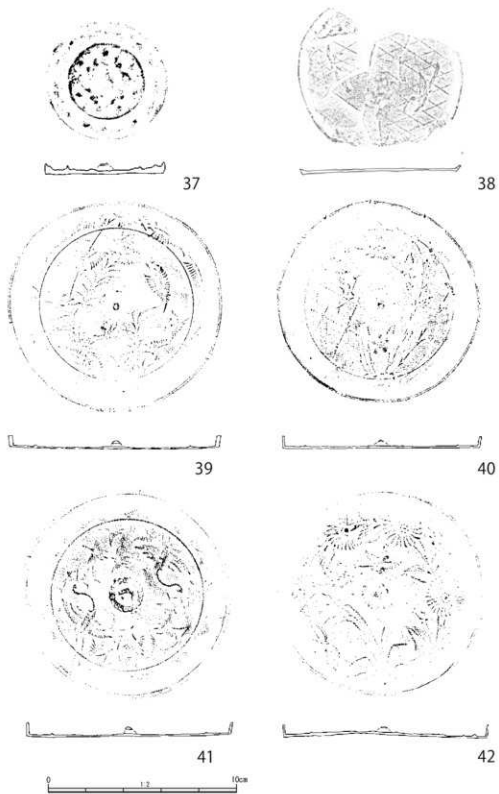


图32 第2 塚出土铜镜① (S=1/2)

鉦式である。11世紀後半から12世紀前半のものと考えられる。

39は萩蝶鳥鏡である。面径11.1cm、縁高0.7cm、界圏径8.2cm、重量108.58gを測る。鈕は振菊座鈕である。全体的に萩、画面下方に鳥が2羽、蝶が2匹（うち1匹がやや不明瞭）が配置されている。縁は細縁直角式である。12世紀中葉から後半のものと考えられる。

40は竹垣山吹草鳥鏡である。面径10.3cm、縁高0.7cm、界圏径7.9cm、重量94.07gを測る。鈕は振菊座鈕である。画面左下に竹垣、画面左上に鳥が2羽、画面右半分に山吹が配置されている。縁は細縁直角式である。12世紀中葉から後半のものと考えられる。

41は松喰鶴鏡である。面径10.9cm、縁高0.6cm、界圏径8.2cm、重量132.12gを測る。鈕は花蕊座鈕である。松枝を啜えた鶴2羽が配置されている。縁は細縁直角式である。12世紀中葉から後半のものと考えられる。

42は薄菊蝶鳥鏡である。面径10.6cm、縁高0.7cm、界圏径7.7cm、重量97.59gを測る。鈕は振菊座鈕である。画面左下に薄があり、画面の右半分に菊が3つ、画面中央に鳥が2羽が配置されている。画面下半分には、薄の下に蝶が1匹配置されている。縁は細縁直角式である。鏡面がくぼんでいる。12世紀中葉から後半のものと考えられる。



43



44



45



図33 第2塚塚出土銅鏡② (S=1/2)

43は流水水草双鶯鏡である。面径10.4cm、縁高0.6cm、界圏径8.3cm、重量51.06gを測る。鈕は振菊座鈕である。画面全体に流水文があり、流水文上に水草と鶯が2羽配置されている。縁は細縁直角式である。12世紀中葉から後半のものと考えられる。

44は松嶺鶴鏡である。面径11.0cm、縁高0.8cm、界圏径8.0cm、重量95.15gを測る。鈕は振菊座鈕である。画面上部に二箇所穴を穿っている。これは懸垂行為がされた痕跡であると考えられる。縁は細縁直角式である。松枝を啜えた鶴が2羽配置されている。12世紀中葉から後半のものと考えられる。

45は草葉蝶鳥鏡である。面径8.9cm、縁高0.6cm、界圏径6.5cm、重量50.22gを測る。鈕は五弁花座鈕である。画面の上下に鳥が2羽、画面中央に蝶が3匹、画面全体に草葉が配置されている。縁は細縁外傾式である。12世紀中葉から後半のものと考えられる。

5. 青白磁小壺・青白磁合子・白磁皿 (図34・写真図版77~79)

46は、青白磁小壺の蓋である。完形である。蓋の上面には蓮華文状の浮文が型押しされ、一部に緑青が付着する。なお蓮華文の中房の蓮子は1+6の組み合わせである。軸は青味を帯びた色調で、全体に貫入がみられる。本品は後述の51とセットで出土し、博多遺跡群の出土例から、11世紀後半から12世紀後半に比定される。

47は、青白磁小壺の蓋である。完形である。蓋の上面には車輪文状の浮文が型押しされ、中央に管状のつまみを貼り付ける。軸は青味を帯びた澄んだ色調で貫入はみられない。本品は博多遺跡群の出土例から、11世紀後半から12世紀後半に比定される。

48は、青白磁小壺の蓋である。完形である。蓋の上面には菊花文か蓮華文状の浮文が型押しされるが、不明瞭である。また中央にはつまみ状の小さな突起がある。軸は青味を帯びた色調で貫入はみられない。本品は博多遺跡群の出土例から、11世紀後半から12世紀後半に比定される。

49は、青白磁小壺の蓋である。完形である。蓋の上面には二重の菊花文状の浮文が型押しされる。軸は青味を帯びた色調で貫入はみられない。本品は博多遺跡群の出土例から、11世紀後半から12世紀後半に比定される。

50は、青白磁の蓋である。口縁端部が1/4程度欠損している。磁胎は密で色調は淡黄灰色である。また、淡黄灰色の軸が施されている。本品は、管見では参考にすべき出土例が無いものの、本経塚で共存する他の青白磁蓋類が11世紀後半から12世紀後半に比定されることから、同じ年代観とみられる。ただし、小壺と組み合わせられることについては、他の小壺蓋とは形状が異なることから保留したい。なお、本品は福岡県宗像市山田経塚(大治5年1130)出土の青白磁栓に形態が似ており、同様の青白磁栓である可能性が高い。また、その年代観は12世紀前半であることも、本経塚出土の他の青白磁類(11世紀後半から12世紀後半)の年代観に収まる。

51は、青白磁小壺の身である。完形である。体部外面に花卉状の浮文がある。短い頸部の口縁端部は軸を掻きとる。軸は青味を帯びた色調で、体部下方から底部外面は露胎である。また、底部外面をわずかに削り出して高台状とする。本品は前述の46とセットで出土し、博多遺跡群の出土例から11世紀後半から12世紀後半に比定される。

52は、青白磁小壺の身である。完形である。本品は上述の51に類似する。体部外面に花卉状の浮文がある。短い頸部の口縁端部は軸を掻きとる。軸は青味を帯びた色調で、体部下方から底部外面は露胎である。また、底部をわずかに削り出して高台状とする。本品は博多遺跡群の出土例から11世紀後半から12世紀後半に比定される。

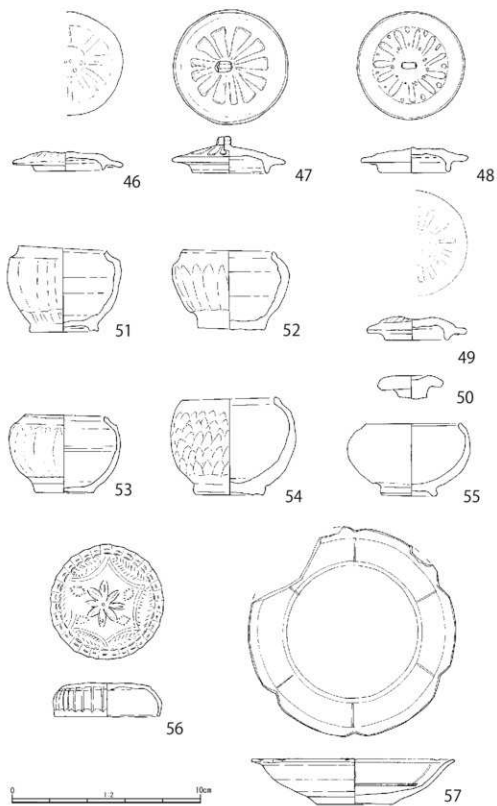


図34 第2経塚出土青白磁小壺・青白磁合子・白磁皿 (S=1/2)

53は、青白磁小壺の身である。口縁部と体部の1/4程度を欠く。体部外面に花卉状の浮文がある。短い頸部の口縁端部は軸を挿きとる。軸は青味を帯びた色調で、体部下方から底部外面は露胎である。また、底部をわずかに削り出して高台状とする。本品は上述の51、52に類似するが、

浮文等の成形はより丁寧で軸調は澄んだ印象を受ける。本品は博多遺跡群の出土例から11世紀後半から12世紀後半に比定される。

54は、青白磁小壺の身である。口縁部のごく一部を欠く以外、ほぼ完形である。体部外面に格子文状の浮文がある。短い頸部の口縁端部は軸を掻きとる。軸は灰色味を帯びた色調で、体部下方から底部外面は露胎である。底部は中央をわずかに削って凹面をなす平高台とする。本品の形状は上述の51、52に類似し口径はほぼ同じだが、器高が高く長胴の印象を受ける。博多遺跡群の出土例から11世紀後半から12世紀後半に比定される。

55は、青白磁小壺の身である。完形である。本品は51～54と比べてより精製品である。また形状が異なり、明瞭な頸部を持たない。体部外面も施文せず、平滑に仕上げている。軸は白色味が強く澄んだ印象である。体部内外面とも施軸されるが、口縁端部は軸を掻きとり底部外面は露胎である。底部は削り出し高台状とする。博多遺跡群の出土例から11世紀後半から12世紀後半に比定される。

56は青白磁合子の蓋である。一部を欠くがほぼ完形である。上面に草花文が、側面に菊弁が、いずれも型造りにより陽刻されている。口縁端部は露胎である。128、129と比べると軸は青味を帯びた色調で、成形は丁寧な仕上げである印象を受ける。本品は博多遺跡群の出土例から、11世紀後半から12世紀後半に比定される。

57は白磁六輪花皿である。体部から口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形である。口径11.2cm高さ2.5cmで、口縁部は横方向に屈折し、口縁端部は六輪花とする。体部内面には輪花に応じて堆線を、また見込みと体部内面の境に圏線を描く。大宰府条坊跡の出土例では、白磁皿Ⅳ類(2類-b)とされる製品で、11世紀後半～12世紀前半に比定される。白磁の分類及び名称は、『大宰府条坊跡Ⅳ—陶磁器分類編—』(大宰府市教育委員会 2000)に拠った。なお、白磁皿Ⅳ類のうち2類は後出する可能性があるという。本稿では、本品の年代観を12世紀前半頃としておきたい。

6. 短刀 (図35～37・写真図版80～81)

短刀は、13点出土している。完形品は58の1点のみで、残存状況は良好でなく、拵えについても不明確である。短刀は法量から大きくA、B、C類の3つに分類することができる。A類は、60を代表とする復元全長約34cm、復元刃部長約27cm、茎部長約8cm、刃部最大幅2.9～3.3cm、茎部最大幅1.7～2.2cm、茎部厚0.1～0.3cmと全長が長く刃部最大幅が太いもので(58～65)、B類は復元全長約30cm、復元刃部長約21cm、茎部長約9cm、刃部最大幅2.1cm、茎部最大幅2.0cm、茎部厚0.1～0.5cmで58に比べ全長が短いとみられ茎部が厚いものである(66)。C類は、全長は不明確であるが、復元刃部長約17.5cm、刃部最大幅2.6cm、茎部最大幅1.9cm、茎部厚0.5～0.6cmで、58・59に比べ全長が短いと想定される一方、刃部最大幅や茎部厚さは59と同様であるものである(67)。

① A類

58は残存長26.2cm、刃部残存長26.2cm、刃部最大幅3.2cm、棟厚0.6～0.9cm、茎部残存長7.1cm、茎部最大幅1.7cm、茎部厚0.1～0.3cmで、切先及び茎尻が欠損する。切先は小切先とみられ、棟・刃区ともに直角区である。茎部中央に直径0.3cmの目釘孔が位置する。



図35 短刀模式図及び部位名称

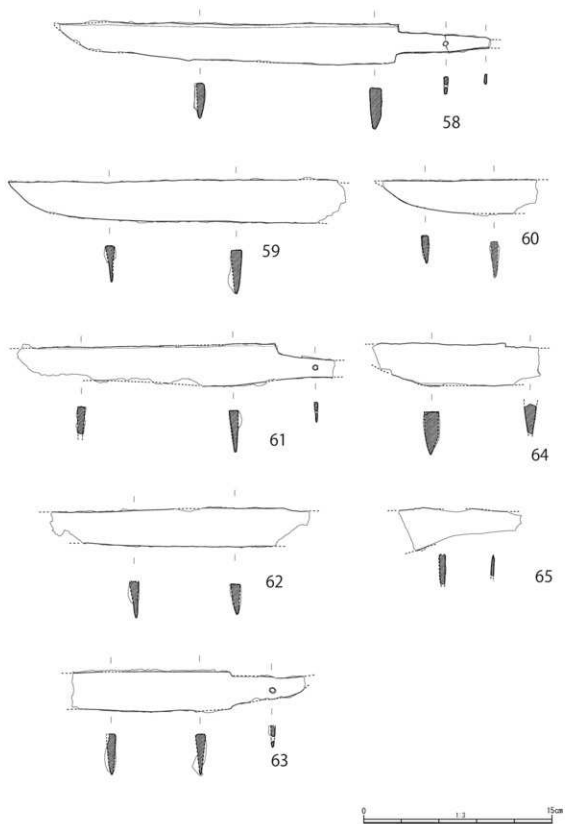


図36 第2層塚出土短刀① (S=1/3)

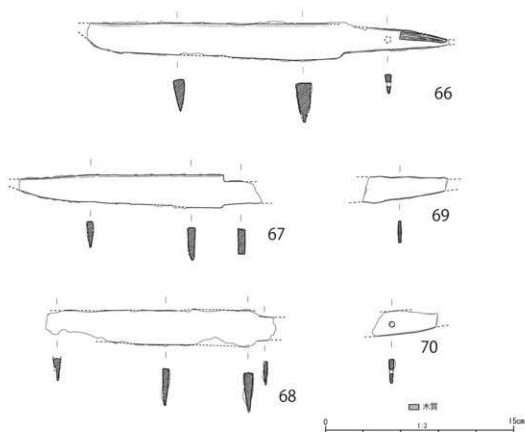


図37 第2 経塚出土短刀② (S=1/3)

59は刃部のみが残存する。(刃部) 残存長 26.6cm、刃部最大幅 3.3cm、棟厚 0.7～0.8cm で、切先は小切先とみられる。

60は刃部のみが残存する。(刃部) 残存長 12.4cm、刃部最大幅 2.7cm、棟厚 0.5cm で、切先は小切先とみられる。

61は残存長 25.1cm、刃部残存長 20.7cm、刃部最大幅 3.0cm、棟厚 0.5～0.7cm、茎部残存長 4.4cm、茎部最大幅 1.9cm、茎部厚 0.1～0.3cm である。切先及び茎尻が欠損する。棟区は直角区で、茎部中央とみられる位置に直径 0.4cm の目釘孔が穿たれる。

62は刃部のみが残存する。残存長 20.6cm、刃部残存長 20.6cm、刃部最大幅 3.0cm、棟厚 0.8cm である。

63は残存長 18.4cm、刃部残存長 12.5cm、刃部最大幅 2.9cm、棟厚 0.5～0.8cm、茎部残存長 5.9cm、茎部最大幅 2.2cm、茎部厚 0.1～0.3cm である。切先及び茎尻が欠損する。棟区は直角、刃区は斜角区である。

64は刃部のみが残存する。(刃部) 残存長 13.3cm、刃部残存最大幅 3.1cm、棟残存厚 1.2cm で、切先及び茎尻が欠損する。

65は(刃部) 残存長 9.7cm で、刃部から茎部接続部分である可能性がある。

② B 類

66は残存長 28.6cm、刃部残存長 20.3cm、刃部最大幅 2.6cm、棟厚 0.85～1.2cm、茎部残存長 8.4cm、茎部最大幅 2.0cm、茎部厚 0.1～0.5cm である。切先及び茎尻が欠損する。刃区は斜角区である。茎部中央に直径 0.4cm の目釘孔が位置する。茎部中央より茎尻側には木質が残存し、柄装具に入った状態であったと考えられる。

③ C類

67は残存長19.3cm、刃部残存長16.2cm、刃部最大幅2.6cm、棟厚0.5~0.6cm、茎部残存長3.1cm、茎部最大幅1.9cm、茎部厚0.5~0.6cmである。切先及び茎尻が欠損する。切先は、カマスもしくは小切先と想定される。棟区は直角区、刃区は斜角区である。

④ その他

68は残存長18.2cm、刃部残存長16.7cm、刃部最大幅2.7cm、棟厚0.5~0.6cm、茎部残存長1.5cm、茎部最大幅1.8cm、茎部厚0.55cmで、切先及び茎尻が欠損する。法量から、A又はB類と考えられる。

69は茎部のみが残存する。茎部残存長6.8cm、茎部最大幅2.0cm、茎部厚0.2cmである。法量から、A又はB類と考えられる。

70は69と同様に茎部のみが残存する。茎部残存長5.2cm、茎部最大幅1.8cm、茎部厚0.2~0.4cmである。茎尻が欠損する。茎部には、直径0.5cmの目釘孔が穿たれる。

7. 火打鎌 (図38、39・写真図版81)

火打鎌は、2点出土している(71、72)。いずれも形状は、二等辺三角形の両端部を上向けたものであり、頂点部に紐通しのための孔が1つ穿たれている。また、いずれの個体も鉄製であり、錆が付着しているが、残存状態は良好である。71は、全長6.9cm、最大幅2.3cmであり、厚さは0.2~0.5cmである。また、孔部の径は0.08cmである。全面錆で覆われており、両端部が欠損している。72は、全長7.0cm、最大幅2.9cm、厚さは0.6~0.8cmである。孔部の径は0.2cmである。片方の端部が欠損している。

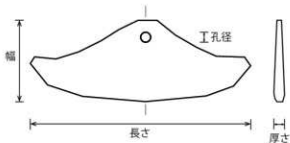


図38 火打鎌模式図及び部位名称

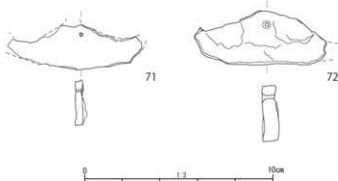


図39 第2経塚出土火打鎌 (S=1/2)

8. 銅銭 (図40~43・写真図版82~84)

第2経塚では銅銭44点が石組の間や石組の上部より出土している。

73は富寿神宝である。外縁外径23.55mm、外縁内径19.10mm、内郭外径8.04mm、内郭内径6.46mm、重量1.78gを測る。818年初鑄の日本銭で、完形である。

74は太平通宝である。外縁外径24.00mm、外縁内径20.16mm、内郭外径7.56mm、内郭内径6.80mm、重量1.71gを測る。976年初鑄の北宋銭で、完形である。

75は咸平元宝である。外縁外径24.77mm、外縁内径19.29mm、内郭外径8.59mm、内郭内径6.39mm、重量2.01gを測る。998年初鑄の北宋銭で、完形である。

76は景德元宝である。外縁外径25.06mm、外縁内径18.18mm、内郭外径7.55mm、内郭内径5.58mm、重量1.89gを測る。1004年初鑄の北宋銭で、左側が欠損している。

77 は景德元宝である。外縁外径 24.31mm、外縁内径 20.34mm、内郭外径 7.43mm、内郭内径 6.60mm、重量 2.19g を測る。1004 年初鑄の北宋銭で、完形である。

78 は景祐元宝である。外縁外径 25.23mm、外縁内径 20.47mm、内郭外径 8.64mm、内郭内径 8.19mm (いずれもタテ計測のみ)、重量 0.98g を測る。1034 年初鑄の北宋銭で、左側の「宝」に該当する部分が欠損している。

79 は皇宋通宝である。外縁内径 23.23mm、外縁内径 17.61mm、内郭外径 7.73mm、内郭内径 5.89mm、重量 1.42g を測る。1038 年初鑄の北宋銭で、完形である。

80 は皇宋通宝である。外縁内径 24.71mm、外縁内径 19.77mm、内郭外径 9.21mm、内郭内径 6.94mm、重量 1.58g を測る。1038 年初鑄の北宋銭で、右側一部欠損している。

81 は皇宋通宝である。外縁内径 24.59mm、外縁内径 20.01mm、内郭外径 8.85mm、内郭内径 7.15mm、重量 2.31g を測る。1038 年初鑄の北宋銭で、一部欠損している。

82 は皇宋通宝である。外縁内径 25.01mm、外縁内径 19.99mm、内郭外径 9.82mm、内郭内径 6.68mm、重量 2.57g を測る。1038 年初鑄の北宋銭で、ほぼ完形である。

83 は皇宋通宝である。外縁内径 24.95mm、外縁内径 21.01mm、内郭外径 9.41mm、内郭内径 7.32mm、重量 2.12g を測る。1038 年初鑄の北宋銭で、完形である。

84 は至和元宝である。外縁外径 24.65mm、外縁内径 19.76mm、内郭外径 9.44mm、内郭内径 6.91mm、重量 2.51g を測る。1054 年初鑄の北宋銭で、ほぼ完形である。

85 は嘉祐元宝である。外縁外径 23.60mm、外縁内径 18.58mm、内郭外径 7.42mm、内郭内径 5.70mm、重量 1.78g を測る。1056 年初鑄の北宋銭で、完形である。

86 は熙寧元宝である。外縁外径 24.21mm、外縁内径 18.07mm、内郭外径 8.24mm、内郭内径 6.08mm、重量 2.10g を測る。1068 年初鑄の北宋銭で、一部欠損している。

87 は熙寧元宝である。外縁外径 23.64mm、外縁内径 18.55mm、内郭外径 8.79mm、内郭内径 6.92mm、重量 2.05g を測る。1068 年初鑄の北宋銭で、ほぼ完形である。

88 は熙寧元宝である。外縁外径 24.21mm、外縁内径 19.83mm、内郭外径 9.09mm、内郭内径 5.83mm、重量 1.31g を測る。1068 年初鑄の北宋銭で、完形である。

89 は熙寧元宝である。外縁外径 24.43mm、外縁内径 20.73mm、内郭外径 8.25mm、内郭内径 6.93mm、重量 2.01g を測る。1068 年初鑄の北宋銭で、一部欠損している。

90 は熙寧元宝である。外縁外径 23.46mm、外縁内径 18.82mm、内郭外径 8.10mm、内郭内径 5.81mm、重量 1.57g を測る。1068 年初鑄の北宋銭で、完形である。

91 は熙寧元宝である。外縁外径 24.83mm、外縁内径 17.72mm、内郭外径 8.56mm、内郭内径 7.25mm、重量 2.31g を測る。1068 年初鑄の北宋銭で、一部欠損している。

92 は元豊通宝である。外縁外径 23.87mm、外縁内径 18.67mm、内郭外径 7.62mm、内郭内径 5.24mm、重量 2.74g を測る。1078 年初鑄の北宋銭で、一部欠損している。

93 は元豊通宝である。外縁外径 25.31mm、外縁内径 18.71mm、内郭外径 8.08mm、内郭内径 6.05mm、重量 2.21g を測る。1078 年初鑄の北宋銭で、ほぼ完形である。

94 は元豊通宝である。外縁外径 24.13mm、外縁内径 19.75mm、内郭外径 9.34mm、内郭内径 6.30mm、重量 1.40g を測る。1078 年初鑄の北宋銭で、左側一部欠損している。

95 は元豊通宝である。外縁外径 24.32mm、外縁内径 17.87mm、内郭外径 9.23mm、内郭内径 5.89mm、重量 2.25g を測る。1078 年初鑄の北宋銭で、一部欠損している。

96 は元豊通宝である。外縁外径 25.20mm、外縁内径 19.87mm、内郭外径 8.79mm、内郭内径

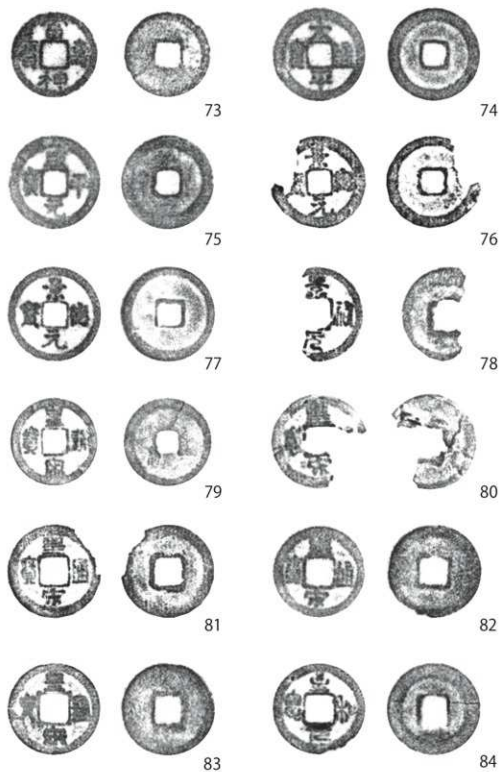


圖40 第2 經塚出土銅錢① (S=1/1)

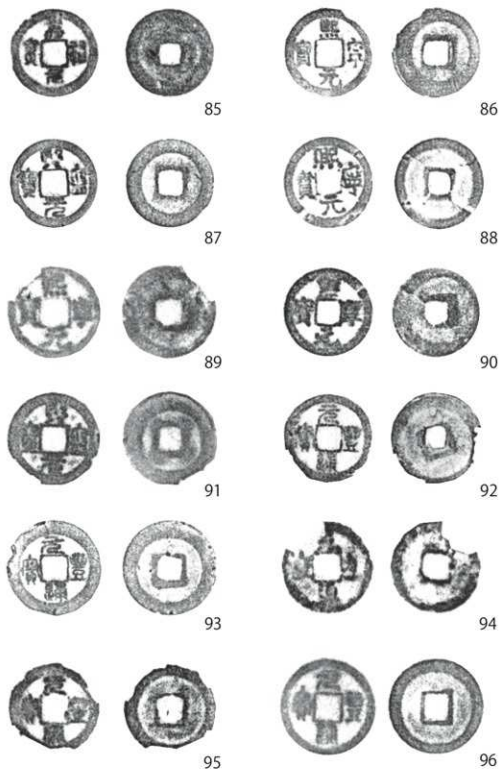


圖41 第2 經塚出土銅錢② (S=1/1)

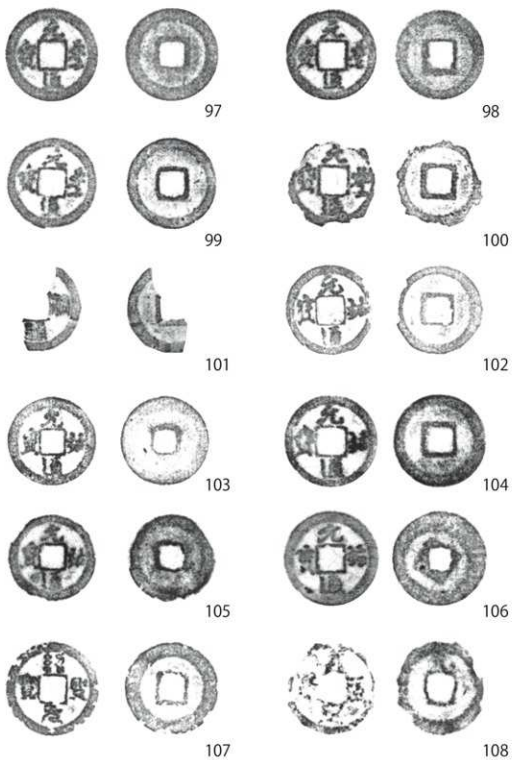


圖42 第2 經塚出土銅錢③ (S=1/1)

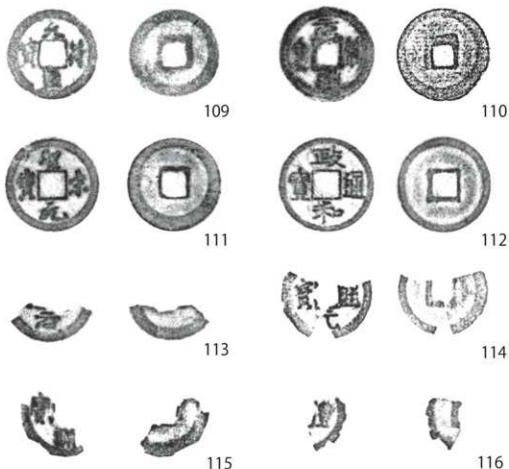


図43 第2層出土銅銭④ (S=1/1)

6.75mm、重量 2.14g を測る。1078 年初鑄の北宋銭で、完形である。

97 は元豊通宝である。外縁外径 24.84mm、外縁内径 19.83mm、内郭外径 8.28mm、内郭内径 6.94mm、重量 1.48g を測る。1078 年初鑄の北宋銭で、完形である。

98 は元豊通宝である。外縁外径 23.77mm、外縁内径 19.55mm、内郭外径 9.51mm、内郭内径 6.40mm、重量 1.61g を測る。1078 年初鑄の北宋銭で、完形である。

99 は元豊通宝である。外縁外径 23.88mm、外縁内径 18.48mm、内郭外径 8.24mm、内郭内径 6.95mm、重量 2.46g を測る。1078 年初鑄の北宋銭で、完形である。

100 は元豊通宝である。外縁外径は計測不能、外縁内径 18.39mm (タテ計測のみ)、内郭外径 9.57mm、内郭内径 7.81mm、重量 1.82g を測る。1078 年初鑄の北宋銭で、一部欠損している。

101 は元祐通宝である。法量は計測不能、重量 0.74g を測る。1086 年初鑄の北宋銭で、「元」と「宝」部分が欠損している。

102 は元祐通宝である。外縁外径 23.91mm (タテ計測のみ)、外縁内径 18.27mm (タテ計測のみ)、内郭外径 7.86mm、内郭内径 6.47mm、重量 2.12g を測る。1086 年初鑄の北宋銭で、一部欠損している。

103 は元祐通宝である。外縁外径 23.73mm、外縁内径 17.71mm、内郭外径 7.80mm、内郭内径 5.49mm、重量 2.01g を測る。1086 年初鑄の北宋銭で、完形である。

104 は元祐通宝である。外縁外径 24.29mm、外縁内径 20.90mm、内郭外径 8.95mm、内郭内径

6.75mm、重量1.85gを測る。1086年初鑄の北宋銭で、完形である。

105は元祐通宝である。外縁外径23.33mm、外縁内径18.04mm、内郭外径8.11mm、内郭内径6.29mm、重量2.39gを測る。1086年初鑄の北宋銭で、ほぼ完形である。

106は元祐通宝である。外縁外径23.74mm、外縁内径19.61mm、内郭外径8.63mm、内郭内径6.10mm、重量1.79gを測る。1086年初鑄の北宋銭で、完形である。

107は紹聖元宝である。外縁外径24.99mm、外縁内径19.37mm、内郭外径8.29mm、内郭内径6.51mm、重量3.20gを測る。1094年初鑄の北宋銭で、ほぼ完形である。

108は元符通宝である。外縁外径・外縁内径は計測不能で、内郭外径9.17mm、内郭内径6.26mm、重量1.79gを測る。1098年初鑄の北宋銭で、外縁部を中心に一部欠損している。

109は元符通宝である。外縁外径24.17mm、外縁内径19.66mm、内郭外径8.06mm、内郭内径6.58mm、重量1.98gを測る。1098年初鑄の北宋銭で、完形である。

110は元符通宝である。外縁外径24.92mm、外縁内径19.45mm、内郭外径8.91mm、内郭内径6.51mm、重量2.62gを測る。1098年初鑄の北宋銭で、完形である。

111は聖宋元宝である。外縁外径24.57mm、外縁内径20.52mm、内郭外径8.93mm、内郭内径6.36mm、重量2.22gを測る。1101年初鑄の北宋銭で、完形である。

112は政和通宝である。外縁外径24.97mm、外縁内径21.13mm、内郭外径8.30mm、内郭内径7.11mm、重量2.19gを測る。1111年初鑄の北宋銭で、完形である。

113は□□元□である。重量は0.29gを測る。3/4以上欠損しているため、銅銭名は不明である。

114は□元通宝である。重量は1.25gを測る。上部一部欠損している。北宋銭であれば、開元通宝が考えられる。

115は□□通宝である。重量は0.66gを測る。半分欠損している。銅銭名は不明である。

116は□豊□□である。重量は0.35gを測る。3/4以上欠損している。銅銭名は元豊通宝が該当すると思われるが、不明である。

第3節 第3経塚出土遺物

(1) 概要

第3経塚からは銅鏡3点(118～119)、火打鎌1点(120)が出土している。銅鏡3点のうち1点(118)は、第3経塚の底石の上面から出土し、2点(117、119)は第3経塚の上部から出土した。第3経塚では経筒や外容器は確認できていない。

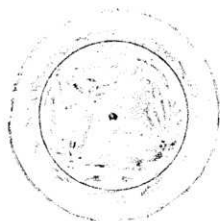
(2) 出土遺物

1. 銅鏡 (図44・写真図版85～87、93)

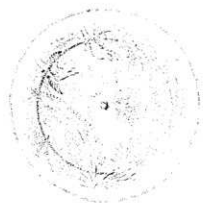
第3経塚からは銅鏡3点が出土しており、うち1点(118)は第3経塚の底石の上に出土している。いずれの銅鏡も12世紀中葉から後半のものと考えられる。

117は流水草葉双鳥鏡である。面径10.6cm、縁高0.7cm、界圏径7.8cm、重量100.93gを測る。鈕は振菊座鈕である。画面下部に流水文と鳥が1羽、画面全体に萩と芦の2種類の草葉が配置されている。縁は細縁外傾式である。出土時、鈕の穴に紐を通していたとみられる繊維質の物が残っていたことが確認されている。12世紀中葉から後半のものと考えられる。

118は萩双鳥鏡である。面径9.9cm、縁高0.5cm、界圏径7.2cm、重量51.12gを測る。鈕は振菊



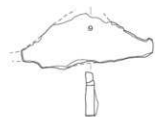
117



118



119



120



図44 第3経塚出土銅鏡 (S=1/2)、火打鎌 (S=1/2)

座鈕で、萩が3枚と画面全体に草、画面上部に鳥が2羽配置されている。縁は細縁外傾式である。12世紀中葉から後半のものと考えられる。

119は流水草花双鶴鏡である。面径11.1cm、縁高0.8cm、界圏径7.8cm、重量110.31gを測る。鈕は菊花座鈕である。鏡の右半分は欠失している。松枝を咥えた鶴が左側に1羽、上方に1羽配置され、その他草花が配置されている。縁は中縁直角式である。成分に錫が多く含まれているとみられ、銀の光沢をもつ色調を呈する。12世紀後半の時期が考えられる。

2. 火打鎌 (図44・写真図版88)

火打鎌(120)は、全長7.1cm、最大幅2.5cm、厚さ0.3~0.5cmであり、孔部の径は0.2cmである。登頂部分と片方の端部が欠損している。

第4節 その他の出土遺物

(1) 概要

ここでは出土地点が明確でない銅鏡1点(121)、銅鏡片6点(122~127)、青白磁合子蓋2点(128、129)、短刀5点(130~134)、火打鎌1点(135)、ガラス小玉3点(136~138)、銅銭11点(139~149)、不明鉄製品1点(150)について記載する。銅鏡1点(121)は第1次調査時に出土し、銅銭は第1次調査や掘削前に採取したもの、敷石などから出土した。ガラス小玉3点(136~138)は第1経塚の北西と第3経塚の南東の間に検出しており、どちらの経塚に伴う出土遺物かは不明である。このほか後世の埋納銭とみられる寛永通宝31点が出土している。

(2) 出土遺物

1. 銅鏡 (図45、写真図版88~89、93)

銅鏡1点(121)と銅鏡片6点(122~127)がある。銅鏡1点(121)は第1次調査時に出土したものである。銅鏡片6点(122~127)には草葉が配置されていることから同一の銅鏡である可能性があり、鈕も同一の銅鏡のものであると考えられる。

121は草花双鳥鏡である。鏡の左半分が欠失しており、面径約8.4cm(復元径)、縁高0.2cm、界圏はなし、重量12.99g(残存部)を測る。鈕は柳葉鈕である。画面右側に鳥が1羽、草花が随所に配置されている。縁は細縁蒲鉾式である。第1次調査時に出土し、詳細な出土地点は不明である。11世紀後半から12世紀前半のものと考えられる。

122は銅鏡片である。面径は約11.1cm(復元径)、縁高0.7cm、重量16.87gを測る。草葉が配置されている。第3経塚出土の銅鏡(118)にある草葉と似ていることから萩と芦が考えられる。

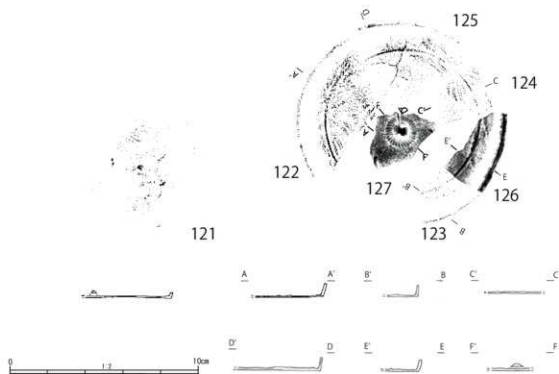


図45 その他出土銅鏡 (S=1/2)

123は銅鏡片である。縁高0.7cm、重量4.29gを測る。界圏線が見られる。

124は銅鏡片である。重量3.38gを測る。草葉が配置されている。

125は銅鏡片である。縁高0.7cm、重量8.68gを測る。草葉が配置されている。

126は銅鏡片である。縁高0.7cm、重量5.32gを測る。草葉が配置されている。

127は銅鏡の鈕である。重量4.01gを測る。鈕は菊花座鈕である。

2. 青白磁合子 (図46・写真図版90)

128は、青白磁合子の蓋である。完形である。上面に草花文が、側面に菊弁が、いずれも型造りにより陽刻されている。軸全体に貫入がみられる。56と比べると軸は灰色味を帯びた色調で、成形はシャープさに欠ける印象を受ける。本品は博多遺跡群の出土例から、11世紀後半から12世紀後半に比定される。

129は、青白磁合子の蓋である。全体の1/2弱程度が遺存する。本品は56、128と比べ器高はほぼ同じだが、口径が大きい。博多遺跡群の出土例から、当該期の青白磁合子の口径には大小の個体があることが知られる。上面は不明瞭だが陽刻による文様があり、側面に菊弁が型造りにより陽刻されている。軸全体に貫入がみられる。56と比べると軸は灰色味を帯びた色調で、成形はシャープさに欠ける印象を受ける。本品は博多遺跡群の出土例から、11世紀後半から12世紀後半に比定される。



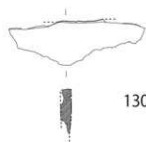
128



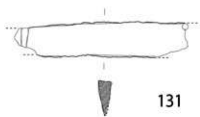
129



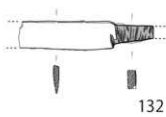
図46 その他出土
青白磁合子 (S=1/2)



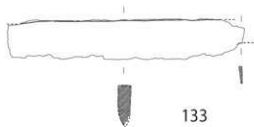
130



131



132



133



134



図47 その他出土短刀 (S=1/2)

3. 短刀 (図47・写真図版91)

短刀は、5点ある(130~134)。130は刃部のみが残存が、切先が欠損する。(刃部)残存長10.7cm、刃部残存最大幅3.3cm、棟残存厚0.7cmで、法量からA類に属するものとみられる。

131も130と同様に刃部のみが残存するが、切先は欠損する。(刃部)残存長13.7cm、刃部最大幅2.5cm、棟厚0.9cmである。法量からB類に属するものとみられる。

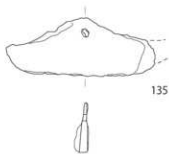
132は残存長10.7cm、刃部残存長7.5cm、刃部最大幅2.3cm、棟厚0.4cm、茎部残存長3.2cm、茎部最大幅1.5cm、茎部厚0.8cmで、切先及び茎尻が欠損する。棟・刃区ともに斜角区である。茎部に木質が残存し、本来は柄に入った状態であったと考えられる。法量からB類に属するものとみられる。

133は残存長18.7cm、刃部残存長18.1cm、刃部最大幅3.2cm、棟厚1.0cm、茎部残存長0.6cm、茎部残存最大幅1.3cm、茎部厚0.3cmで、切先及び茎尻が欠損する。法量からAまたはB類に属するものとみられる。

134は残存長5.8cmで刃部の可能性がある破片である。

4. 火打鎌 (図48・写真図版90)

火打鎌(135)は、全長7.9cm、最大幅4.1cm、厚さ0.2~0.5cm、孔部の径は0.4cmであり、他の個体に比べて大型である。片方の端部が欠損しており、表面は一部剝離している。



5. ガラス小玉 (図49・写真図版90)

ガラス小玉は3点(136~138)確認されている。

136は、最大径4mm、高さ2mmを測る。色調は無色透明である。

137は、最大径4.5mm、高さ4mm、均整のとれた球形で、色調は黄瑠璃色を呈する。

138は、緑色半透明のガラス小玉に白色のガラスを横方向に巻き付けたトンボ玉で、最大径4.5mm、高さ4mmを測る。上端の小口はわずかに盛り上がり段をなし、端部は丸く収まるが、下端の小口は巻き付けた際の形状がそのまま残る。



図48 その他出土火打鎌 (S=1/2)

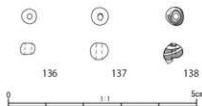


図49 その他出土ガラス小玉 (S=1/1)

6. 銅銭 (図50・写真図版92)

ここでは、第1次調査時及び出土地不明の銅銭について述べる。なお、開元通宝(138、139)は、時期が621(唐)・845(唐)・926(南唐)の3時期に鑄造しているが、時期の判定が難しいため、「平成10年度 隅田八幡神社経塚発掘調査概報」(橋本市教育委員会 1999)に準拠し、845年としている。

139は開元通宝である。外縁外径24.56mm、外縁内径20.47mm、内郭外径8.71mm、内郭内径6.62mm、重量1.18gを測る。845年初鑄の唐銭で、一部欠損している。

140は開元通宝である。外縁外径25.15mm、外縁内径21.33mm、内郭外径9.91mm、内郭内径

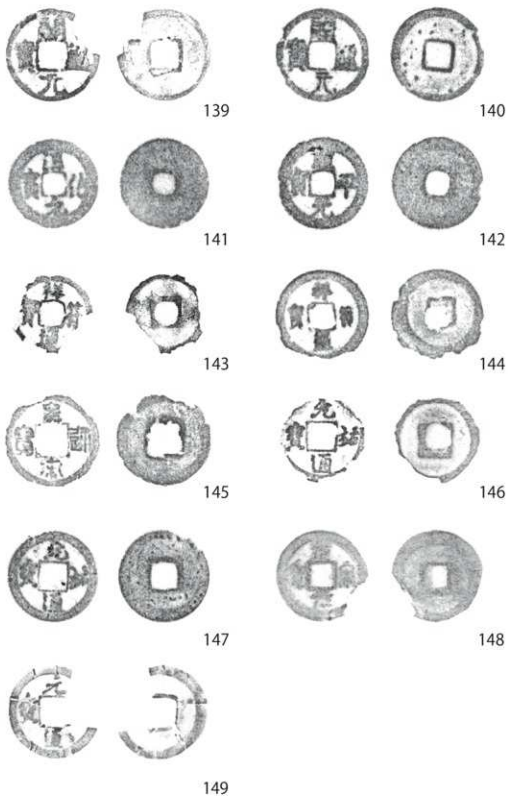


図50 その他出土銅銭 (S=1/1)

8.87mm、重量 2.45g を測る。845 年初鑄の唐銭で、ほぼ完形である。

141 は淳化元宝である。外縁外径 23.98mm、外縁内径 19.25mm、内郭外径 7.89mm、内郭内径 6.09mm、重量 3.12g を測る。990 年初鑄の北宋銭で、完形である。

142 は咸平元宝である。外縁外径 24.44mm、外縁内径 18.18mm、内郭外径 7.52mm、内郭内径 6.14mm、重量 2.73g を測る。998 年初鑄の北宋銭で、ほぼ完形である。

143 は祥符通宝である。外縁外径・外縁内径は計測不能で、内郭外径 7.61mm、内郭内径 6.33mm、重量 1.04g を測る。1008 年初鑄の北宋銭で、一部欠損している。

144 は祥符通宝である。外縁外径 24.84mm、外縁内径 19.39mm、内郭外径 8.10mm、内郭内径 7.05mm、重量 3.29g を測る。1008 年初鑄の北宋銭で、一部欠損している。

145 は皇宋通宝である。外縁外径 25.10mm、外縁内径 19.96mm、内郭外径 10.31mm、内郭内径 7.83mm、重量 2.18g を測る。1038 年初鑄の北宋銭で、一部欠損している。

146 は元祐通宝である。外縁外径・外縁内径は計測不能、内郭外径 8.19mm、内郭内径 6.65mm、重量 1.89g を測る。1086 年初鑄の北宋銭で、一部欠損している。

147 は元祐通宝である。外縁外径 24.07mm、外縁内径 20.16mm、内郭外径 8.90mm、内郭内径 7.34mm、重量 3.17g を測る。1086 年初鑄の北宋銭で、ほぼ完形である。

148 は聖宋元宝である。外縁外径 23.18mm、外縁内径 18.71mm、内郭外径 10.91mm、内郭内径 6.48mm、重量 1.59g を測る。1101 年初鑄の北宋銭で、右下一部欠損している。

149 は元□通宝である。重量 0.63g を測る。右側を欠損している。銅銭名は北宋銭であれば、元祐通宝か元豊通宝が該当すると考えられる。

7. 不明鉄製品 (図 51・写真図版 91)

150 は残存長 7.3cm、残存最大幅 4.3cm、器厚 0.1cm と非常に薄い鉄製品である。縦軸方向には下端部で緩やかに屈曲が認められる一方、横軸方向には円弧を描くように内湾する。法量や形状から、経筒である可能性がある。

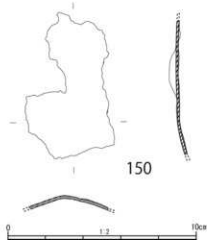


図51 その他出土不明鉄製品 (S=1/2)

参考文献

- 小澤 太郎 2008 『筑後の経塚と経筒』『経筒が語る中世の世界』思文閣出版
- 久保 智康 1999 『中世・近世の鏡』日本の美術第 394 号 至文堂
- 大宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』大宰府市の文化財 49 大宰府市教育委員会
- 中世土器研究会 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 中野 政樹 1969 『和鏡』日本の美術第 42 号 至文堂
- 永井 久美男 2002 『新版 中世出土銭の分類図版』高志書院
- 広瀬 都賀 1974 『和鏡の研究』角川書店
- 福岡市教育委員会 1982 『博多Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書 86 福岡市教育委員会
- 福岡市教育委員会 1984 『博多—高遠鉄道関係調査 (1) —』福岡市教育委員会
- 福岡市教育委員会 1986 『博多—第 6 次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書 126 福岡市教育委員会
- 福岡市教育委員会 1988 『都市計画道路博多駅築港関係埋蔵文化財調査報告 (Ⅱ) 博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書 184 福岡市教育委員会
- 福岡市教育委員会 2021 『博多 170 一博多道跡群第 203 次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書 1405 福岡市教育委員会

出土遺物観察表

(1) 第1 経塚

1. 備前焼甕・須恵器甕

遺物番号	図版番号	写真図版	種類	器種	出土	口径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	品質形状等
1	図22-1	写真7-1	備前焼	甕	第1経塚	※31.8	※62.3	内面) 口縁部~頸部: 5YR6/2灰褐、胴部: 2.5YR6/2灰黄、底部: 5Y8/1灰白 外面) 口縁部~頸部: 2.5YR5/3にぶい赤褐、頸部: 10YR8/1灰白、胴部上部: 5Y 8/1灰白、胴部中~下部: 10R4/3赤褐	—	口縁部) 外皮質部) 直立 外面) 口縁部から胴部: 中位自然釉 底 部) 平底
2	図22-2	写真7-2	須恵器	甕	第1経塚	※18.6	※19.6	内面) N7/ 灰白 外面) 口縁部から頸部にかけて N6/ 灰、頸部から底部にかけて N 4 / 暗オリーブ灰	黒色 微砂 含む	内 面) 全体的にナデ調整 外 面) 口縁部: 横方向のナデ、 胴部~胴部: 斜方向の タタキ 底 部) 丸底

※復元径

2. 経筒及び関連部品

遺物番号	図版番号	写真図版	種類	器種	出土	品質形状等
3	図23-3	写真8-3	経筒	筒身	第1経塚	復元径12.2cm、復元高25.3cm、厚さ0.6~0.8mm、22カ所の折留めあり
4	図23-4	写真9-4	環状部品	—	3 (経筒) 内	厚さ1mm、幅1.81cm、直径12cm、幅2mm×長さ2mmの方形の突起あり
5	図23-5	写真9-5	経筒	蓋	3 (経筒) 内	直径11.2cm、高さ0.9cm、厚さ0.9cm
6	図23-6	写真9-6	不明部品	—	3 (経筒) 内	長さ2.1cm、幅2.1cm
7	図24-7	写真10、11-7	経筒	筒身	3 (経筒) 内	直径6.0cm、復元高13.7cm、厚さ0.9mm、説文あり

3. 銅鏡

遺物番号	図版番号	写真図版	文様	出土	直径 (cm)	縁高 (cm)	弁圓径 (cm)	重量 (g)	紐及び紐座	品質形状等
8	図25-8	写真12-8、93-8	梅花唐草鏡	3 (経筒) 内	8.6	0.8	6.1	111.43	素紐	完形、和鏡、細線直内式、不明磨
9	図25-9	写真13-9、93-9	宝鏡松丸鏡	3 (経筒) 内	9.7	0.5	7.6	56.46	袈裟座紐	完形、和鏡、細線直内式
10	図25-10	写真14-10、93-10	洲浜秋草双鳥鏡	3 (経筒) 内	8.3	0.4	6.3	39.81	花笠座紐	完形、和鏡、細線外横式
11	図25-11	写真15-11、93-11	浮線縁菊丸文数珠鳥鏡	3 (経筒) 内	9.5	0.6	7.1	83.59	菊花座紐	完形、和鏡、中線直内式

4. 青白磁小甕・青白磁合子

遺物番号	図版番号	写真図版	種類	器種	出土	口径 (mm)	最大径 (mm)	高さ (mm)	色調 (胎土)	品質形状等
12	図26-12	写真16-12	青白磁	小甕蓋	第1経塚	46	61	15	白色味	完形 施文なし、管状つまみあり 約3/4遺存
13	図26-13	写真16-13	青白磁	合子身	第1経塚石組 周辺	48	58	21	青味	側面) 型造りによる菊弁の隆起あり 内面・体部外面) 全体に施釉 立ち上りの外面・底部外面) 露胎
14	図26-14	写真16-14	青白磁	合子身	第1経塚石組 周辺	41	52	15	青味	完形 側面) 型造りによる菊弁の隆起あり 立ち上り内面・外面・底部外面) 露胎

5. 銅銭

遺物番号	図版番号	写真図版	銅銭名	出土	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	内郭外径 (mm)	内郭内径 (mm)	重量 (g)	初鑄年	品質形状等
15	図27-15	写真17-15	皇宋通宝	第1経塚と第3経塚石組の間	24.98	20.65	9.26	6.63	1.73	1038	北宋、完形
16	図27-16	写真17-16	治平元宝	第1経塚石組内	24.22	19.70	8.99	6.88	2.84	1064	北宋、完形
17	図27-17	写真17-17	崇寧元宝	第1経塚墓下層	24.84	19.85	9.03	6.59	2.00	1068	北宋、完形
18	図27-18	写真17-18	元豊通宝	第1経塚近く	25.09	19.65	8.62	6.21	1.83	1078	北宋、一部欠損
19	図27-19	写真17-19	元祐通宝	第1経塚墓下層	—	—	9.07	6.23	1.33	1086	北宋、一部欠損
20	図27-20	写真17-20	元祐通宝	第1経塚と第3経塚石組の間	23.26	19.71	7.11	5.62	1.54	1086	北宋、一部欠損
21	図27-21	写真17-21	紹聖元宝	第1経塚墓下層	24.36	19.48	9.16	7.08	2.58	1094	北宋、完形
22	図27-22	写真17-22	紹聖元宝	第1経塚近く	23.71	19.21	8.89	6.88	1.60	1094	北宋、完形
23	図27-23	写真17-23	大観通宝	第1経塚	24.23	22.15	7.98	6.18	2.46	1107	北宋、一部欠損
24	図27-24	写真17-24	—	第1経塚近く	—	—	—	—	0.61	—	約1/4欠損
25	図27-25	写真17-25	—	第1経塚墓下層	—	—	—	—	0.75	—	ほぼ欠損

(2) 第2経塚

1. 常滑焼

遺物番号	図版番号	写真図版	種類	器種	出土	口径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	品質形状等
26	図28-26	写真18-26	常滑焼	壺	第2経塚内	19.3	30.7	内面) 2.5YR3/3 緑灰褐色 外面) 10YR4/3 にぶい黄褐色 断面) N7/ 灰白色	1mm程の黒色粒、 5~7mm程の砂粒	口縁部) 自然釉、ヘラケズリ及びナデ、 一部指押がみられる 胴部) 上部はヨコナデ、中部は輪線模 底部) ヨコナデ、平底

2. 経筒

遺物番号	図版番号	写真図版	種類	器種	出土	品質形状等
27	図29-27	写真19-27	経筒	馬身	26 (常滑焼) 内	高さ26.1cm、厚さ1.6~2.4cm、直径10.9cm、素文鏡が底板として転用される
28	図29-28	写真20-28、93-28	経筒	蓋	26 (常滑焼) 内	直径10.7cm、縁高0.6cm、厚さ8.1cm、重量86.9g、銅鏡(薄草草鳥鏡)が蓋として転用される、裏面磨面、丸形、和鏡、細線内縁式

3. 紙本経

遺物番号	図版番号	写真図版	巻	出土	軸長 (cm)	軸幅 (cm)	品質形状等
29	—	写真21-29、22~27	巻第一	27 (経筒) 内	24.1	0.5	第7紙以降破損甚大
30	—	写真21-30、28~34	巻第二	27 (経筒) 内	24.4	0.5	第8紙以降破損甚大
31	—	写真21-31、35~41	巻第三	27 (経筒) 内	24.7	0.5	第5紙以降破損甚大
32	—	写真21-32、41~46	巻第四	27 (経筒) 内	24.3	0.5	第4紙以降破損甚大
33	—	写真21-33、46~52	巻第五	27 (経筒) 内	24.0	0.5	第9紙以降破損甚大
34	—	写真21-34、52~57	巻第六	27 (経筒) 内	24.3	0.5	第6紙以降破損甚大
35	—	写真21-35、58~62	巻第七	27 (経筒) 内	24.9	0.5	第6紙以降破損甚大
36	—	写真21-36、63~68	巻第八	27 (経筒) 内	24.0	0.5	第5紙以降破損甚大

4. 銅鏡

遺物番号	図版番号	写真図版	文様	出土	直径 (cm)	縁高 (cm)	穿孔径 (cm)	重量 (g)	鏡及び紐座	品質形状等
37	図32-37	写真69-37、93-37	海獣葡萄鏡	下層	6.4	0.6	4.0	80.49	磨面	完形、磨鏡、小型
38	図32-38	写真69-38	網代双鳥鏡	下層	8.5	0.1	—	12.68	紐なし	一部欠損、宋鏡式、細線溝鉸式
39	図32-39	写真70-39、93-39	萩輝鳥鏡	26 (常滑焼) 内	11.1	0.7	8.2	108.58	裏面磨面	完形、和鏡、細線溝角式
40	図32-40	写真71-40、93-40	竹垣山吹草鳥鏡	26 (常滑焼) 内	10.3	0.7	7.9	94.07	裏面磨面	完形、和鏡、細線溝角式
41	図32-41	写真72-41、93-41	松喰鶴鏡	26 (常滑焼) 内	10.9	0.6	8.2	132.12	花忍座紐	完形、和鏡、細線溝角式
42	図32-42	写真73-42、93-42	薄草輝鳥鏡	上層	10.6	0.7	7.7	97.59	裏面磨面	完形、和鏡、細線溝角式
43	図33-43	写真74-43、93-43	流水水草双龍鏡	上層	10.4	0.6	8.3	51.06	裏面磨面	完形、和鏡、細線溝角式
44	図33-44	写真75-44、93-44	松喰鶴鏡	下層	11.0	0.8	8.0	95.15	裏面磨面	ほぼ完形、和鏡、細線溝角式
45	図33-45	写真76-45、93-45	草葉輝鳥鏡	下層	8.9	0.6	6.5	50.22	五弁花座紐	完形、和鏡、細線溝角式

5. 青白磁小壺・青白磁合子・白磁皿

遺物番号	図版番号	写真図版	種類	器種	出土	口径 (mm)	最大径 (mm)	高さ (mm)	色調 (胎土)	品質形状等
46	図34-46	写真77-46、78-46	青白磁	小壺蓋	26 (常滑焼) 内	39	59	11.5	青味	完形 上面) 蓮華文状の浮文の型押しあり、一部緑青付着 全体) 貫入あり
47	図34-47	写真77-47	青白磁	小壺蓋	下層	39	61	19	青味	完形 上面) 車輪文状の浮文の型押しあり、管状つまみあり
48	図34-48	写真77-48	青白磁	小壺蓋	上層	37	56	12	青味	完形 上面) 菊花文又は蓮華文状の浮文の型押しあり、蓮花管状つまみ
49	図34-49	写真77-49	青白磁	小壺蓋	上層	33	53	12	青味	完形 上面) 二重の菊花文状の浮文の型押しあり
50	図34-50	写真78-50	青白磁	小壺蓋	上層	17	35	11.5	淡黄灰色	口縁部が1/4程度欠損
51	図34-51	写真78-51	青白磁	小壺身	26 (常滑焼) 内	48	63	44	青味	完形 体部外面) 花卉状の浮文 体部下方~底部外面) 露胎 底部外面) わずかに削り出して高台状とする
52	図34-52	写真78-52	青白磁	小壺身	上層	45	59	40	青味	完形 体部外面) 花卉状の浮文あり 体部下方~底部外面) 露胎 底部) わずかに削り出して高台状とする
53	図34-53	写真78-53	青白磁	小壺身	上層	44	61	42.5	青味	1/4程度欠損 体部外面) 花卉状の浮文あり 体部下方~底部外面) 露胎 底部) わずかに削り出して高台状とする

遺物番号	図版番号	写真図版	種類	器種	出土	口径(mm)	最大径(mm)	高さ(mm)	色調(胎輪)	品質形状等
54	図34-54	写真79-54	青白磁	小壺身	上層	49	68	53	灰色味	ほぼ完形 体部外面 格子文状の浮文あり 体部下方～底部外面 露胎 底部)中央をわずかに削って凹面をなす平高台とする
55	図34-55	写真79-55	青白磁	小壺身	上層	50	67	39	白色味	完形 底部外面 露胎 底部)削り出し高台状とする
56	図34-56	写真79-56	青白磁	合子蓋	上層	55	60	17	青味	ほぼ完形 上面)草花文、側面)菊弁型造りによる雕刻あり 口縁縁部)露胎
57	図34-57	写真79-57	白磁	皿	上層	—	112	25	—	ほぼ完形、白磁六輪花皿 口縁部)横方向に捻折、口縁縁部は六輪花 体部内面)堆積、其込みと体部内面の境に墨線を描く

6. 短刀

遺物番号	図版番号	写真図版	出土	法量 (cm)								備考
				全長	刃部			基部			目釘孔径	
					長さ	最大幅	縁厚	長さ	最大幅	厚さ		
58	図36-58	写真80-58	上層 (33.3)	(26.2)	3.2	0.6-0.9	(7.1)	1.7	0.1-0.3	0.3	切先・基部欠損	
59	図36-59	写真80-59	上層 (26.6)	(26.6)	3.3	0.7-0.8	—	—	—	—	基部欠損	
60	図36-60	写真80-60	上層 (12.4)	(12.4)	2.7	0.5	—	—	—	—	切先・基部欠損	
61	図36-61	写真80-61	上層 (25.1)	(20.7)	3.0	0.5-0.7	(4.4)	1.9	0.1-0.3	0.4	切先・基部欠損	
62	図36-62	写真80-62	上層 (20.6)	(20.6)	3.0	0.8	—	—	—	—	切先・基部欠損	
63	図36-63	写真80-63	上層 (18.4)	(12.5)	2.9	0.5-0.8	(5.9)	2.2	0.1-0.3	0.5	切先・基部欠損	
64	図36-64	写真80-64	上層 (13.3)	(13.3)	(3.1)	(1.2)	—	—	—	—	切先・基部欠損	
65	図36-65	写真80-65	上層 (9.7)	—	—	—	—	—	—	—	刃部から基部か、最大厚0.5cm	
66	図37-66	写真81-66	上層 (28.6)	(20.3)	2.6	0.85-1.2	(8.4)	2.0	0.1-0.5	0.4	切先・基部欠損、基部に木質残存	
67	図37-67	写真81-67	上層 (19.3)	(16.2)	2.6	0.5-0.6	(3.1)	1.9	0.5-0.6	—	切先・基部欠損	
68	図37-68	写真81-68	上層 (18.2)	(16.7)	2.7	0.5-0.6	(1.5)	1.8	0.55	—	切先・基部欠損	
69	図37-69	写真81-69	下層 (6.8)	—	—	—	(6.8)	2.0	0.2	—	刃部・基部欠損	
70	図37-70	写真81-70	上層 (5.2)	—	—	—	(5.2)	1.8	0.2-0.4	0.5	刃部・基部欠損	

※()は残存法量

7. 火打鎌

遺物番号	図版番号	写真図版	出土	法量 (cm)				備考
				全長(残存長)	幅(残存幅)	厚さ	孔径	
71	図39-71	写真81-71	上層	6.9	2.3	0.2-0.5	0.08	両端部が欠損
72	図39-72	写真81-72	上層	7.0	2.9	0.6-0.8	0.2	片方の端部が欠損

8. 銅銭

遺物番号	図版番号	写真図版	銅銭名	出土	外縁外径(mm)	外縁内径(mm)	内郭外径(mm)	内郭内径(mm)	重量(g)	初辨年	品質形状等
73	図40-73	写真82-73	富春神宝	第2経塚外西面石垣間	23.55	19.10	8.04	6.46	1.78	818	日本、完形
74	図40-74	写真82-74	太平通宝	第2経塚、Y石右側	24.00	20.16	7.56	6.80	1.71	976	北宋、完形
75	図40-75	写真82-75	咸平元宝	第2経塚石垣間	24.77	19.29	8.59	6.39	2.01	998	北宋、完形
76	図40-76	写真82-76	景德元宝	第2経塚石垣間	25.06	18.18	7.55	5.58	1.89	1004	北宋、左側欠損
77	図40-77	写真82-77	景德元宝	第2経塚石垣間	24.31	20.34	7.43	6.60	2.19	1004	北宋、完形
78	図40-78	写真82-78	景德元宝	第2経塚石垣内	25.23	20.47	8.64	8.19	0.98	1034	北宋、完形
79	図40-79	写真82-79	皇宋通宝	第2経塚外西面石垣間	23.23	17.61	7.73	5.89	1.42	1038	北宋、完形
80	図40-80	写真82-80	皇宋通宝	第2経塚	24.71	19.77	9.21	6.94	1.58	1038	北宋、右側一部欠損
81	図40-81	写真82-81	皇宋通宝	第2経塚石垣間	24.59	20.01	8.85	7.15	2.31	1038	北宋、一部欠損
82	図40-82	写真82-82	皇宋通宝	第2経塚石垣間	25.01	19.99	9.82	6.68	2.57	1038	北宋、ほぼ完形
83	図40-83	写真82-83	皇宋通宝	第2経塚南東(上層)	24.95	21.01	9.41	7.32	2.12	1038	北宋、完形
84	図40-84	写真82-84	至和元宝	第2経塚石垣の間	24.65	19.76	9.44	6.91	2.51	1054	北宋、ほぼ完形
85	図41-85	写真82-85	嘉祐元宝	第2経塚	23.60	18.58	7.42	5.70	1.78	1056	北宋、完形
86	図41-86	写真82-86	嘉祐元宝	第2経塚石垣上	24.21	18.07	8.24	6.08	2.10	1068	北宋、一部欠損
87	図41-87	写真82-87	嘉祐元宝	第2経塚	23.64	18.55	8.79	6.92	2.05	1068	北宋、ほぼ完形
88	図41-88	写真83-88	嘉祐元宝	第2経塚	24.21	19.83	9.09	5.83	1.31	1068	北宋、完形
89	図41-89	写真83-89	嘉祐元宝	第2経塚石垣間	24.43	20.73	8.25	6.93	2.01	1068	北宋、一部欠損
90	図41-90	写真83-90	嘉祐元宝	第2経塚石垣間	23.46	18.82	8.10	5.81	1.57	1068	北宋、完形
91	図41-91	写真83-91	嘉祐元宝	第2経塚石垣間	24.83	17.72	8.56	7.25	2.31	1068	北宋、一部欠損
92	図41-92	写真83-92	元豊通宝	第2経塚石垣上	23.87	18.67	7.62	5.24	2.74	1078	北宋、一部欠損
93	図41-93	写真83-93	元豊通宝	第2経塚石垣上	25.31	18.71	8.08	6.05	2.21	1078	北宋、ほぼ完形

遺物番号	図版番号	写真図版	銅鏡名	出土	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	内郭外径 (mm)	内郭内径 (mm)	重量 (g)	初請年	品質形状等
94	図41-94	写真83-94	元豊通宝	第2経塚石垣間	24.13	19.75	9.34	6.30	1.40	1078	北宋、左側一部欠損
95	図41-95	写真83-95	元豊通宝	第2経塚石垣間	24.32	17.87	9.23	5.89	2.25	1078	北宋、一部欠損
96	図41-96	写真83-96	元豊通宝	第2経塚西面石垣間	25.20	19.87	8.79	6.75	2.14	1078	北宋、完形
97	図42-97	写真83-97	元豊通宝	第2経塚石垣間	24.84	19.83	8.28	6.94	1.48	1078	北宋、完形
98	図42-98	写真83-98	元豊通宝	第2経塚石垣の間	23.77	19.55	9.51	6.40	1.61	1078	北宋、完形
99	図42-99	写真83-99	元豊通宝	第2経塚内	23.77	19.55	9.51	6.95	2.46	1078	北宋、完形
100	図42-100	写真83-100	元豊通宝	第2経塚南と石垣の間	—	18.39	9.57	7.81	1.82	1078	北宋、一部欠損。タテ計測のみ
101	図42-101	写真83-101	元祐通宝	第2経塚石垣上	—	—	—	—	0.74	1086	北宋、元・宝は欠損
102	図42-102	写真83-102	元祐通宝	第2経塚	23.91	18.27	7.86	6.47	2.12	1086	北宋、一部欠損。タテ計測のみ
103	図42-103	写真84-103	元祐通宝	第2経塚石垣上	23.73	17.71	7.80	5.49	2.01	1086	北宋、完形
104	図42-104	写真84-104	元祐通宝	第2経塚石垣間	24.29	20.90	8.95	6.75	1.85	1086	北宋、完形
105	図42-105	写真84-105	元祐通宝	第2経塚南東(上層)	23.33	18.04	8.11	6.29	2.39	1086	北宋、ほぼ完形
106	図42-106	写真84-106	元祐通宝	第2経塚石垣間	23.74	19.61	8.63	6.10	1.79	1086	北宋、完形
107	図42-107	写真84-107	紹聖元宝	第2経塚石垣上	24.99	19.37	8.29	6.51	3.20	1094	北宋、ほぼ完形
108	図42-108	写真84-108	元符通宝	第2経塚石垣上	—	—	9.17	6.26	1.79	1098	北宋、一部欠損
109	図43-109	写真84-109	元符通宝	第2経塚石垣間	24.17	19.66	8.06	6.58	1.98	1098	北宋、完形
110	図43-110	写真84-110	元符通宝	第2経塚	24.92	19.45	8.91	6.51	2.62	1098	北宋、完形
111	図43-111	写真84-111	聖宗元宝	第2経塚石垣間	24.57	20.52	8.93	6.36	2.22	1101	北宋、完形
112	図43-112	写真84-112	政和通宝	第2経塚石垣間	24.97	21.13	8.30	7.11	2.19	1111	北宋、完形
113	図43-113	写真84-113	□□元□	第2経塚内	—	—	—	—	0.29	—	北宋、一部欠損
114	図43-114	写真84-114	□元通宝	第2経塚石垣間	—	—	—	—	1.25	—	北宋、上部欠損
115	図43-115	写真84-115	□□通宝	第2経塚南側石下	—	—	—	—	0.66	—	北宋、半分欠損
116	図43-116	写真84-116	□■□□	第2経塚石垣間	—	—	—	—	0.35	—	不明、ほぼ欠損

(3) 第3経塚

1. 銅鏡

遺物番号	図版番号	写真図版	文様	出土	直径 (cm)	縁高 (cm)	背圏径 (cm)	重量 (g)	鈕及び紐座	品質形状等
117	図44-117	写真85-117, 93-117	流水草双鳥鏡	上層	10.6	0.7	7.8	100.93	縦帯座紐	完形、和鏡、細縁外縁式
118	図44-118	写真86-118, 93-118	萩草鳥鏡	下層	9.9	0.5	7.2	51.12	縦帯座紐	完形、和鏡、細縁外縁式
119	図44-119	写真87-119, 93-119	流水草花双鳥鏡	上層	11.1	0.8	7.8	110.31	菊花座紐	右側半分欠損、和鏡、中縁直角式

2. 火打録

遺物番号	図版番号	写真図版	法量 (cm)				備考
			全長 (残存長)	幅 (残存幅)	厚さ	孔径	
120	図44-120	写真88-120	7.1	2.5	0.3~0.5	0.2	片方の端部が欠損

(4) その他

1. 銅鏡

遺物番号	図版番号	写真図版	文様	直径 (cm)	縁高 (cm)	背圏径 (cm)	重量 (g)	鈕及び紐座	品質形状等
121	図45-121	写真88-121, 93-121	草花双鳥鏡	※8.4	0.2	—	12.99	柳葉座紐	3/4程度欠損、和鏡、細縁薄鉢式
122	図45-122	写真89-122	—	※11.1	0.7	—	16.87	—	銅鏡片
123	図45-123	写真89-123	—	—	0.7	—	4.29	—	銅鏡片
124	図45-124	写真89-124	—	—	—	—	3.38	—	銅鏡片
125	図45-125	写真89-125	—	—	0.7	—	8.68	—	銅鏡片
126	図45-126	写真89-126	—	—	0.7	—	5.32	—	銅鏡片
127	図45-127	写真89-127, 93-127	—	—	—	—	4.01	菊花座紐	銅鏡紐

※復元径

2. 青白磁合子

遺物番号	図版番号	写真図版	種類	器種	出土	口径 (mm)	最大径 (mm)	高さ (mm)	色調 (胎釉)	品質形状等
128	図46-128	写真90-128	青白磁	合子蓋	不明	51	53	17.5	灰色焼	完形 上面) 草花文、側面) 菊弁が型造りによる隔刻あり、軸全体に貫入あり
129	図46-129	写真90-129	青白磁	合子蓋	不明	71	73	19.5	—	約1/2程度遺存 上面) 不明な隔刻あり、側面) 菊弁の型造りの隔刻あり、軸全体に貫入あり

3. 短刀

遺物番号	図版番号	写真図版	出土	法量 (cm)							備考	
				全長	刃部			基部				
					長さ	最大幅	棟厚	長さ	最大幅	厚さ		目釘孔径
130	図47-130	写真91-130	不明	(10.7)	(10.7)	(3.3)	(0.7)	—	—	—	—	切先・基部欠損
131	図47-131	写真91-131	不明	(13.7)	(13.7)	2.5	0.9	—	—	—	—	切先・基部欠損
132	図47-132	写真91-132	不明	(10.7)	(7.5)	2.3	0.4	(3.2)	1.5	0.8	—	切先・基部欠損
133	図47-133	写真91-133	不明	(18.7)	(18.1)	3.2	1.0	(0.6)	(1.3)	0.3	—	刃部か。最大厚0.10cm
134	図47-134	写真91-134	不明	(5.8)	—	—	—	—	—	—	—	刃部か。最大厚0.9cm

※()は残存法量

4. 火打録

遺物番号	図版番号	写真図版	出土	法量 (cm)				備考
				全長(残存長)	幅(残存幅)	厚さ	孔径	
135	図48-135	写真90-135	不明	7.9	4.1	0.2~0.5	0.4	片方の端部が欠損

5. ガラス小玉

遺物番号	図版番号	写真図版	出土	最大径 (mm)	高さ (mm)	色
136	図49-136	写真90-136	不明	4	2	無色透明
137	図49-137	写真90-137	不明	4.5	4	黄褐色
138	図49-138	写真90-138	不明	4.5	4	緑色半透明及び白色

6. 銅銭

遺物番号	図版番号	写真図版	銅銭名	出土	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	内部外径 (mm)	内部内径 (mm)	重量 (g)	初鑄年	品質形状等
139	図50-139	写真92-139	開元通宝	不明	24.56	20.47	8.71	6.62	1.18	845	北宋、一部欠損
140	図50-140	写真92-140	開元通宝	不明	25.15	21.33	9.91	8.87	2.45	845	北宋、ほぼ完形
141	図50-141	写真92-141	淳化元宝	不明	23.98	19.25	7.89	6.09	3.12	990	北宋、完形
142	図50-142	写真92-142	咸平元宝	不明	24.44	18.18	7.52	6.14	2.73	998	北宋、ほぼ完形
143	図50-143	写真92-143	祥符通宝	不明	—	—	7.61	6.33	1.04	1008	北宋、一部欠損
144	図50-144	写真92-144	祥符通宝	北側石枠内	24.84	19.39	8.10	7.05	3.29	1008	北宋、一部欠損
145	図50-145	写真92-145	皇宋通宝	不明	25.10	19.96	10.31	7.83	2.18	1038	北宋、一部欠損
146	図50-146	写真92-146	元祐通宝	不明	—	—	8.19	6.65	1.89	1086	北宋、一部欠損
147	図50-147	写真92-147	元祐通宝	敷石	24.07	20.16	8.90	7.34	3.17	1086	北宋、ほぼ完形
148	図50-148	写真92-148	聖宋元宝	不明	23.18	18.71	10.91	6.48	1.59	1101	北宋、右下欠損
149	図50-149	写真92-149	元二通宝	不明	—	—	—	—	0.63	—	北宋、右側欠損

7. 不明鉄製品

遺物番号	図版番号	写真図版	出土	法量 (cm)			備考
				全長	最大幅	厚さ	
150	図51-150	写真91-150	不明	(7.3)	(4.3)	0.1	経路か

※()は残存法量

第5章 考 察

(1) 和歌山県における経塚

中村 浩道 (和歌山県立紀伊風土記の丘館長)

はじめに

経塚とは、平安時代の後半、末法思想の流布に伴い、仏教書の保存のため、經典などを地中に埋納したもので、中央貴族を中心に行われた。日本での造営は、寛弘4年(1007年)、藤原道長が大和国金峰山山頂に造営した金峰山経塚が最古で、はじめは貴族層が末法の危機感から弥勒下生に備え、經典を後代に伝えようとした意図があった。当初は京都を中心とする貴族階層で流行したが、やがて中世には廻国聖が諸国で納経活動を行って庶民の間に広まり、現世利益や追善供養の意味が付加され、拡大していった。

県内の経塚調査研究史

和歌山県内では、熊野三社及び高野山奥の院では早くから経塚の埋納が開始されており、すでに江戸時代にはそれらの発見報告が見られる。文政8年(1825)社地の石垣を修復するため石材を採取した時、崩落した砂礫の中から経筒が出土したという熊野本宮経塚は、その最初である。

埋納品は、銅製経筒、陶器製外容器、仏像が各1と、銀器残欠若干である。このうち経筒は高さ31.6cm、径33cmで、現存する経筒の中で最大の容積を持つ。蓋は緩やかに甲盛りのある被せ蓋で、その頂に突起状の紐をつけている。筒身は太く大きな銅板製の円筒である。陶製外容器は、高さ39cm、径41cm、であり、次の銘文7行61文字が外側に線刻されている。この銘文から保安2年(1121)大般若経600巻を50巻ずつ12分して埋納され

たことがわかる。銘文は以下のごとくである(阪田宗彦 2002)。

(陶製外筒 筒身刻銘)

熊野山如法経	銘文
大般若経一部六	百巻
白瓷箱十二合	
箱別五十巻	
保安二年	歲次辛丑十月日
願主沙門良	勝
檀越 散位	秦親任

このほか『紀伊統風土記』によると宝暦7年(1757)に若一神社社殿を修理中に発見された比井経塚がある(和歌山県 1983)。

近代に入ってから、那智山経塚が、大正7年3月11日熊野三所権現の一つである夫須美神社の西約5町のところで、郷社飛龍神社への参詣道路の左側に俗称沾池の付近の保安林が解除され、銅仏、仏具など150点余りが出土、採集された(第1回)。第2回目の発掘は、大正7年3月17日である。第1回の発掘において仏像仏具などを得たことから、さらに多くのものが埋納されている可能性を持って、多くの新たな参加者を得て掘り出したものである。この時には経筒61個分など106点が出土採集された。第3回は大正13年3月飛龍神社境外、所有地において岩窟内から三鈕素文鏡、白磁香炉、陶製椀の3点を採集した。

以上の各回の採集品は東京国立博物館に寄贈され、調査研究が行われ、『那智発掘仏教遺物の研究』として報告、出版されている。

次に昭和5年の発見がある。この年には2回にわたって発見があり、第1回目は、郷社飛龍神社参道清掃のため地均し中に偶然遺物を発見したもので、保元元年銘および建久3年

銘などの経筒 43 点他、観音菩薩像など 3 体などが出土した。第 2 回目は同一地域においてさらに、古銭 7 点、経筒 6 点が出土した。

さらに昭和 39 年には飛瀧神社境内で碎石中に経筒片、同蓋、古銭、高台付き銅器片などが出土している。

やがて昭和 39 年から 40 年にかけて青岸渡寺防災道路工事に伴う緊急調査として和歌山県教育委員会が発掘調査を実施した。遺物の散布状況から 27 箇所の遺構の存在が推定されている。出土遺物は甚大な量に及び、特に山茶碗、小皿が全体の 80% を占めている。

昭和 43 年、44 年には 3 回にわたって那智大社が主体となり、國學院大學大場磐雄団長の元、発掘調査が行われた。第 1 回は、昭和 43 年 8 月 20 日から 27 日まで、第 2 回は同年 10 月 9 日から 20 日まで、第 3 回は昭和 44 年 8 月 1 日から 15 日まで行われた。調査は参道入口から約 60m の間にわたる両側の地域で行われた。

出土遺物は、金属製品一経筒約 50、鏡 6、仏像 1、懸仏像類一拵、古銭 300 以上、そのほか剣身、刀子、短刀、鉄戈、火打ち鎌など、陶磁器類一中国陶磁（四耳壺、合子、碗、花瓶など）、常滑焼（甕一経筒外容器約 20）、渥美焼（経筒約 70、甕、壺、山茶碗、小皿、大平鉢など）、瀬戸焼（四耳壺、瓶子、山茶碗など）である（石田茂作 1928、東京国立博物館 1985、大場磐雄・小山修三 1970）。

なお主たる在銘片は以下のごとくである。

- 銅製経筒、高 30cm、口径 21cm

美濃国土岐郡延勝寺御庄

州田郷法明寺

八郡如法経一口有縁無縁

出離生死願証菩提為也

保元元年九月廿二日

取筆僧道西

莊嚴結縁衆

物部守貞泰氏

- 銅製経筒、高 30cm、口径 21cm

信濃国伊那郡伊賀賀御庄

中村郷光明寺

如法経八部奉書写

保元元年九月八日

願主僧願西

- 金銅経筒片

承安元年元癸巳三月十七日

- 梅樹双雀鏡

治承二年 飛瀧権現

- 銅製経筒、高 22.4cm、口径 8cm

大中臣口法

建久三年六月十五日

源氏女

- 銅板製経筒、高 13.8cm、口径 5.8cm

南無妙法蓮華經一部

右意趣者焉相當禪瑞

聖靈一周忌所奉願頌徳

六十六部結願証菩提

往生極楽

応安二年¹¹ 卯月十七日

下総国木内庄廻山

行阿弥並孝子敬白

- 銅板製経筒、高 13.8cm、口径 5.1cm

越後国刈羽郡北条口呂

十羅刹女本¹²因¹³元年

（梵）奉納大乘妙典六拾六部

三十番神

大永八年戊子二月吉日

- 銅板製経筒、高 9.8cm

越后住人 宗法

十羅刹女

（釈迦種子）奉納大乘妙典六十六部聖

三十番神

享祿三天¹⁴ 今日日

爲道秀妙戒也

大正 4 年（1915）頃、丹生神社社殿背後の

地ならし工事中に発見された丹生神社経塚、

大正 5 年（1916）頃、同地の八幡神社飯屋の

石地蔵祠修復のため、基壇を移動したところ、

聞覚

於芹生別所如法

如説奉書写畢。是依爲靈驗、
所奉埋粉川宝前也。願以此
善根、生兜率内院、結縁衆相
共、值遇慈氏尊、法界衆生
平等利益。敬白。〔経塚遺文〕

なお「本朝新修往生伝」によれば、信俊は如法経を書写して名山霊寺に送ったとあり、本例以外にも鞍馬寺経筒（国宝）にも彼が保安元年（1129）に追善供養の目的をもって埋納している。

新宮経塚群は、千穂ヶ峯を手法とする権現山にあり、神倉山、庵主池、如法堂経塚群に分かれる。いずれも熊野速玉大社を中心に造営された経塚群で、古来、聖地として信仰の対象となっていた。幸い破壊される以前に発掘調査をすることが出来た点で、那智山経塚とはやや趣を異にする。

高野山奥之院遺跡（石田茂作ほか 1975）は、昭和40年弘法大師開創1150年に当たったので、その記念事業として御廟前の灯籠堂改築と御廟の端垣修理、植樹を行った。この時多数の遺物が出土したので、調査委員会によって調査が行われた。

灯籠堂地区とする地域では、昭和37年6月、新灯籠堂の基礎工事に多数の納骨器と一石五輪塔などが出土した。しかし工事を急いだためか、工事完了後になってようやく散乱した遺物を収集し、層位を一部確認する程度に終わったのは残念であった。

出土遺物は陶磁製納骨器があり、国産では瀬戸窯（灰軸三耳壺、仏花瓶、小壺、茶入れ、水滴など）、常滑窯（灰軸四耳壺）、土師器（正中三年銘蓋付小壺、燈明皿）、瓦質小壺など、中国製陶磁では南宋白磁四耳壺、水注、北宋の青白磁合子、皿などがある。金属製納骨器には、筒形納骨器、同小型形納骨器、同連弁形納骨器があり、他に竹製納骨器が出土して

下層から和鏡4、青白磁合子数点、刀子の破片などが出土したと伝える広井原経塚、明治末年に偶然に発見されたと伝えられ出土遺物は願成寺に保管されている願成寺経塚など偶然に遺物などが発見され本格的な調査が行われていない例は数多くみられる（巽三郎ほか 1953）。

比井経塚は、昭和37年、出土地点確認のため、拝殿の南50mにある基壇状遺構の一部を発掘調査した結果、外容器を抜き取った痕跡と思われる石組遺構と、壺甕片が検出されたという（和歌山県 1980）。

なおかつの発見場所を再度確認調査した例は、昭和50年2月に田辺市上秋津文化財保存会が発掘調査を実施し3基の経塚が丘陵傾斜地に並んでいることを確認し、それらの結果と昭和6年調査と一致した高尾山経塚などがある（伊勢田進 1974）。

また大蔵経塚は、昭和48年9月墓地拡張中に経塚が発見され、県教育委員会が調査を行ったが、既に削平されていた事から埋納状態は不明である。当時、墓地拡張を担当した慶勝寺総代から出土状態を聴取している（和歌山県 1983）。

また昭和34年4月、粉河寺本堂裏にある粉河産土神社背後の風猛山南斜面、標高80mの雑木林中に石の下から経筒を、同年7月に経塚付近を整備中再び2基の経塚および井戸を発見、それらを第2号、第3号経塚とし、最初に発見したものを第1号経塚として調査が行われた。これらは偶然発見された経塚ではあったが、その際に調査が実施されたもの、あるいは後日に調査が行われた例である。出土した経筒銘文は陰刻で次のように記している（羯磨正信・壺井公彦 1959）。

奉納妙法蓮華經一部八卷

天治二年九月五日癸酉助教清原

信俊勸進六口大法師願尊 良忍

勝聞 堅俊

忍昭

いる。

御廟内地区は、奥之院御廟地域が該当し、空海入定の地として弘法大師信仰の中心であり、禁足の霊地でもある。このため遺物の出場体は不明であるが、御廟内の表土下で集中的に発見された。ここでは多数の納骨器と共に経筒も出土した。

出土遺物のうち国産では瀬戸窯（灰釉三耳壺、同四耳壺、卯花文壺など）、常滑窯（三筋壺）、渥美窯（広口壺）、須恵質（甕）、十瓶山窯（広口壺）、瓦製（筒形容器、小壺）中国製陶磁では、北宋から南宋時代のもので青白磁合子残欠多数のほか、青磁で蓋鉢、花瓶、水注、瓶子、白磁四耳壺、褐釉瓶子、四耳壺、天目茶碗残欠などがある。金属製納骨器では、正応5年（1292）在銘銅製納骨器をはじめ、多くの青銅製筒形納骨器、鉄製納骨器、和鏡、宋銭など、又金銅製の胎内と五輪塔の一部に穴を穿って納骨用としたものもあった。

天永4年（1113）在銘経筒は御廟の端垣に近い地下1mの処で偶然発見され、陶質の外容器は筒形で上端に小孔がある三耳を付け、印籠形の蓋がついていた。その裏面には「諸行無常是生滅法々己寂滅為樂永久二年甲午九月十日壬午奉埋之尼法楽」の墨書銘がある。またその外容器内に円筒形土製経筒がおさめられ、筒の上には方形の枠内に「天永四年癸巳五月三日壬午比丘尼法楽奉書写之矣。」と銘文が陽鑄されている。経筒内に円筒形松材の漆塗容器があってこの容器の底に経巻11巻、供養目録、法楽願文を経袿で包納して組紐で結び、さらに麻紙で包んで納入されている。このように内容はきわめて豊富で、保存の良い資料は、わが国経塚遺物の中でも特に優れたものといえる。なお、法楽願文の末尾には、「為期弥勒尊出世之時殊占弘法大師入定之地而已仰願慈尊兼憐愍願伏請大師常護持斯經必按其三會之席（中略）永久二年三月十五日比丘尼法楽敬白」とある。この法楽尼は、曼荼羅裏面の墨書銘から永承7年に生まれ、

埋経が行われた永久2年には63歳であったことが知られる。

以上が遺跡、遺物の概要であるが、御廟内では平安時代末に埋経と納骨が同じ場所で営まれている点に注目したい。納骨が中心で、御廟周辺では平安時代末から鎌倉時代のものが多く、納骨容器も中国宋代の舶載陶磁器や鎌倉時代の瀬戸窯などで、当時としては貴重な容器を使用していた。また、経筒と同系の銅製筒形容器を使用するのに対して、御廟前方の灯笼堂敷地内の出土のものは、一部御廟内と同じ遺物を含んでいるが、瀬戸窯でも小型の各種容器を利用し、銅製筒形容器なども小型のものが多い。地下の純骨層から考えて、高野聖によって諸国からあつめられたもの、あるいは個人の納骨されたものを一括埋納したのであろう。時代も鎌倉時代から江戸時代初期までに及んでおり、高野聖の回国、納骨活動と中世庶民信仰を知る資料といえよう。

ここで埋経が行われたことは、高野山を弥勒浄土とする信仰があり、経塚が営まれたのである。しかし一方では高野山を極楽浄土とする信仰もあって、これは鎌倉時代以降、多くの高野聖（念仏聖）によって盛んに回国唱導され、高野山奥之院は、念仏と納骨を中心とする聖地となって今日に至っている。奥之院遺跡にみられる納骨用容器、経塚遺物がきわめて類似している点については、今後両者の関係が究明されなければならない。

御廟は小馬蹄形の台地上に営まれているが、昭和52年には御廟台地東側の低地から、53年には東側前方部にある石田三成奉納の経蔵礎石の下から、南宋白磁壺、瀬戸、備前、渥美窯系の納骨壺などが検出された。

また偶然の発見ではあったが、それに対応して調査が計画され、実施された経塚としては、昭和32年田辺市教育委員会が発掘調査を行った飯塚山経塚（伊勢田進 1958）、平成元年12月から平成2年2月下旬に実施した熊野

本宮備埼経塚群がある。後者が本格的に知られたのは、平成元年12月から平成2年2月下旬に実施した、国庫補助事業・東牟婁地方広域遺跡群詳細分布調査によって得られた成果が最初である(黒石1990)。この調査でA、B両地点に経塚の可能性のある遺構の分布が確認され、とくにA地点は標高158mの頂上付近に位置し、約10m余りの平坦地が見られる。さらに周辺には20~30cmの川原石が散乱し、須臾器の破片なども採集されたことから、備宿の建物跡の可能性も考えられている。C地点からは瓦質の経筒筒いはいは外容器などが採集された。また大黒石と呼ばれる巨大な洞窟の割れ目からは瓦質の土器が採集され、修験関係の修法場と推定されている。また同時に丘陵の高所で、平坦面が確認され、備宿の可能性も指摘した(中村2002)。その後、当該地域が世界遺産登録のコアゾーンに含まれることから、本格的な調査が行われることとなった。平成13年12月11日から14年2月15日の間、大谷女子大学(現在の大阪大谷大学)によって調査を実施し、第1地点で32遺構、及び第3地点7遺構以上、少なくとも39カ所の経塚遺構を確認した。

さらに今回の報告の対象となった隅田八幡神社経塚がある。

隅田八幡神社経塚は、平成9年度の隅田八幡宮正遷宮に伴って境内整備事業が行われた際、多くを破損した経筒1点(第1経塚出土)が偶然発見された。その報を受けて、県教育委員会と連絡を取るとともに関係者間で対応を協議し、まずは緊急調査により記録保存を図った。しかし複数の経塚の存在が明らかとなり、さらに1基が良好な保存状態を保っていたことなどから、緊急調査では対応しきれなくなったため、平成10年度において本調査を実施することとなった(大岡1999)。

本調査は平成10年10月12日から実施された。なお経塚発見に至る前は、一辺5m余の正方形に近い四角形に石垣で台地が造り出さ

れ、南側正面の一部を除いて周囲の石垣上に土塀がめぐらされ、その地形は塚状に盛り上げられていた。塚中央の頂上には「元中第二乙(1385)五月 日」銘のある宝篋院塔が立つ。経塚の周囲をめぐる石垣の南側は神社本殿と背後の微高地を区画する東西の石垣と共有し、その石垣上には本社が並ぶ。さらに、その背後には社叢がひろがっている。最終的にこの経塚は少なくとも4つの画期があったと考えられている。

第1期

当地に経塚の築造された平安時代末期で第2経塚出土の常滑焼甕、銅鏡等多くの遺物によって裏付けられる。当地域の在地文書である『隅田文書』(和歌山県指定文化財)もこのころからあらわれる。

第2期

瓦器の用いられる13世紀(鎌倉時代)で、弘安10年(1287)から、しばしば法華経供養の行事が行われたことがうかがえる(『隅田文書』)。第2経塚上半の石組の間から瓦器片が出土しており、手の加わったことが推察される。第2経塚が中心となる10尺四方の石組(石垣2)はこの時期の築造と考えられる。

第3期

第1経塚の外容器とみられる備前焼甕の時期である。南北朝時代から室町時代前期で、経塚上の宝篋印塔、正中2年(1385)がこの時期にあたる。この時期は第1経塚がこの中央に位置する形となる。また第3経塚が設けられたのもこの時期と推察される。このとき石垣3が築かれ、3つの経塚が並んだ壇が造られたのとみられる。

第4期

周囲をめぐる石垣(石垣1)の下に江戸時代末期のものともみられる瓦片が入っており、江戸時代に最後の外周石垣が築造され、現在の形となった。

このように隅田八幡神社経塚は、平安時代末期の経塚であることが判明し、当時の遺物

がまとまった形で出土した。またそれぞれの遺構が明らかになるとともに、経塚そのものの調査例は極めて稀で、本調査で得た資料は非常に貴重なものといえよう。

むすびにかえて

以上、和歌山における経塚について、それらの調査研究史について記述してきた。これらからわかる当該地域における経塚は、熊野三山、および高野山地区での営造例は、すべての経塚の典型的な例であることが確認される。那智山地域においては200例を超える経筒の出土がある。しかし熊野・高野山以外の地域での営造例は多くはないといえる。すなわちこれらの地区とりわけ熊野三山地域に集中しているということになる。

ところでわが国にはいかほどの経塚が構築されてきたのだろうか。関秀夫（『経塚地名総覧』1984）によると、北海道から鹿児島県に至る各地に経塚が分布しており、その遺跡分布量は1005か所を超え、時期的には平安時代末期から江戸時代まで多種多様である。

いずれにせよ熊野社は全国にネットワークを巡らせており、全国を回遊して経塚誘致に活動する熊野聖の存在があった。高野山についても高野聖の活動があり、彼らが全国を回遊して納骨や経塚営造を動進した結果が現在和歌山に残されている納骨遺跡であり、経塚遺跡であるといえよう。

【参考文献】

- 石田茂作 1927 「紀伊比井王子神社蔵の経塚遺物」『考古学雑誌』18-9 日本考古学会
石田茂作 1928 「那智発掘仏教遺物の研究」『帝室博

物館学報第5』帝室博物館

石田茂作ほか 1975 「高野山奥之院の地宝」『和歌山県文化財学術調査報告書』第6冊 和歌山県教育委員会

伊勢田進 1958 「關鷲神社の板尾山経塚遺跡」『田辺文化財』2 田辺市教育委員会

伊勢田進 1974 「高尾山経塚群」『田辺の指定文化財』1 田辺市

上野元 1958 「熊野新宮地域の経塚」『熊野誌』1

大岡康之 1999 「平成10年度 隔田八幡神社経塚発掘調査概報」橋本市教育委員会

大場碧雄・小山修三 1970 「那智経塚—その発掘と出土品」熊野那智大社

瑞正信・吉田宣夫 1973 「南海電鉄橋本地区住宅開発計画区域内文化財調査概要」和歌山県教育委員会
瑞正信・壺井公彦 1959 「粉河産土神社経塚について」

黒石哲夫 1990 「東牟婁地方広成造跡群発掘調査概報」和歌山県教育委員会

阪田宗彦 2002 「東京国立博物館収蔵熊野本宮経塚出土品が語るもの」『大谷女子大学博物館調査報告書』第46冊 大谷女子大学博物館

関秀夫 1984 『経塚地名総覧』ニューサイエンス社

関秀夫 1985 『経塚遺文』東京堂出版

巽三郎・上野元 1863 「熊野新宮経塚の研究」熊野神宝館

巽三郎ほか 1953 「願成寺発掘調査報告1」願成寺

巽三郎 1957 「新宮神倉山経塚発掘調査報告」『考古学雑誌』42-4 日本考古学会

東京国立博物館 1985 「那智経塚遺宝」東京国立博物館

中村浩ほか 2002 「熊野本宮備後経塚群発掘調査報告書」『大谷女子大学博物館調査報告書』第46冊 大谷女子大学博物館

和歌山県 1983 『和歌山県史』考古資料 和歌山県

(2) 隅田八幡神社経塚の理解に寄せて

富加見 泰彦（橋本市文化財保護審議会委員）

はじめに

隅田八幡神社は「国宝 人物画像鏡」を所蔵していることで有名な神社である。平成9年度（1997）の隅田八幡神社正遷宮に伴って本殿の北側の整備事業を行った際に、大きく破損した経筒が不時発見されたことが契機となり橋本市教育委員会による発掘調査が実施され、その内容については「平成10年度 隅田八幡神社経塚発掘調査概報」（橋本市教育委員会 1999）としてすでに公表されている。調査から25年が経過し、この度「隅田八幡経塚報告書」作成の機運が高まり、令和4年度（2022）に刊行されることとなったので一文を草稿する次第である。

1. 経塚とはなにか

関秀夫は「紙本経や一字一石経のような經典を土中に埋納したところ」という（関 1985）。比叡山における遊覺大師円仁の如法写経とその埋納に端を発した経塚築造は、平安時代に入ると、末法思想の影響を受けて、弥勒菩薩と結んでその風習は広く盛んに行われるようになる。平安末期になると次第に極楽往生、現世利益を願う信仰、極めて民衆的な往生思想、血縁供養の信仰に方向付けられ発展を見せる（景山 1974）。書写・供養した經典を供養し、それらを意図的に地中に埋納したもの、あるいは、岩陰、岩盤上などの場所に配置することによって何らかの功德を得ようとする作善行為の遺跡が経塚である。

紙本經典は直接埋納されるのではなく、經典を保護した状態で埋納されることが多く、經典を経筒と呼ばれる茶筒状の専用容器に入れ、それをさらに保護するため甕、壺などの

外容器に取め地中に埋納した例が一般的である。經典以外には鏡、短刀、合子などの陶磁器のほか仏・菩薩などが埋納されるのを特徴としている。埋納品に鏡が多いのは、モノの姿を余すところなく映し出すことからヒトの心も真澄鏡の前では本心まで映し出し、包み隠すことはできないという、こうした鏡の持つ神秘性から畏怖の念を呼び起こし、鏡をご神体として崇める心理に発展したものであると理解されている。当然、魔よけの意味もあり、地中に埋めることによって經典などを保護するという常用な役割を果たす。鏡について多く埋納されるのが短刀などの利器で、鏡と同様、魔よけのために取められたと考えられている。経塚の造営は前述のように10世紀の終わり頃発生し、それは仏教的作善行為の一種として、末法思想を背景に弥勒菩薩が釈迦入滅後56億7000万年して下生し、竜華樹の下で説法するときに備えてそれまで經典を伝えたいという意図が含まれる。この行為自体が作善であり現世利益、極楽往生など一般的功德であり平安時代末期から追善供養のために営まれたとされる。

2. 経塚の分布と立地

経塚の造営は、弥勒下生のためという願いのみならず、藤原道長の経筒銘文からも現世利益などが明らかで、經典が弥勒下生時に使えることが前提であり、經典が自然に湧き出てくるように考えられ土地自体の力が必要であった。そのため聖地とされる場所、社寺の境内、または眺望の良い山峰等を選択して経塚を築いているのである。経塚の分布は、例外を除き全国的にみられるが特に山伏修験との関係が密と言われる所以である。

和歌山県における経塚は関秀夫の集成によると32か所となっているが管見では39か所を数えることができる。その違いは熊野三山の経塚の数え方によるものであろうと考えられる。経塚の分布を示したのが図1である。熊野三山、高野山などの経塚群を形成している地域には破壊されてしまった経筒の蓋残欠片が300以上出土しているという(巽 1994)。県内の出土数は紀北筋(高野山含む)を除く

と熊野九十九王子社と、天台宗系の山岳寺院の付近から発見されることが多い。もちろん、熊野三山に近づくにつれ分布の密度は高くなる。特に聖地である熊野本宮経塚群、那智経塚群、新宮経塚群は熊野詣と直接的に結びつくものでその数が多いのは当然の帰結であろう。経塚の出土地を見ると寺院、神社の境内が多く「和歌山県内の経塚についての一考察」(河野 2007)によれば35%が社寺の境内地か

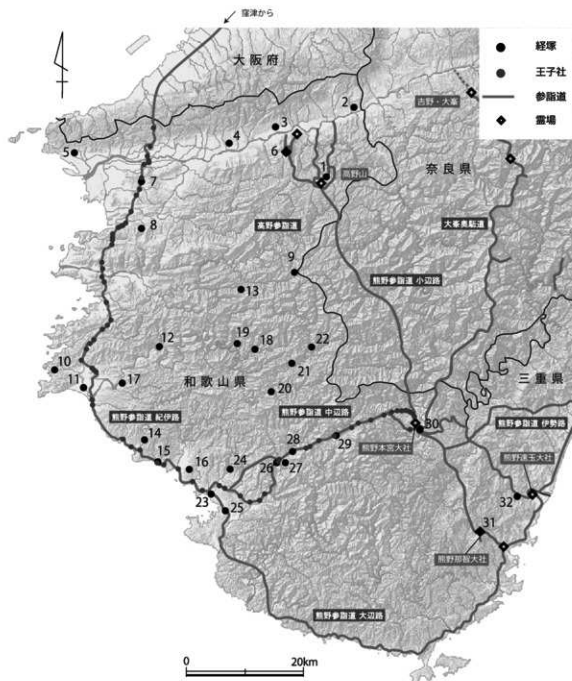


図1：和歌山県内の経塚の分布図

表1：経塚の地名表

	遺跡名	所在地	埋納品
1	高野山比丘尼法業経塚	高野山奥之院	経巻、曼荼羅、塑造経、漆俵木製内容器、陶製外容器
2	隅田八幡神社経塚	橋本市隅田	銅製経筒、銅鏡、青白磁小壺、青白磁盒子、白磁皿、常滑焼壺、短刀、火打鎌、銅銭
3	大敷経塚	かつらぎ町大敷	瓦製経筒・瓦製壺、銅鏡、銭貨
4	粉河産土神社経塚	紀ノ川市粉河	紙本経、銅経筒・陶外筒・瓦製経筒・陶壺・瓦製壺、銅鏡、刀子、火打鎌、鉄鈴、鉄鏡、瓦器、鉄鍋、瓦製片口
5	木ノ本経塚	和歌山市木ノ本	陶壺、銅鏡、瓦器皿
6	丹生神社経塚		銅鏡、青白磁盒子、刀子
7	明王寺経塚	和歌山市明王寺	瓦製経筒・陶壺・陶外筒、銅鏡、青白磁盒子、銭貨、陶壺、瓦器皿、瓦器碗
8	願成寺経塚	海南市別所	銅鏡、青白磁盒子、青白磁碗、刀子、瓦器
9	日光神社経塚	有田川町清水	銅鏡、刀子
10	比井王子神社経塚	日高町比井	紙本経、銅経筒、陶壺
11	松原経塚	美浜町吉原	山茶碗
12	西原経塚	日高川町西原	礎石経
13	広原経塚		銅鏡
14	古原経塚	印南町古原	銅鏡、青白磁盒子、刀身
15	岩代経塚	みなべ町西岩代	陶壺、銅鏡、青白磁盒子、刀子
16	熊岡経塚	みなべ町熊岡	陶経筒、青白磁盒子、刀子
17	和佐経塚	日高川町和佐	陶外筒、青白磁盒子
18	寒川神社経塚	日高川町寒川	陶壺、銅鏡
19	平の段経塚	日高川町初湯川	銅鏡、青白磁盒子、刀子、山茶碗、袋櫛
20	丹生都比売神社	かつらぎ町天野	銅製経筒・銅製経筒蓋・土師質経筒・瓦質経筒・土師質外容器・瓦質外容器・瓦質外容器蓋・土師小皿、中国製青磁碗、鉄製品、丸釘
21	広井原経塚	田辺市龍神村広井原	銅鏡、青白磁盒子、刀子
22	湯本経塚	田辺市龍神村	礎石経、経碑
23	飯塚山経塚	田辺市湊・神田	銅経筒・陶壺・瓦製経筒・陶壺、青白磁盒子、青白磁小壺、青白磁碗、刀子、銭貨
24	高尾山経塚	田辺市上秋津・中畑	経軸、銅経筒・陶壺・銅鏡、鏡筒、青白磁盒子、青白磁小壺、刀身、刀子、銭貨、松扇、櫛、水晶念珠玉、水晶丸玉、珊瑚小玉、珊瑚吹玉、露玉、灰、皿、鉄鏡
25	朝来経塚	田辺市上富田町朝来上ノ通り	
26	滝尻王子経塚	田辺市中辺路町滝尻	銅経筒、銅鏡、青白磁盒子、銭貨、鉄鏡、不明鉄器類
27	飯盛山経塚	田辺市中辺路町滝尻	銅経筒・陶壺、銭貨
28	興禅寺経塚		
29	高原経塚	田辺市中辺路町高原	経筒・陶壺・陶皿、鉄刀、銭貨、大壺、片口鉢
30	近露王子社経塚	田辺市中辺路町近露	陶壺、青白磁盒子、水晶丸玉
31	本宮経塚	田辺市本宮町黒鳥	紙本経、銅経筒・陶外筒、
32	備崎経塚	田辺市本宮町	外容器、須恵質経筒、瀬戸製経筒・土師質片・青銅器片・須恵質壺片・瀬戸壺片・瀬戸製経筒、銅鏡、影青盒子、黄釉陶盒子、山茶碗、土師質皿、緑釉壺蓋、緑釉小壺、瓦質皿、仏像
33	那智経塚	田辺市那智勝浦町那智山	水晶、銅経筒・銅経筒蓋・銅経筒底板・陶鉢・陶壺・陶壺蓋、銅鏡、盒子蓋、青白磁盒子、青白磁碗、青白磁四耳壺、青白磁小壺、青白磁小皿、刀子、刀身、銅佛像類、塔、三味形彫、佛具、銭貨、土器片、土器蓋、櫛身、金銅獅子、陶壺、白磁香炉、銅製鏡、三結片、五結片、鉄戈、御正体、瓦塔、銅水瓶、銅水滴、山茶碗、瑞帯、懸仏、鉄製品片、火打鎌
	那智礫石経塚	田辺市那智勝浦町那智山	礫石経、六器、木片
34	那智枯池経塚	田辺市那智勝浦町那智山	礫石経
35	庵主池経塚	新宮市相筋町下相筋	紙本経、陶壺・銅経筒・陶片口鉢、銅鏡、青白磁盒子、刀子、陶碗、地蔵菩薩泥像、鉄槌、土師器皿、鉄鈴、火打鎌、銭貨、不明金具
36	如法堂経塚	新宮市相筋町下相筋	紙本経、陶壺・銅経筒・陶経筒・銅鏡、青白磁盒子、刀子、佛像残欠、花瓶（懸仏）、礫石、経碑、銭貨、金門板線刻佛像
37	神倉山経塚	新宮市権現山	経巻・経軸・礫石経、銅経筒・瓦経筒・陶壺・銅経筒蓋・土師筒・陶経筒・須恵器片口鉢・陶壺、銅鏡、青白磁盒子、青白磁小壺、刀子、銭貨、佛像、懸佛金具、懸佛白壺、水晶玉、ガラス小玉、銭貨、髹飾片、須恵器皿、土師器皿、珊瑚小玉、露筒櫛
38	阿須賀神社経塚	新宮市阿須賀町	礫石経、銅経筒・陶壺、銭貨
39	宮井戸経塚	新宮市熊野池	礫石経
40	南出経塚	橋本市南出通	礫石経

ら見つかったもので、社寺に関連する裏山、参詣道なども考慮すると74%を占めるといえる。そもそも山深い神仏習合の色彩の強い山岳寺院、修験道的な信仰の色彩を持った場所、紀伊半島では熊野の那智経塚、新宮経塚など、あるいは天台宗の伽藍の付近において、直接的、間接的にそれら宗教施設と有機的な関連を以て築造されることが多いといえる。

3. 隅田八幡神社経塚

橋本市の東部はかつて隅田^{すゐ}荘と呼ばれ、京都石清水八幡宮の荘園として平安時代に成立した。この荘園には石清水八幡宮から別宮として八幡社が勧請され、隅田八幡神社として現在も鎮座している。なかでも神宝の国宝人物画像鏡は日本最古の金石文としてあまりにも有名である。

当社の創建は明らかではないが、在地資料によると12世紀初めの長治2年(1105)に「長忠延」が別宮の俗別当職として登場するのが初見である。「長忠延」は天永2年(1111)に隅田荘公文職にも任じられていて両職を兼ね信仰と行政を掌握していた人物である。その職は代々子孫に受け継がれ、武士化するにおよんで鎌倉時代には紀伊国守護となった北条氏の被官となり重用されることとなった。隅田八幡神社は、隅田一党の信仰の中心であり正月の朝拝、8月の放生会が行われたことが建長5年(1253)の「八幡別宮明年朝拝頭人差定状」、元亨2年(1322)の「隅田八幡宮明年御放生会頭人差定状」などの資料からうかがい知ることができる。法華経供養もしばしば行われ、弘安10年(1287)、嘉暦2年(1327)、嘉暦3年(1328)、嘉暦4年(1329)、正平20年(1365)の資料によって知ることができる。

經典埋納経塚は3基発見され、第1経塚は外周石垣のほぼ中央に位置する元中2年(1385)の宝篋印塔の真下に埋納、第1経塚の東50cm

第2経塚、西80cmの位置に第3経塚がある。いずれも経塚に周囲は石列によって画され、平らな石を敷設する。第1経塚は、報告によると後世に幾度が改変されているようで保存状態は悪く破損した経筒のほか本来は外容器であったと推察される須恵器甕、備前焼甕の破片が散乱していた。第2経塚は一辺約3mの正方形に画された石垣の中央に位置し保存状態が最も良い。常滑焼の甕を外容器とし、甕の中には銅製経筒(27)、銅鏡(39~41)、青白磁小壺(46、51)が収められている。外容器と石組の隙間には短刀、銅鏡、青白磁小壺、合子、銅銭、火打鎌が出土している。経筒内には8巻の法華経の経巻が確認されている。第3経塚は検出された経塚の中では新しく、経筒は検出されていないが底の平石と銅鏡3面が検出されている。半壊状態で見つかった経筒は器高を復元すると13.7cmと低い。鎌倉時代の経筒は18cm前後とやや低くなり室町時代になるとさらに10cm前後となる。これは取納経巻の寸法に関係し、室町時代には経塚营造が廻国納経と結びつき、必然的に小型軽量化が望まれたためである。このことを考えると当経筒は室町期と考えることが妥当であろうと推察される。筒身の外側、または内部や蓋の表裏に銘文、図像がみられることが多く、陰刻・笥書で抽出・墨書きの例もある。銘文には宮人々々の名前・年月日、經典の種類、目的などが記されている。このように考えると、第1経塚の外容器は法量から須恵質の甕が妥当かと考えられるが、バラバラの状態で検出された比較的時期の新しい備前焼(器高62.3cm)甕も、その蓋然性は捨てきれないと思われる。検証する余裕は持ち合わせていないので、今後の検討課題といえる。

以下、紀の川筋に造営された経塚を隅田八幡神社経塚を理解するうえで参考となるので掲げておく。

(1) 高野山奥之院出土経塚 高野町高野山

真言宗の総本山空海が開いた高野山の奥の院から出土した「天永四年(1113)在銘経筒」は、禁足地である御廟に近いところから偶然発見されたものである。外容器は陶製の筒型を呈し、上端に小孔のある三耳を付け、印籠形の蓋が付いている。裏面には「諸行無常是生滅法生滅々已寂滅為業永久二年甲午九月十日千午奉之尼法楽」の墨書名がある。この外容器内に円筒形銅製経筒が収められ、筒の上には方形の枠内に「天永四年天巳五月三日壬午比丘尼法楽奉書写之矣」の銘文が陽鑄されている。経筒内に椀形の漆塗り容器があつて、容器の底には絹本墨書曼荼羅を畳んで敷き、その上に紺紙金泥などの

経巻11巻、供養目録、法薬願文を経帙で包納し組紐で結び、さらに麻紙で包んで納入されている。内容も極めて豊富で保存良好な資料は、我が国経塚関係遺物の中でも特に優れたものと言われる。法薬願踏文の末尾には「為期弥勒慈尊出世之時…弘法大師…永久二年三月十五日比丘尼法楽」とあり、弥勒の世まで経巻の護持を願った法薬尼の強い大師信仰がうかがえる。

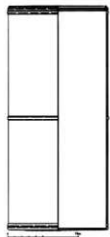


図2：高野山奥之院出土銅製経筒実測図

(2) 大蔵経塚 伊都郡かつらぎ町大蔵

慶勝寺墓地拡張工事で椎の大木の根元、表土下約40cmから出土したといわれる。県史には以下のような聞き取り調査が記載されている。「径約10cmの平らな川原石が10数個一重に整然と敷かれた状態で出土した。その下部から約15cm×20cmの平らな川原石とこ

れよりやや大きめの片岩があり、上下に重なって発見された。2枚の岩石の下は径約40cmの空洞であった。外容器の発見であった。(略)中に径約15cmの円形の平らな石の上に経筒が安置されその横に和鏡が埋納されていた」という。出土遺物は須恵器外容器、瓦製経筒、和鏡(菊花飛鳥鏡)、宋銭「元祐通宝」



写真1

(宋 初鑄 1086年)がある。「元祐通宝」は隅田八幡経塚でも埋納されている宋銭である。

(3) 粉河産土神社経塚 紀ノ川市粉河寺境内

粉河寺本堂裏の粉河産土神社背後の風猛山南斜面で植林中に石の下から経筒が発見された。その後2基の経塚と井戸が発見された。第1号経塚は平安末期天治2年(1125)のもので、陶製外容器は自然石を蓋にしたもので口縁部を除き旧態を保っていた。内部には、青銅製の有蓋経筒があつたが伴出物は認められなかった。第2号経塚は鎌倉初期のもので、深さ50cm、径45cmの穴を穿ち、周りに人頭大の自然石を並べ東西1.4m、南北1.6mの方形の区画を構築している。土壌には須恵質の片口鉢を蓋にした常滑甕が置かれ、中には経筒が収められ、外には短刀、鉄鈴、鉄杖、鉄鎌、鉄製提子、瓦器碗が副納されていた。第3号経塚は、石郭は大きく破壊され、多



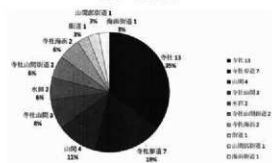
写真2

数の木炭に混じって常滑甕片、短刀、鏡、鉄製鍋、瓦器が散乱した状態で、上部からは瓦質の三耳壺片、須恵器壺の底部、青磁片が発見されている。瓦質三耳壺は経巻を取っていた容器として用いられたものと考えられる。常滑焼壺からは山吹双雀鏡、山吹若松双鳥鏡、蓬萊山鴛鴦鏡、素文六花鏡片、飛雀鏡片が出土している。平安時代から鎌倉時代にかけてのものと考えられている。社務所裏の法面から、かつて十数枚の小型の土師器皿を主とした遺物を採取したことがある。風猛山南斜面全体に経塚が造営されている蓋然性は高いと考えられる。

4. まとめ

紀伊半島には数多くの経塚が営まれており、それらの多くは南海道・熊野参詣道沿いを中心として造営されたものが多い。紀伊における経塚について、その傾向について抽出することによってまとめに変えたい。39か所の経塚の位置をグラフにしたのが表2である。一見して解することは前述のように寺社の境内から出土することが最も多く、これに寺社の山道、寺社山間、寺社山間街道、寺社海浜からの出土を加えると70% (27件) が寺社と関係がある場所に造営されていることが看取される。次いで山間に造営されたものが11% (4件)、街道という視点で見れば9% (3件)、寺社の山間街道も加えると15% (9件) となる。このことは、熊野三山と蟻の熊野詣といわ

表2：経塚立地



れた熊野参詣道との密接な関係を改めて示す数字であり、例外を除き紀伊半島における経塚造営が吉野、高野、熊野のいわゆる「三野」がその中心地であったことは言を俟たないであろう。

表3：埋納品の比率

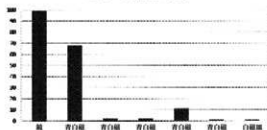


表3から埋納品の比率を見ると鏡が圧倒的に多くすべての経塚に収められていることがわかる。埋納品に鏡が多いのは、モノの姿を余すところなく映し出すことからヒトの心も真澄鏡の前では本心まで映し出し、包み隠すことはできないという、鏡の持つ神秘性から畏怖の念を呼び起こし、鏡をご神体として崇める心理を良く表している。

鏡について多いのは青白磁合子が多い。隅田八幡経塚においても鏡について多いのが青白磁合子である。なお、隅田八幡神社経塚では火打鎌が4点出土しているが、この例以外は承知していないので当経塚に限っての埋納品であるかもしれない。

経筒について表したのが表4、表5で集中する領域があることが読み取れる。平安時代の経筒は21cm～24cm前後、鎌倉時代は18cm前後、室町時代は9～11cmの値を示す。このことから第1経塚の示す年代はおそらく室町時代と考えて大過ないであろう。

表4：和歌山県出土経筒簡量（総高と口径）

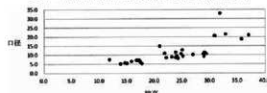


表5：和歌山県出土経筒法量（身長と口径）

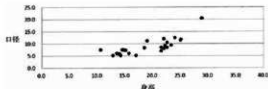


表6：和歌山県出土経筒法量（総高と個数）

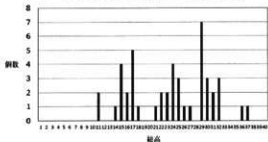


表6からは経筒の大きさが平安時代、鎌倉時代、室町時代と明らかに3区分していることが理解される。表にはしていないが経筒の製造は陶製、銅板製、瓦製、鋳銅製であることを付記しておく。

【参考文献・引用文献】

- 図1・表1：藤森寛志他（2017）より転載
 図2：和歌山県（1983）より転載
 表2-6：河野（2007）を元に作成
 写真1・2：和歌山県立紀伊風土記の丘提供
 河野恭子 2007「和歌山県内の経塚についての一考察」『郵政考古紀要』第41号 大阪郵政考古学会
 国史大辞典編集委員会 1984『国史大辞典』4 吉川弘文館
 小山靖憲 2000『熊野古道』岩波書店
 関秀夫 1984『経塚地名総覧』考古学ライブラリー24 ニューサイエンス社
 興三郎 1979「経塚」『和歌山の研究1』地質・考古編 清文社
 橋本市教育委員会 1999『平成10年度 岡田八幡神社経塚発掘調査概報』橋本市教育委員会
 藤森寛志他 2017『道が織りなす旅と文化』和歌山県立紀伊風土記の丘
 保坂三郎 1977「経塚」『新版 仏教考古学講座』第6巻 雄山閣
 和歌山県史編纂委員会 1983『和歌山県史』考古資料和歌山県

(3) 中世の隅田庄について

岩倉 哲夫 (橋本市文化財保護審議委員)

隅田庄の成立

隅田庄は、延久4年(1072)の「太政官牒」(『石清水文書』)によれば、10世紀末の寛和年間(985～87)の頃に摂関家の藤原兼家が石清水八幡宮の内に建立した御願三昧院の御料所として成立している。水田は29町と記されている。この際に紀伊国の国司が藤原兼家の圧力を受けて、隅田村の「正税直等」を田地の開発数に任せて免除したものとされ、国免庄の性格を持っていたとする見方がある。

しかし、万寿5年(1028)に宣旨によって、隅田庄は、当初臨時雑役免除を認められていた、寄人(隅田庄に居住する有力農民)が免田一筆ごとに耕作を請け負う形態の免田・寄人型庄園で雑役のみが免除され、租税の納入義務を有する領域を持たない脆弱タイプの庄園であったと思われる。

のちに隅田庄の本家職(上級庄園領主としての権利)は藤原氏から一条院(藤原氏ゆかりの里内裏)に寄進され、領家職(本家職に次ぐ庄園領主としての権利)は石清水八幡宮が保有していた。この一条院の所有は長く続かなかつたものと思われる。

ところで、庄園の範囲は長承元年(1132)の相賀庄の「四至界注文」(『根来要書』)によって、西は「妻谷」であったことがわかる。東は大和国境の真土峠であった。ただし、北部の畠田・木原は紀伊国隅田庄とある。庄園期には隅田庄の色合いが強い。弘安11年(1288)1月19日付の紀伊国隅田庄木原・畠田の隅田三郎兵衛入道宛の地頭代補任状が残る(『隅田家文書』『和歌山県史中世史料』1以下、隅田庄内の中世文書は原則としてこれによる)。後世には明確に大和国宇智郡(現五條市)となる。

地元の有力者であった長忠延が元永元年(1118)に隅田八幡宮の俗別当職に任じられ、後に、公文職に任じられたとみられる(『隅田家文書』)。

この長氏はやがて藤原氏を名乗り、この職を世襲して隅田一族の惣領家の原形をなしたとみられる。この系統は週れば、平安期の寄人に至るものと思われる。長氏の名乗りから、古代的那賀郡の中心的家族、長氏の系統を引いているものとも思われる。

高野山領庄園の最古の庄園となる官省符庄でも庄園の有力層として坂上氏と並んで、長行任なる者が永久年間(1113～18)に登場し、高野政所司司良快に刀傷に及んで所領を没収されていることが、天治2年(1125)の「官省符庄住人等解状」(『高野山文書』)によってわかる。

また、平成10年(1998)に発掘された隅田八幡神社経塚から出土した紙本経(法華經)の8巻には長寛2年(1164)9月6日の書写年代が記され、2巻には「為女藤井氏現世安穩後生菩提也所生愛子安穩太平」と記され、6巻には「藤井是奉女□氏□後□□」とある。現世安穩や長寿を願ひ、後世菩提のために経を奉納したことが見える。藤井氏も那賀郡に基く家族とみられ、「所生愛子」との文言が見られるところから、那賀郡から伊都郡へ縁付いた人物の可能性もあろう。

『扶桑略記』の永承7年(1052)の条に今年始めて末法に入ったことが記され、日本の仏教伝来の552年が、釈迦入滅後の1500年目と信じられていた。これが像法の真中と信じられ、この500年目が末法とされたのである。末法には仏法が廃れ、世が乱れると考えられていたので、末法思想から逃れるために有力層は、納経等の活動をしたのである。

ところで、伝承であり直ちに歴史的事実とはできないが、「粉河寺縁起」に記された紀和国境近くにあった「粉河田」の伝承地である。3段ある「粉河田」に夜ごとに墨染めの衣を着た小僧が2把ばかり刈り取って粉河寺の本堂に納めていたという。良心なる僧侶が、この「粉河田」を刈り取る小僧の霊夢を見たという。この小僧は、「大悲大将」と名乗り、粉河寺に久しく住する者で、「粉河田」は国の一の坪で国の民を憐れむがゆえに、上分を刈り取って粉河寺に供えているとの説明をしたという（「粉河寺縁起」）。

これらの件から、隅田庄が那賀郡と深い繋がりを持っていたことがわかる。このあたりの歴史的背景の解明は今後の課題となろう。

平安期末期の隅田庄における隅田一族の所領状況を示す史料は、仁安元年（1166）11月付の「公文藤原忠村田畠等処分状案」（「隅田家文書」）である。

これによれば、「一処 芋生居内家地田畠在家立物等」と表記された屋敷地であり、その芋生村の屋敷地に田畠や在家等が含まれ、在地領主としての姿が現われている。これには四至が示され南は紀ノ川に接しており、河岸段丘上に屋敷を構えていたとみられる。

「切山分一処」、「字十豆野一処」、「字河原一処」等と表記された山や原野、河原が表記され、狩猟や軍事訓練の場所としての意味を持っていたものと思われる。

「有次垣内七段」、「友貞垣内三段」、「河南字小犬坪一処作三段」、「河南字小芋生重任垣内作三段」等に見られる垣内等の表記は、隅田庄内の一般農民を統制する存在であったことを示すものと思われる。ちなみに、河南の「小犬」や「小芋生」の地名表記は、後世の恋野の地名に繋がるものと思われ、芋生の住民が河南に移住して農地開発した結果の小地名であろう。

また、「樋口三段田兼行作 在北西荒」、「字一処みの原荒」、「字高藏一処保太作荒」、「字

河原一処作二町五段^田」等に見られる「荒地」は、在地領主として開発の拡大を目指す隅田一族の姿勢を示したものであろうし、一般農民との対立も視界に入ってくるよう。

この公文藤原忠村の田畠処分状案には、その末尾に14人とみられる在地刀称の承認を受けているところから、在地の有力農民の認定によって、藤原忠村の在地支配が成立したことを示している。

鎌倉期の隅田庄

鎌倉期初期の建仁元年（1201）に藤原良村が隅田庄の預所に就任しているのは、従来の石清水八幡宮から派遣されていた預所からの交代を示し、隅田庄が隅田一族による請所となっていたことを示すものであろう。

鎌倉幕府の成立によって、諸国に守護・地頭が設置されたものの、東国政権ゆえに西日本には希薄なものがあつた。

紀伊国の守護についても、元暦元年（1184）に豊島有経が守護に任じられたが、平氏滅亡にともなって停止され、その後、建仁3年（1203）頃に佐原義連が就任するものの、承元元年（1207）からは紀伊国は和泉国と共に守護は設置されないことになっていた（「吾妻鏡」）。これは、両国が上皇や法皇等の熊野詣の駅家雑用を負担しているという理由であったが、幕府と朝廷方の政治折衝によって、幕府方が譲歩した結果とみられている。

しかし、承久3年（1221）の承久の乱によって、この譲歩も崩壊して紀伊国にも守護が復活する。守護に就任したのは、三浦義村や佐原家連（義連）等であった。しかし、宝治元年（1247）の宝治合戦で、三浦氏や佐原氏が滅亡すると、紀伊国守護も弘安3年（1280）以降、北条一族で六波羅探題を襲撃した北条重時（3代目執権北条泰時の弟）の家系が務めることとなり、隅田庄の隅田氏もその家人となり、隅田庄の地頭代に就任した。なお、

地頭職は、重時流北条氏が保有していた。

ちなみに、建長6年(1254)に北条重時の使者として、隅田次郎左衛門尉が鎌倉の北条時頼のもとに赴いていることがわかる(『吾妻鏡』)。また、文永6年(1269)には六波羅探題北方北条時茂(重時の子)の家人として、隅田兵衛五郎の名前が登場する(『東寺百合文書』)。

鎌倉期の隅田一族の領主的傾向を示す史料として、元応2年(1320)10月の隅田二郎兵衛入道信教が子の三郎左衛門忠長に与えた讃状がある(『葛原文書』)。これには、隅田北庄境原村の本人の屋敷の他、10数人の下人の名前が記され、その下人には(1)在家や田地の両方を給されていない者、(2)在家を給されず田地を給されている者、(3)在家と田地の両方を給されている者に、大分できる。(1)は家内奴隸的な下人で、(2)は(1)の発展した下人、(3)は独立自立した下人であり、家人に近い者と考えられる。

これらのことから、隅田一族を構成する氏の在地における存在形態を垣間見ることができる。(3)の下人の中には、「殿」を付けられる者も登場し、家人的存在であったことを裏付ける。これは、自立農民からその傘下に加わった者であるのか、下人から発展した者かは判然としませんが、隅田一族の在地支配のあり方を示すものであろう。

鎌倉期の隅田一族の構成として、森・垂井・山田・渋谷・橋屋・中嶋・新・上田・兵庫・葛原・野口・山内といった13氏が挙げられている(井上寛司「紀伊国隅田党の形成過程」『ヒストリア』64)。平安期に登場する長氏が、藤原氏を称していたが、これらが鎌倉期には在地名を名乗る氏として成立していったのであろう。ことに隅田惣領家と葛原氏等は隅田庄内の有力層として藤原氏を称していたのであろう。他に橘氏を称した上田氏や源氏を称した松岡氏等がいる。

地元で長らく隅田一族を研究した尾崎能孝

氏によれば、鎌倉期の隅田一族は、葛原・境原・垂井・山内・橋谷・寺山・中嶋・渋谷・上村・上田・近江・竹内・下・森・中・山田の16氏が挙げられている(『隅田党』『きのくに文化財』1号)。

隅田庄の総氏神の隅田八幡宮には、石清水八幡宮の神事を模倣したとされる8月15日に実施された放生会があった。仁治2年(1240)の「隅田八幡宮社僧等定書案」(『六坊家共有文書』)によれば、隅田八幡宮で、六波羅探題の依頼によって、大般若経等の転読を実施し、「大施主殿下息災安穩」等の祈祷をしていることがわかる。建長3年(1251)の「阿弥陀堂所作定書」(『六坊家共有文書』)に記されている「阿弥陀堂」とは隅田八幡宮の神宮寺となる大高能寺のことであろう。これによれば、1月に修正会を実施し、供餅百枚の原料としての米三斗を計上していることや、7月15日盂蘭盆会を実施していたことがわかる。このほか、8月15日の放生会に流鏝馬の神事を実施していたことや、修正会には朝拝神事が行われていたことがわかる。朝拝神事は建長5年(1253)1月1日付けの「隅田八幡宮朝拝頭人差定」(『隅田家文書』)に4人の名前が記されたものを初見として、この種類の記録が残る。

なお、隅田八幡宮の六坊家とは、神社に仕える僧侶の六家のことで、新坊・中之坊・南之坊・辻之坊・乾之坊・角之坊とされる。社伝によれば、応保元年(1161)に鎌倉の鶴岡八幡宮を当地に勧請した空山上人が鎌倉から下向した際に、ともに移住したとされるが、この伝承は隅田惣領家と北条氏の関係が深まった鎌倉中期以降に形成されたもので、そのまま歴史的事実とするのは問題が残る。

現実として、六坊等は京都の石清水八幡宮から派遣された社僧とみなすほうがよいと思われる。

隅田八幡宮の神事に関する朝拝や放生会等の史料を見る限りでは、隅田一族が重要な位

置を占めていたことは確かであるが、すべてを独占していたわけではなさそうである。8月15日は放生会の頭役は、御供頭・響頭・田楽頭・相撲頭・御神酒頭・楽頭・猿楽頭・伶人頭・四斗三百頭等が見える（「隅田家文書」）。これらの頭役には庄内の有力農民も配されていたものと思われる。

隅田北庄の下兵庫村に存在する利生護国寺は、隅田一族の氏寺と位置付けられている。寺伝によれば、行基の開基とされて、その開基寺院の49院の1つとされる（『紀伊統風土記』）。

弘安8年（1285）の「沙弥願心寄進状」（『護国寺文書』）によれば、隅田一族の願心が利生護国寺周辺の荒地や田畠を寺院に寄進していることがわかる。さらに正安元年（1299）の「願心所領処分状案」（『隅田家文書』）によれば、先の寄進状を受けて、願心所領の配分が記されている。

弘安9年の「藤原業能・同泰能連署注進状案」（『隅田家文書』）によれば、護国寺の寺域を含む所領の四至が記されている。これによれば、「東限湯屋谷」、「西限白井谷」、「南限大道」、「北限御山際」とあって、東西の谷と、南は南海道の系譜をもつと思われる「大道」（後世の大和街道に重なるか）の範囲の広大な土地であったことがわかる。

永仁6年（1298）の「関東祈禱諸寺注文写」（『護国寺文書』）によれば、律宗の復興に尽力した寂尊の弟子、忍性の作成で34の祈禱寺の中で、紀伊国の3か寺中の金剛寺・利生護国寺・妙楽寺が記されている。

忍性の師、寂尊は、奈良西大寺を復興し、鎌倉幕府の5代目執権北条時頼の帰依を受けたが、寂尊の自伝である「感身学正記」（『西大寺寂尊伝記集成』）によれば、建治～弘安年間（1275～88）に、度々寂尊自身が隅田庄へ布教に訪れており、護国寺がその拠点になったとも考えられる。

「利生護国寺縁起」（『護国寺文書』）によれ

ば、護国寺の中興を北条時頼としており、弘安年間以降、六波羅探題を襲撃した北条氏一門の北条重時流が隅田地頭職を所有しており、寂尊や忍性を仲介として、北条氏と当寺の関係が密接になったと推定される。

永仁6年（1298）の「六波羅探題施行状写」（『護国寺文書』）によれば、六波羅探題から守護代・地頭・御家人等の武士に対して西大寺以下の諸寺へ乱暴な行為をすることを禁じている。この諸寺とは、鎌倉幕府と深い関係にある「関東御祈禱寺」のことで、隅田庄の護国寺も含まれていたことになる。

鎌倉末期の元弘2年（1332・南朝年号、北朝年号では正慶元年）12月に河内の楠木正成は、隅田庄の隅田一族を攻撃している。幕府方の勢力とみなしてのことであろう。この時の関係文書は、正慶元年（1332）12月19日付の「六波羅感状写」（『隅田家文書』）として、北条時益と北条仲時の署名で、隅田一族中に宛てられている。文中に「数十人囚徒（楠木方）討留云々」とあるところから、楠木方の成果のあがったものではなかったと思われる。

ところが、元弘3年（1333・南朝年号、北朝年号・正慶2年）1月19日に摂津渡部橋付近で六波羅軍と戦った楠木正成は、これを大いに打ち破り、六波羅方の隅田・高橋の軍奉行等は楠木方の計略にはまることになる。翌日六条河原に「渡部ノ水イカ許早ケレバ高橋落チテ隅田流ルラン」との落書の高札が建てられ、両者は面目をなくして出仕しなかったとされる（『太平記』・「楠木合戦注文」）。

元弘3年5月7日に倒幕軍に転じた足利高氏の京都攻撃によって、六波羅は陥落し、六波羅探題方は関東に逃れるべく近江番場まで来たところ、包囲されて番場の蓮華寺で自害する。同寺に残る「六波羅南北過去帳」によれば、隅田庄の隅田左衛門尉時親以下11人が、同寺で自害して隅田惣領家は滅亡する。なお、同寺の過去帳には432人の名前が記さ

れている。

鎌倉幕府滅亡後の、元弘3年10月の後醍醐天皇の勅裁によって、高野山が「御手印縁起」に記された「旧領」と主張していた紀ノ川河南の地のうち、隅田南庄が高野山領として認定されることになる。

なお、隅田惣領家滅亡後に隅田一族の中心になっていったのは、葛原氏や上田氏・小西氏等であろうと思われる。

当時、庄園領主が代われば、庄園の総氏神も領主と関わりの深い神社が創設されるのが一般的だが、隅田南庄は高野山側が新たに総氏神を創設することはなかった。それは、隅田庄総氏神の隅田八幡宮とそれを支える隅田一族の在地で結び付きと力が強かったということであろう。

南北朝期の隅田庄

建武3年(1336・北朝年号、南朝年号・延元元年)12月に幽閉先の花山院を脱出した後醍醐天皇は、吉野へ入山し南朝年号を復し、足利尊氏が擁立した北朝と対立する姿勢を示した。この内乱は、明德3年(1392・北朝年号、南朝年号・元中9年)に南朝方の後亀山天皇が退位して南北朝合一するまで続いた。

この間隅田庄の隅田一族は、状況に応じて北朝方に付いたり、南朝方に付いたりして合戦に従事していることがわかる。紀伊国では畠山国清が建武3年9月頃に北朝方の守護に任じられ、観応2年(1351・北朝年号、南朝年号・正平6年)3月に、観応の擾乱の影響を受けて紀伊守護を退任するまで、紀伊国は概ね北朝方が優勢であった。

正平2年(1347・南朝年号、北朝年号・貞和3年)8月に楠木正行が、隅田庄の隅田城を攻撃している(「和田文書」)。この頃は隅田一族は北朝方であったことがわかる。隅田城という単独の城郭は史料上明確でないので、隅田一族の諸城館を総称したものであろう。

この後の政治状況で武家方の内紛や、これに伴う南朝方の反撃が顕著となる時期があり、隅田一族は南朝方に転じたようである。

しかし、永和4年(1378・北朝年号、南朝年号・天授4年)12月に北朝方の山名義理が紀伊守護に任じられると、南朝方への攻略は進んだようである。

康暦2年(1380・北朝年号、南朝年号・天授6年)8月には南朝方の隅田一族や高野政所一族、相賀庄の生地氏等は、山名義理に攻略される(「花宮三代記」)。これ以降、当地域の在地武士の多くは北朝方に転じる。

康暦2年(1343・北朝年号、南朝年号・興国4年)の「隅田八幡宮神事帳写」(「葛原家文書」)によれば、隅田八幡宮の神事に参列した座衆が記されている。庁座の座衆には、西座南・西座北・東座南・東座北の名前には隅田一族に連なるとみられる葛原殿・平生殿・小西殿・垂井殿・小島殿・兵庫殿・崎山殿・野鞍殿等の名前が見える。

また、高野政所一族の亀岡殿・政所大夫殿も見える。また、名字は記されなくて名前に殿を付けられた有力農民と思われる殿原も記されている。これらの座衆を合計すると79人程となり、当時の隅田一族の範疇を越えた数となる。ただし、戦国期には隅田一族の拡大が考えられるので、戦国期ではほぼ妥当な数に近くなる。ちなみに、南北朝期頃の隅田一族の数は狭義には、25人と表記されたものが多く、これに高野政所一族の5人を加えて30人程と考えられている。

康永2年の神事帳写には、神子座は23人で、僧座は14人となっている。座衆とは別に庁座の記述があり、これが42人程となり、これが当時の狭義の隅田一族衆に該当するのはなかろうか。

隅田一族の氏等であった護国寺には天授2年(1376・南朝年号、北朝年号・永和2年)、弘和3年(1383・南朝年号、北朝年号・永徳3年)の長慶天皇の輪旨等、元中元年(1384・

南朝年号、北朝年号・至徳元年)の長慶上皇院宣が残されている(「護国寺文書」)。これらの文書が長慶天皇が南朝方の天皇として即位していたことを証するものとなっている(八代国治『長慶天皇御即位の研究』)。護国寺は、南朝方の拠点寺院となっていたのであろう。

明徳2年(1391・北朝年号、南朝年号・元中8年)10月14日付の「前駿河守某下案」(「護国寺文書」)によれば、護国寺の寺領46石が安堵されているのは、北朝方紀伊国守護山名義理方の発給とみられる。山名義理は、同年12月の同族の山名氏清の乱に連座して失脚するが、この安堵状も南朝方の鎮撫の一貫であらう。

なお、護国寺の本尊、大日如来(県指定文化財)は鎌倉期とされているが、弘和元年(1381・南朝年号、北朝年号・永徳元年)に修理されたものである。本堂は南北朝のものとして国重文となっている。

隅田一族の構成で、南北朝期に特徴的なことは、伊都郡の高野山領の中心庄園の官省符庄を本貫地とする高野政所一族の参入である。高野政所一族とは、高野山の膝下政所に出仕する庄官層で、「四庄官」の高坊・田所・亀岡・岡を中心に、四庄官が兼務する「十人所司」で構成され、これに若干の他庄からの同階層の参入者や、「序番殿原衆」と称された有力農民層がその従者として加わっていたとみられる。

ところが、高野政所一族で明確に隅田一族に加わっていたのは、高坊・亀岡・塙坂・小田・大野の5人である。

高野政所一族の隅田庄進出の時期は、15世紀初頭の高坊実敏と葛原忠満の訴訟関係の文書から高坊実敏の曾祖父実敏の頃とみられ、南北朝期となろう。本来、官省符庄の庄官は僧官的色彩が強く、南北朝内乱期を通じて僧官から在地武士へと転じる。高坊氏も祖先は、僧官であったようで、隅田庄でも隅田八幡宮の序座には、僧侶の資格で出仕していた

ようである。武士化した後も、「高坊惣執行上座御房」と称している。

これら高野政所一族の隅田庄進出者は、早くから上級武家権力と接近して武士化を進めていた隅田一族に倣って、より強力な武士化を狙っていたものであろう。これは当然、高野山との関係の希薄化を計ったものであろう。これに対して隅田庄に進出しなかった高野政所一族は上級武士との関係よりも高野山との関係を優先させたということであらう。

隅田庄北西端に小峰寺と称する修験と関わる寺院がある。鎌倉初期に成立した「諸山縁起」には修験道の宿として「六十八小峰寺」とある。南北朝期には、金剛山上の大和国転法輪寺の末寺であった。『紀伊統風土記』によれば、境内は東西七町、南北一町とあって、仁和寺の末寺とある。小峰寺の末寺は旧隅田庄の東光寺のほか旧相賀庄の4か村に4か寺の5か寺が挙げられている。天授5年(1379・南朝年号、北朝年号・康暦元年)の緑泥片岩製の宝篋印塔高さ1.7m、市指定文化財)がある。応永20年(1413)の「境原山四方書写」(「葛原家文書」)や近世の絵図によっても堀切が描かれ、中世に小峰寺が城郭寺院として使用されたことをうかがわせる。

室町期の隅田庄

明徳の乱に連座して失脚した山名義理の後を受けて、明徳3年(1392)に紀伊守護に大内義弘が任命される。この頃に大内義弘と被官関係を持った隅田一族は、同年の2月18日に守護に隅田一族の名簿を提出する。これによれば、隅田一族の注文として垂井・中山・山田・洪草・池田・小西・新・中山・山井・辻・上田・下山等29人が記されているが、文書には「廿六人 公文注文」とある(「隅田一族交名写」)。これには名字を記されていない人物が14人記され、隅田一族と有力農民層の境界の曖昧さを感じさせる。

明徳4年(1393)6月に隅田庄芋生村東光寺僧職の補任には「依国方仰」で、長門房が就任している(「隅田家文書」)。これは明らかに守護大内義弘方の介入であり、隅田一族に連なる人物が入れられたのであろう。

明徳4年の「隅田八幡宮会料納日記」(「葛原家文書」)によれば、「ま(ん)ところの御分」として1貫782文が納められているので、高野政所一族の会料の納分として納入されていることがわかる。

明徳5年(1394)6月26日には、高野政所一族の高坊行敏・堀坂朝治・亀岡源忠の3人と、隅田一族の上田貞範・葛原秀広・小西為安の3人が、隅田八幡宮の御神用の地で、下山殿が白井谷に所有していた田地が荒廃していた。この里神田を白井谷で元のように耕作した場合には、隅田一族へ返還するように決めている。内容から隅田一族と高野政所一族が、この件で談合していたことがわかる。

明徳5年の「隅田庄中筋高帳目録」(「隅田家文書」)によれば、隅田一族の上田貞範と高野政所一族の高坊行敏の署名の下に、隅田分として6町1段100歩、政所分として6町1段40歩の表記をしている。

隅田南庄は、前述のように元弘3年(1333)に高野山領となったが、隅田一族の上田氏が高野山に対して下司として、年貢の請負を始めていたようだが、正平9年(1354・南朝年号、北朝年号・文和3年)から毎年20石を高野山へ納入する取り決めであったが、18石程度しか納入せず、その未進額が明徳2年(1391)の総計で185石に及んでいた(「高野山文書」)。上田氏も改易されそうになるが、沙汰所の仲介の話があって、再度年貢請負を開始する。この上田氏の背後の支援勢力として、隅田一族と上級武家権力としての守護の存在があったのであろう。

応永元年から3年(1394~96)にかけて大内義弘の守護権力を背景に、高野山領庄園の官省符庄の土地調査である大檢注が実施され

る。これによって、名古屋村に庄官層の居館や田地が集中していたほか、「名古屋村田帳中書」(「勸学院文書」)によって、隅田一族に属する兵庫殿・新殿・松岡殿・中殿・森殿の田地が存在したことがわかり、隅田庄や官省符庄にそれぞれを基盤にする武士層の田地所有のあったことがわかる。名古屋村は在地武士の勢力が強く、高野山が御しがたい地域となっていたのである。

他に、高野政所一族の氏寺となっていた西光寺が名古屋村にあって、名古屋村・伏原村・大野村等に4町9段余の田畠を所有していたこともわかる。

応永6年(1399)12月に起った応永の乱によって、大内義弘は失脚し、応永7年(1400)1月に畠山基国が紀伊国守護に就任し、以後、三管領の一家であった畠山氏が紀伊国守護を襲職する。

応永20年(1413)9月17日の「隅田一族定書」(「隅田家文書」)によれば、隅田一族として29人の署名はあるが、この中高野政所一族は大野・亀岡・小田・高坊であるが、中氏は「まんどころ」、「すた」の注記があり、二派に分かれていたことがわかる。新氏は「すた」のみの登場であるが、「まんどころ」の存在を類推させる。この中氏や新氏は官省符庄名古屋村に田地を所有していたので、この二派は理解できる。

この署名には「次第不同」とあるので、隅田一族内部では原則として序列のなかったことがわかる。

応永25年(1418)と推定される「草部宴盛書状」(「葛原家文書」、弓倉弘年「中世後期畿内近国守護の研究」)によれば、この文書は、守護方と熊野社僧等の争いの中で、熊野の御輿が近露まで来ている報に接し、「御内方」たる譜代の臣、「国の人々」たる紀伊国内の在地武士(国人)が、守護所大野へ出仕すべきことを触れ廻るように、守護使の「誉田殿」からの連絡で、小守護代の草部宴盛から伊都郡

奉行の玉手七郎左衛門入道道秀に宛てた書状である(拙稿「東家館に関する文献上の考察」『東家遺跡・東家館跡発掘調査報告書』)。伊都郡奉行所は東家村にあって、伊都郡奉行の管轄下で、隅田一族等の東家館への参集を経て、守護所大野へ動員されたものと推察される。

応永29から30年(1422~23)にかけての「四郷以下公方役書上」(『高野山文書』)によれば、伊都郡の高野山領から守護方による夫役や公事の納入に東家館へ動員されていることがわかる。ただし、近隣の隅田庄や相賀庄からの動員は史料の欠落があつて判明しない。この頃は隅田北庄は石清水八幡宮領、相賀北庄は根来寺領という建前であつたが、実態としては隅田一族や相賀河南一族たる生地氏や費川氏等を通じて、守護領化に近いものであつたと思われる。ちなみに相賀南庄は、元弘3年(1333)の後醍醐天皇の勅裁によつて高野山領となつていた。

応永25年から27年(1418~20)に争われた高坊実敏と葛原忠満の隅田八幡宮の放生会の西序南座の座上争いがある。これによつて、前述のように高坊氏が南北朝頃から隅田庄に進出していたことがわかるが、元来、高坊氏は僧座に着座していたことが証言されている。京都へ出向いての訴訟であつたが、応永27年8月には畠山満家の奉行人の奉書で葛原忠満が勝訴する(『葛原家文書』)。この中で、6人の宿老とあるのは隅田一族の宿老であろうし、「25人の地頭」とあるのは、狭義の隅田一族の構成員であろう。

嘉吉元年(1441)の「隅田八幡宮棧敷注文」(『葛原家文書』)によれば、朝座は52人、神子座の29人、僧座は16人とある。朝座の人数は、当時の隅田一族の構成員の数を越えた数であり、一族外の有力農民も参加していたことは確実である。

ところで、隅田一族は守護被官として活動していくが、紀伊国内では重要な役に就任し

ていない。しかし、応永13年から19年(1406~12)には山城国守護代に隅田三郎左衛門(尉)、宝徳年間(1449~52)には山城守護代に隅田佐渡入道、戦国初期には畠山義英(義就の孫)の河内守護代クラスに隅田美作守繁久がいる(今谷明「守護領国支配機構の研究」)。畠山氏は、在地の国人層在在地では役人として使わない方針をとっていた。しかし、戦国期になってくると状況は変わってくる。

畠山氏も、持国の子の義就の代になると、従兄弟の政長と家督争いを展開し、これが応仁の乱へと繋がっていく。

長祿4年(1460)5月に当時の紀伊守護畠山義就方が、粉河寺の水争いで根来寺方に改められて大敗し、700人程討死している(『大乘院寺社雑事記』)。この討死者の中に、畠山氏の譜代の家臣の他、紀州の国人の名も見える。その中に「隅田今西」が見える。隅田一族は、当時、複姓と称して、本来の自分の名字の上に隅田を冠していた。したがって、当時の史料に隅田のみで見える場合、特定の名字を推定するのは、場合によってはかなり困難である。この畠山義就の大敗の背後に、畠山氏の内紛があり、この後、畠山義就は守護を罷免され、代つて畠山政長が守護に就任している。

明応2年(1493)5月に前管領細川政元が將軍足利義材(義植)を追い落とし、足利義澄を擁立するという明応の政変が起こる。この時、足利義材と共に河内正覚寺にいた畠山政長が細川政元に攻められて敗死する。この討死者の中に「隅田松岡」が登場する(『藍涼軒日録』)。このように義就(当時は子の義豊)方、政長方の双方に隅田一族が加わっていたことがわかる。

この後、畠山氏の内紛は、義就流と政長流の抗争となつて、子孫に継承される。このうち、隅田庄に関わる事項について触れてみたい。

永正元年(1504)細川政元政権内に内紛が

生じたのをきっかけに、畠山政長の子、尚順と義就の孫義英が一時的に和睦する。

しかし、永正4年(1507)に細川政元が暗殺され、細川氏の分裂により、この両流の畠山氏の和睦は破綻する。畠山義就流の義英は、河内の獄山城に12月に入城し、畠山政長流の尚順を攻撃するために、「宇智郡隅田寺」へ出陣した(『多聞院日記』)。ここに記されている「隅田寺」とは、大和国宇智郡が正しいとすれば大澤寺となろうし、「隅田寺」が正しいとすれば、紀伊国伊都郡隅田庄の利生護国寺となろう。地理的状況から、利生護国寺の方が正確ではないかと思われる。

畠山義英が入城した獄山城も、永正5年(1508)1月18日に落城している(『後法成寺問白記』)。その後、畠山尚順は同年4月に足利義尹(義植、義材)が大内義興と共に堺へ到着するのを迎えた後、6月に入京を果たしている。

このように、畠山尚順は、大内義興の軍勢力に依存して安定期を迎えるが、その象徴的な出来事は、隅田庄の利生護国寺で永正9年(1512)6月29日に開催されたとみられる300人も及ぶ隅田一族の宴会である(『葛原家文書』)。

この「献立注文」(『葛原家文書』)によれば、15番にも及ぶ能が上演され、中心的な膳は5膳で、鯛や鮑、「からすみ」、「このわた」、松茸、鶴の吸い物などの山海の珍味が出された豪華版で、紀伊守護(畠山尚順)等の上級権力者を招いたものと考えられる。

畠山義英の大和や紀伊への進軍は、永正10年(1513)8月で、8月21日付の「畠山尚順判物」や「林堂山樹判物」(「三箇家文書」、小谷利明「宇智郡衆と畠山政長・尚順」『奈良歴史研究』59)によれば、畠山義英方は、「大澤小峯橋籠」つたため、畠山尚順方の宇智郡衆と伊都郡衆はこれを攻める申し出をしていることがわかる。

ここに登場する「大澤小峯」は、「諸山縁

起」に登場する葛城修験の古刹で、大和国宇智郡の大澤寺と紀伊国伊都郡の小峯寺のことである。これらの寺院が、畠山義英方に城郭として利用されていたことがわかる。

中野榮治氏の研究によれば、この両寺の間に左久米寺(隅田庄山内村)があって、これが現在の東覚寺に該当するとされる(『葛城の峯と修験の道』)から、大和や河内へ通じる修験の道が、義英方に軍事ルートとして利用されていたことがわかる。しかも、このルートは、畠山政長流の拠点であった河内島帽子形城と紀伊伊都郡の長敷城の軍事ルートに楔を打ち込んだ形になっている。

永正10年の畠山義英の出撃は、8月25日に河内観心寺に陣し敗北した。そして、畠山義英は行方をくらませるが、永正15年(1518)に大内義興が固防に帰国すると、再び反撃に出てくる。

大永4年(1524)11月には畠山植長(政長の孫、尚順の子)は、畠山義堯(義就の曾孫、義英の子)の籠城する河内仁王山城を攻撃している(『祐維記抄』)。この時に植長の味方をしたのが、根来寺衆や大和国の「吉野衆」、「長敷城衆」である。

長敷城はこの頃紀伊守護の伊都郡支配の軍事拠点となっており、その城衆の内訳には隅田庄の隅田一族や相賀庄の貫川氏等が入っていたのであろう。

河内の仁王山城は、金剛寺の建物を移築して城郭にしていた(『祐維記抄』)。この城も12月6日に落城し、畠山義堯は高山山へ退去したとの風説が流れた(『祐維記抄』)。

永禄10年(1567)8月晦日に紀伊国伊都郡郡官符庄の名倉城に入城した畠山秋高(政長の曾孫、尚順の孫)は屋形衆と根来寺連判衆の3000が入城し、ここから隅田庄の霜山城に入城した。なお、「畠山記」には永禄11年(1568)のこととしているが、これは永禄10年の誤りであろう。この軍事行動は、三好三人衆方勢力の大和の佐味城(幸田城)を攻撃

するためであったが、9月5日に畠山軍は敗退し、伊都郡に退去している（『多聞院日記』）。この畠山軍は失地回復を目指し、烏帽子形城を攻撃するも失敗している（『多聞院日記』）。このように政長流畠山氏は、三好長慶の後継の三好三人衆方に阻まれて勢力を減退させていたことがわかる。

一方の義就流畠山氏も、天文12年（1543）11月9日付で隅田庄の護国寺に対し、畠山在氏（義堯の弟）の寺領を安堵した判物を発給している（『護国寺文書』）ほか、天文21年（1552）6月28日付で隅田庄の隅田八幡宮に対し、畠山高誠（在氏の子）は大和国宇智郡で「三千疋」を寄進している（『隅田八幡神社文書』）。この頃には義就流畠山氏は、政長流畠山氏よりも衰退し、紀伊伊都郡や大和宇智郡、南河内の山間部を中心とした小勢力に転落していた。

この頃の隅田一族の状況を知ることができる史料として、天文23年（1554）1月28日付の「利生護国寺法度条々隅田一族起請文案」（『彦谷村上田家文書』『橋本市史』旧版上巻）によれば、42人の署名がある。このうち明確に高野政所一族とみられるのは、高坊、亀岡、塙坂（2人）、小田の5人である。他に名字の記されていない人物は3人ある。これは1枚の文書に記された隅田一族の署名としては最大である。しかし、諸文書に現われた隅田一族を集計すると60～70人程になると思われる。

ところで、山城国一揆の主体は『大乘院寺社雑事記』の文明17年（1485）12月の記事では、36（又は38）人の国人とされるが、一揆の終末期の明応元年（1492）10月頃には「山城国人百人」とある（『大乘院寺社雑事記』、藤田晴子「山城国一揆と自由通行」『山城国一揆』）。これは狭義の国人以外の惣村の地侍クラスも参入した結果と思われる。同様に、隅田一族も時代が降ると惣村の地侍クラスの参入もあって増加したとみられる。

ちなみに、隅田一族の芋生氏の所有した田地は、明応元年（1492）の「芋生氏知行分表帳」（『芋生家文書』）によれば、判明する田地の集計は1町8段、畠地は180歩、面積の判明しない田畠5か所である。ただし、この田地は隅田北庄芋生村のみでなく、河瀬村や紀ノ川河南の隅田南庄や大和国宇智郡丹原村等に存在した。

近世の史料であるが、隅田一族の一氏、土屋氏の「由緒書上」や「土屋氏系図」（『土屋家文書』金剛峯寺編『高野山文書』6巻）によれば、孫六と名乗っていた土屋義武は、天正期に信長に従ったことや、京都所司代の足軽頭になった経歴を記し、後に故あって郷里で帰農したことを記している。浅野氏の檢地の折に、1町4段9畝を登録される百姓となった旨を記している。

このように見ていくと、中世に国人として認識されて「守護被官」となった隅田一族と、惣村を基盤とした地侍クラスの層の差は、一部の例外を除いて経済的な基盤は大差がなかったとみさせる。

他に、戦国期の隅田一族の例として、天文14年（1545）の畠山植長の没後に河内の支配権を握った守護代遊佐長教によって、芋生隼人が「隅田庄塩口」を認められたものがある（『芋生家文書』）。この文書の取り継ぎを守護代格の丹下盛賢がなしている。この文書の実年代を確定できないが、天文14年以降のものであろう。隅田一族が、守護代の許可によって、塩取引の経済活動していることがわかる。

なお、この頃、紀伊守護畠山氏の小守護代か郡奉行と考えられる地位に、高野山の智庄殿院と三宝院が就いている。智庄殿院は、元亀4年（1573）に河内観心寺で禁制を発給しており（『観心寺文書』）、三寶院快敏なる人物は伊都郡の守護支配を担当する立場で文書を発給している（『葛原家文書』）。伊都郡奉行所は東家館にあったが、戦国期にも行政面担当の政庁として機能していた可能性がある。こ

の頃は、地元の者を守護方役人として起用しているのは、以前にはなかったことである。しかも、智庄厳院も三宝院も隅田一族を構成した高野政所一族の高坊氏と関わる寺院である（拙稿「高野政所一族の形成と動向」・安藤精一編『紀州史研究』5、『岡家文書』「九度山町史」）。

天正9年から10年（1581～82）にかけて織田信長による高野山攻めが実施された。これは巷間に伝えられたような大規模なものではなく、三好氏の家臣から信長家臣に転じた松山新介重治を大将とした小規模なもので、高野山を他の作戦の邪魔にならないように見張るといった程度のものである。しかし、高野山方は、相当に脅えて正親町天皇や仁和寺を巻き込んだ和平工作を模索していたが、本能寺の変で信長方も兵を引くことになる（拙稿「織田信長の高野山攻め」『南紀徳川史研究』7）。この高野山攻めでも、地元の武士は双方に分かれた。隅田一族や生地氏、費川氏は織田方、高野政所一族は、織田方と高野山方に分かれたが、隅田一族と連合した高野政所の一派は織田方に就いたとみられ、他は高野山に加担したとみられるが、この傾向は中世以来のもので、在地武士の生き残りをかけた方針であり、内部では多分に「馴合い」的要素が存在したと思われる。

豊臣期以降

豊臣秀吉の天下統一に伴う政策（検地・刀狩等）の結果、庄園は解体され消滅したことになる。しかし、生活実態としての「庄園」は残存し、旧庄園体制の祭礼は、そのまま継続されることになる。

高野山領も原則的に紀ノ川河南に限定され、河北の旧官省符庄や那賀郡の旧名手庄等は大名領に編入されることとなる。

高野山領の検地は天正19年（1591）に開始されるが、その前の天正17年から18年にか

けて木食応其の伊都郡での池の修造が集中しているのは、豊臣政権の方針で実施された「太閤検地」の直前に人心の収攬に、その狙いがあったと推察される。

この事業の推進に当たって、木食応其は惣と惣の指導層を起用し、庄園の旧支配層たる庄官層を起用していない。例えば、旧官省符庄の「引ノ池」では四か村と「奉行西山勝家」である。西山氏は受益村の出身ではない大野村であり、庄官層の高坊氏や亀岡氏は違う立場である。「畑谷池」では「妙寺惣衆中」となっており、旧相賀南庄の「平谷池」では「馬場清水村中」となっている。

近世の隅田一族として認定された者は、きわめて少なく、元和8年（1622）1月21日付の「隅田一族定状」（『隅田家文書』）によれば、仕官運動を示す中に隅田（5人）、堀坂（2人）、野口（3人）、松岡、竹田、上田の13人と、中世では隅田一族の中に入っていなかった西山・生地計15人である。

もっとも、この中で堀坂氏は中世では高野政所一族の構成員であったが、慶長期（1596～1615）に旧官省符庄名古曾村から旧隅田庄中下村に最初移住したことが「南紀土姓田事記」、「紀伊統風土記」等からわかる。なお、高野政所一族であった小田氏も同じ頃に旧官省符庄名古曾村から中下村に移住していることが「南紀土姓田事記」からわかるが、小田氏は仕官運動に加わらずに帰農したのと思われる。

元和8年の仕官運動に加わった松岡氏は、承応元年～2年（1652～3）頃に旧隅田庄から旧官省符庄の吉原村に移住している（『松岡家文書』、金剛峯寺編『高野山文書』）。

旧官省符庄名古曾村に居館をもっていた高坊氏は、旧官省符庄中飯降村に近世初頭に移住したのと思われる（『紀伊統風土記』）。

このように中世の在地武士層の移住が多く見られるのは、近世の土地政策の中で、中世のような中間徳分権が認められなくなって、

自身の土地所有の内でも有利な地へ移住したものとみられる。ここでも、旧武士身分にこだわって仕官運動をする者と帰農する者に分かれる。

元和5年(1619)に徳川頼宣が紀伊国に入国すると、最初元和8年に在地武士の後裔60人に切米50石が与えられて藩の軍事組織に組み込まれた。寛永元～2年(1624～5)に隅田一族15人に切米30石が与えられ、「隅田組地士」と称した。しかし、これ以前に「隅田組地士」は彦坂光正配下の町方与力となっており、正式な和歌山城下の藩士となっていた。この15人とは、元和8年の「隅田一族定書」に登場する人物である。

しかし、仕官したはずの15人も正保2年(1645)には切米支給は打ち切れ、帰村して在地の地士という形で存続することになる。町方与力を経て「隅田組地士」となったのは、

隅田(3人)、塙坂(2人)、野口(2人)、松岡、竹田、上田の旧隅田一族に連なる10人と、西山、生地、各氏と、那賀郡の津田、名草郡の嶋、日高郡の平井の15人である。

藩当局は近世初頭においては、地士身分を選択した者には、大庄屋や庄屋といった職には就任させない方針を貫いていた。これは地域社会の影響力を考慮してのこととみられる。地士身分の一族でも、これを選択せず農民となった場合には、大庄屋就任の例もみられる。

旧官符庄の高野政所一族は、近世初頭に他地域に移住する者が多く、残留した亀岡氏に高野政所一族の氏寺であった名古曾村の西光寺を託されるものの、維持できずに衰退する。これは、隅田庄の隅田一族の氏寺、利生護国寺が維持されたのと対照的である。



図「龜山氏略系図」

拙稿「鳥帽子形城と長藪城—終末期を中心に—」
をもとに作成（『和歌山城郭研究』第14号）

(4) 隅田八幡神社経塚出土鏡について

中川 あや (奈良国立博物館)

本節では隅田八幡神社経塚から多数出土した鏡を通して、本経塚の特色の一面を明らかにすることを試みたい。

各経塚における鏡の構成

第1経塚では、経筒①(3)内から小型経筒(経筒② [7])、経筒蓋(経筒①や小型経筒には伴わないもの [5])、環状部品(4)などと共に4面の鏡が出土した。時期的な内訳は、11～12世紀代の鏡が1面(8)、12世紀代の鏡が1面(9)、13世紀代の鏡が2面(10、11)である。これらの埋納が、第1経塚直上の宝篋印塔造営に伴うものなのか否かについて遺構からの検証は難しいが、宝篋印塔の年紀と最も新しい鏡の年代が近いことを評価すると、宝篋印塔造営と一連の埋納である可能性は十分にある。

第2経塚では、外容器内から3面(39～41)、石組内から6面(37、38、42～45)が出土し、また、経筒(27)の底と蓋(28)にもそれぞれ鏡が用いられていた。石組内での出土位置について明確な記録が残されていないが、出土時の層位と遺構の図面・写真から判断すると、2面(42・43)は北西側、4面(37・38・44・45)は東側に立てかけられた可能性が高い。時期的な内訳は8世紀代の鏡が1面(37)、12世紀代の鏡が8面(38～45)である。大多数の鏡は経巻に記された長寛二年(1164)に近い時期に位置づけられるが、37の海獣葡萄鏡のみ大幅に時期が上がる。また、経筒の底には11世紀末～12世紀前半の素文鏡、蓋には12世紀代中葉から後半の鏡が用いられている。底板と蓋は、埋納直前に経筒身の径に合わせて用意されたと考えて、年代的に大きな矛盾はない。

第3経塚では、石組内から3面(117～119)が出土した。底石の上から出土したのもあるが、当初の遺構の大部分が失われているため、本来の埋納位置は不詳である。時期についてはいずれも12世紀代中葉～後半とまとまりがあり、第2経塚と近い時期に造営された可能性がある。117は鈕に紐が通された痕跡があり、元は化粧道具や仏具などとして用いられていたものが、造営に際して埋納されたと推測される。

鏡多数埋納の意義

本経塚の第2経塚では、石組内で6面と、常滑焼外容器内で3面と数多くの鏡が出土した。全国的に、平安時代の経塚への鏡埋納事例は数多く報告されているが、本経塚第2経塚のように鏡の埋納が多数に及ぶ経塚となると一定程度に限られる。数量が多いことによって鏡を納めた意図を汲み取りやすくなるが、例えば、経塚を造営する場に対する辟邪(静岡県堂ヶ谷経塚、広島県宮地川経塚など)、埋経施設における北東(鬼門)に対する辟邪(福井県下黒谷経塚など)、埋経施設の守護(福井県深山寺経塚など)などの意識が窺われる。これらはいずれも外容器外部での鏡埋納であるが、本例のように外容器内に鏡を入れる経塚の他の事例では、石室を設けない場合(京都府塚ヶ谷経塚、和歌山県大蔵経塚など)が目立つ。外容器の内外共に鏡を納入するというのは、辟邪の効果を強めたいという意識の表れであるかもしれない。

また、第2経塚の経筒(27)には、底板や蓋(28)に鏡が転用されている。鏡を底板に転用する事例は北部九州に集中し、近畿では少ないことが指摘されている(村木 2003)。

また、蓋に転用する例は全国的にみても少なく、底・蓋ともに鏡の転用という本例は大変珍しい。この経筒(27)の筒身は念入りに研磨され、丁寧に仕上げられていることを考えると、鏡の転用は当初より意図したもので、ここにおいても強力に経典を守護しようという意識が働いたのではないだろうか。16面に及ぶ鏡を埋納した広島県宮地川経塚においても、経筒の底・蓋ともに鏡転用であり(村上1957)、示唆的である。

以上のように、第2経塚で外容器の内外に鏡を複数納入し、経巻を納める経筒の底・蓋にも鏡が転用されていたのは、経塚造営時に経巻の守護を強く願った意識の表れとみることができる。全国的にみて類例の数少ない注目すべき事例である。

伝世鏡の埋納

第2経塚から出土した鏡の中には、8世紀前半に位置づけられる海獣葡萄鏡が1面(37)含まれていた。経塚の造営年代より4世紀以上も古い時期のものであり、第2経塚の造営時に新たに入手することはかなり困難であったと推測される。飛鳥～奈良時代の鏡は寺院の堂内荘厳に数多く用いられ(「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」「西大寺資財流記帳」など)、また、神社へ奉納された例もあるので(千葉県香取神宮、三重県八代神社など)、この海獣葡萄鏡も、元は隅田八幡神社や、経塚造営を担った僧に関わる寺院における伝来鏡で、それが埋納された可能性は十分にあるだろう。実際に、44には懸垂用とみられる孔が穿たれており、かつては堂内などに懸けられていたことを示している。

奈良時代の鏡が、時代を経て経塚に埋納される事例は、千葉県谷津経塚、岡山県マゴロ経塚など数例確認されるが、本経塚の海獣葡萄鏡のように飛鳥時代末～奈良時代前期まで上がる鏡の埋納は類例が少ない。鉤上りも

非常に良いので、当地のいずれかの寺社等で特別に扱われた鏡であったのではないだろう。

なお、本経塚に埋納された海獣葡萄鏡は直径6.4cmで、海獣葡萄鏡の中でも小型の部類である。直径が6cm前後の海獣葡萄鏡は、全国的に見ると50例近く出土・伝来している。小型海獣葡萄鏡が海浜(石川県寺家遺跡、三重県八代神社、東京都式根島・野伏西遺跡など)や溝(藤原京右京五条四坊、平城京九条大路など)といった水に関する祭祀の場で多く確認されることについてはすでに指摘があるが(杉山1999)、街道に近接する遺跡(東海道に近接する滋賀県高野遺跡や同東光寺遺跡など)での出土事例を踏まえると、より広く、交通の要衝での祭祀に用いられたと捉えることができる。隅田八幡神社の所在地は、伊勢街道と高野街道が交差し、さらに、紀の川水運の拠点でもあるので、本鏡は当初、そのような交通の要衝における祭祀具として当地へもたらされた可能性があるだろう。

中世的な納経に伴う鏡埋納

本来、経筒は経典を納める容器であるが、第1経塚は、経筒内に鏡を納めた稀有な事例である。ただし、経筒①を外容器として用い、その中に経筒②を納めたとみれば、鏡は小型経筒を用いた埋納の副納品として理解することができる。経筒①は平安時代、経筒②は鎌倉時代以降のものとみられ時期差があるので、周辺の別の経塚ですでに納経に用いられていた経筒①が当地の改変などに伴って露出し、外容器として再埋納された可能性が一つ考えられる。納められた銅鏡(8、9)が宝篋印塔の年紀よりも2世紀ほど古いのも、経筒①と同様の理由によるかもしれない。古代の経塚に鏡をはじめとした副納品が伴う事例は数多くあるが、経筒②が埋納された中世においては、経塚造営の意義が変容することもあり副

納品は大幅に減少する。したがって、第1経塚の納経の作法は特殊な事例と評価することができる。

なお、第1経塚の築造が宝篋印塔の造営と一連であるかどうかは重要な問題である。発掘調査成果からは明らかにしがたいため、経塚と石塔造営が関連する事例を参考に見ておきたい。愛媛県西予市松浜経塚では、「徳治三年」(1308)の紀年銘のある銅製経筒2口、外容器の破片、土師器、銅銭などが出土した。合わせて大小2基の五輪塔が発見され、造営目的は死者の供養とされる(三宅 1972)。また、群馬県前橋市小島が島経塚は赤城神社内に造営された経塚で、石造多宝塔の地中から銅経筒の残欠と平安末～南北朝期の鏡10面が出土している。赤城神への信仰と法華経納経にかかわる経塚造営と結びついた事例とされる(今井 1974)。これらの事例を踏まえると、隅田八幡神社境内における宝篋印塔造営と第1経塚における納経を一連のものとして結び付ける余地があるように思う。

以上、出土鏡を切り口として、隅田八幡神社経塚の特色を浮き彫りにしてみた。古代末期に築かれた第2経塚では、複数の鏡を各所

に効果的に配置して経典の守護を強く図った様子が窺われた。中世に築かれた第1経塚では、鏡の埋納という古代的な要素を残した納経のあり方が確認されたとともに、その指標としての石塔造営の可能性をうかがうことができた。それぞれが古代、中世の経塚の稀有な一例として評価されるとともに、これらが近接して営まれているという、古代から中世にかけての信仰の場の連続性も重要と考える。

謝辞 成稿にあたり、久保智康氏(京都国立博物館名誉館員)には様々な視座を賜りました。厚く感謝申し上げます。

主要参考文献

- 今井善一郎 1974『赤城の神』幾乎堂
杉山洋 1999『古代の鏡』日本の美術 393、至文堂
三宅敏之 1972『愛媛県松浜経塚について』[MUSEUM] No.251、東京国立博物館
村上正名 1957『安芸国本郷町経塚報告』[考古学雑誌] 第42巻4号、日本考古学会
村木二郎 2003『経塚に埋納された鏡』[鏡にうつしだされた東アジアと日本] ミネルヴァ書房

(5) 隅田八幡宮経塚出土の経典をめぐる

吉川 聡（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）

1. 埋納経の特徴

経典を経塚に埋納する行為・遺物の確実な初見は、藤原道長が長徳4年（998）に書写して寛弘4年（1007）に埋納した金峯山経塚の事例である。当初は末法思想と相まって、弥勒出世の時まで経典を残そうとする意図が強かった。それゆえ当初の埋納経は、伝世経と同様に端正に書写・装幀されている。しかし後には、経典を作法に則って書写・埋納すること自体が作書業であるという性格が強くなる。そのような、作法に則って書写した経典のことを如法経という。そこで中世の埋納経は如法経として、他の経典には見られない特徴を持つこととなった⁹¹。12世紀以降の埋納経の特徴を略述すれば下記のようになる。卷子本だが、料紙は打紙していない楮紙で、界線は引かない。軸は無いが、紙や細い竹木を用いた貧弱なものである。表紙・紐は破損して確認不能なことが多いが、確認できる場合、表紙は存在しないことが多く、巻緒は簡略な紙紐を用いている。巻き方は、通常通りに巻末の左奥から右端に向けて巻くものもあるが、逆巻にして、巻首の右端から左奥に巻いてあるものもある。本文を朱書したのも多く、血を混ぜることもあったと考えられている。鎌倉時代以降には、綴法量が15cm程度の小さなものとなる。字体は、12世紀には崩れた字体となる。後にはさらに崩れ、室町時代にはほとんど釈読できない程のものもある。全体的には、粗雑で貧弱な印象を受ける。

2. 当該経典の特徴

隅田八幡宮経塚は、特に第2経塚の保存状態が良く、経筒中には妙法蓮華経一部八巻の

卷子本が遺存し、開披することができた。巻第一の奥書から長寛2年（1164）9月の書写であることも判明した。また発掘調査で遺構を検出したため、埋納状況が判明した。全八巻の妙法蓮華経は、全体を三重以上の紙でくるんで、金銅の経筒に納めていた。その経筒は他の埋納品と共に常滑焼の甕に入れて、経塚の石組の中に埋納していた。埋納経が中世的な形に変化していく時期の、書写・埋納の実態を窺う好例である。

当該経典は、料紙の一紙長が長く55cm近くに及ぶ点や、厚さにムラのある料紙の質感などから、院政期のものと見て問題ない。その体裁は、当該時期の埋納経としてふさわしい特徴を備えている。すなわち、打紙しない楮紙で界線も引いていない。装幀も逆巻で、右端の巻首から巻末に向けて巻く形である。軸は直径5mm程度でかなり細く、二つに割ってあり、料紙を挟む形になっている。表紙は存在せず、巻緒は紙紐が巻第一・第二・第四の三巻に遺存していた。また綴法量は24cm程度で、通常の卷子本の経典に較べてやや小さいくらいなので、あまり小型化はしていない。字体は通常の経典よりは崩れているが、問題なく釈読できる程度である。

当該経典には、巻第一の巻首・文中の余白・巻末に識語・奥書が、また巻第二にも奥書が記されていた。識語の多くを巻第一の余白に書き込むという、他にあまり例を見ない形である。一方で巻第三～巻第八には識語・奥書は確認されていない。このような形にどのような意味があるのかは、今後の課題としておきたい。ともかく、人名には僧嚴俊のほか、紀氏（①・⑥）・藤井氏（②・⑥）・大隅氏（③）が確認できる。彼らは紀氏も含み、この地域の有力者と推測される。その内容が

ら、地域の有力者が檀越となって、自らと父母・子孫・師長ひいては衆生の現世安穩・極楽往生を願って經典を制作したことが判明する。先行研究では中世には地方寺社で如法經書写が行われていることが指摘されており⁸⁵、当該經典もその実例と考えられる。

3. 如法經作法書との関係

如法經の制作・埋納については、鎌倉時代に隣に執筆された作法書が現存している。それら作法書の内容を、主に嘉禎2年(1236)成立の『如法經現修作法』により、一部は正嘉元年(1257)の『如法經手記』も参照して、関係する点を下記に摘記しておく⁸⁶。

經衆が經典を書写した後に經を巻くが、軸は針の如くに細く削る。堅く巻くのが良い。或る説では經は巻き返さずに逆巻のままにするという説もあるが、筆者はその説は採らず、常に奥より巻く。表紙は三寸ほどの紙を用い、紐は紙を細々と切って飯の糊で付け、外題を書く。一部八巻が整ったら、それらを取り合わせて堅く結び、上から紙で包み、紙紐で十字に懸けて結んで、そこに經衆が連判を付す。その後は「筒鋼」(『如法經手記』では「金鋼筒」)または竹筒に經典を奉納し、白布を破ったもので結んで、結び目に結縁衆の封を付ける。

また如法經を埋納する際には、「石壇并穴等」はかねて作っておき、「石壇所」に到ると外護者が「土筒」を穴に入れる。次に水をそそぎ香をまく。次に上人が「御經筒」を「土筒」の中に入れる。次に外護者が「土筒」の蓋で覆う。次に石を穴の口に覆い、「石壇」を築き、その上に「石塔」を安置する。また異説では「土筒」は法勝寺の瓦屋であつたともある。

この記述は当該經典にも対応する点が多

い。すなわち当該經典の細い軸・巻緒の紙紐・經典全体をくるんだ包紙・金鋼の經筒(「筒鋼」・常滑焼の甕(「土筒」)、また經塚の石組遺構(「石壇」)等である。当該時期に中世作法書の骨子が成立していたことが読み取れる。ただし相違点もある。すなわち当該經典は逆巻で、表紙は無く外題も確認できず、また第2經塚の時期の石塔は存在しない点である。このうち逆巻は作法書にも両説が登場し、作法にもいくつかのバリエーションがあったことが分かる⁸⁷。

4. 体裁の意味

埋納經は檀越や僧侶たちが願いを込めて、如法經として「法の如く」制作したものである。それが貧弱な作りに見えるのはなぜだろうか。従来想定されていた理由は、弥勒出世まで残す意図が薄れて供養のために書写するという性格のみが残った結果、見栄えにこだわらなくなったということである⁸⁸。そのような消極的な理由のみなのか。一方で、当該經塚にも鏡などの貴重な遺物が多く埋納してある。ならば別に積極的な意図もあったのだろうか。この点は難しいが、作法書と当該經典から少し推測してみたい。

『如法經現修作法』には次のようにある。

先立軸。(木或ハ竹也)如針細クケツリテ可用之。如法堅巻也。(或説云、御經不巻反云云。然而只常自奥巻也。堅く巻之宜也。)

軸は細くし、堅く巻くべきだという。細く堅く巻くのは、如法經一般に見られる特徴である⁸⁹。この点、当該經典で軸を削り、料紙を軸で挟み込んでいるのは、料紙と軸を強く固定して力を込めやすくし、堅く巻くことを意図したのではなかろうか。巻第一・巻第八では巻首の文字が裏写りしている。軸の近くは最も堅く巻かれる部分であり、裏写りしやすかったものと思われる。その際、巻第一で

は裏写り文字が鏡文字になっているが、巻首の痕跡を見ると、これは軸を經典の右端に付け、その右端の軸を經典の左側に折り込んだために^{*ii}、巻頭の文字が鏡文字となって写ったものである。他の巻でも同様に、軸を内側に折り返しなどと推測できるものがある（第4章第2節（2）3. 参照）。このように軸をやや内側にずらしているのは、力を込めても軸と料紙が外れにくくするためだったのではなかろうか。当該經典に表紙は無いのに紙紐だけは付けているのも、堅く巻いた經典を固定するために紐は必要なのだろう。このように堅く細くしている理由としては、とりあえずは、経筒に入れやすいという実際的な理由が思い浮かぶ。ただし私の以前の論考では、南北朝時代の如法經の紙紐と外題の状態から、そこには封をする意図があり、それは如法經は弥勒出世の時まで披見すべきでないからだと推測した^{*iii}。その観点から見ると、堅く巻くのは開披しにくくする意図や、長く保存されるように強度を上げる意図もあるかもしれない。

逆巻については、『如法經手記』に次のようにある。

其後調軸・表紙也。世人常不巻返之。況比較之儀無之。其意趣者、未終其篇、慈尊下生之時可終其功之意也云々。今謂不爾。願力者無謬。釈尊遺法中、設雖終其功、尊興出時何不逮值遇願乎。可笑々々。

この史料によると、世の人には、如法經は巻き返さず逆巻にして校正もしないのだと言う人がいる。その理由は、如法經が弥勒菩薩が下生する遙かな後世に完成するものなので、現時点では未完成にして置いておくのが良いのだ、という考えに基づいている。しかし筆者はその説とはらず、現状で完成させておいても、必ずや弥勒の出世に値できると考えている。ここで一つの説ではあるが、如法經は未完成にしておくべきだという感覚があったのは注意される。というのは、そう考えると特色の多くが自然に理解できるからであ

る。すなわち逆巻のほか、軸が貧弱で表紙はなく巻緒に紙紐を用いている点も、未完成の仮の装幀だと理解できよう。また校正しないので、多少の間違いは気にせずに崩して書く^{iv}と理解できる。

逆巻の事例は、当該經典より古いものに、兵庫県三木市高男寺經塚出土の仁平3年（1153）埋納經^{*iv}、東京都八王子市中山白山神社經塚出土の仁平4年（1154）書寫經^{*v}などがある^{*vi}。このうち白山神社經塚の經典は宋書經である。12世紀に、逆巻をはじめとする如法經の特徴が出現する。その頃、如法經とは未完成の状態では封印しておき、遙かな後世に取り出して完成すべきものだ^{vii}という意識が生じた、と考えることができるかもしれない。

『如法經手記』の筆者は未完成説を採用しておらず、どれほど一般的な説だったのかは不明である。一案として述べておき、今後の課題とした。

- * i 藏田藏「埋經」〔『仏教考古学講座』第6巻、雄山閣、1936年〕、三宅敏之「經塚の遺物」〔『新版仏教考古学講座』第6巻 經典・經塚、雄山閣、1977年〕など参照。
- * ii 林文理「中世如法經信仰の展開と構造」〔寺院史論叢1 中世寺院史の研究上〕法蔵館、1988年〕など。
- * iii 「如法經現修作法」は『大正新修大藏經』第84巻894頁・896頁。『如法經手記』は〔続群書類従〕第26輯上、217頁・220頁。先行研究には三宅敏之「經塚の营造について」〔『日本考古学論集』6 墳墓と經塚、吉川弘文館、1986年、初出1958年〕、兜木正亨「如法經と經塚」〔『新版仏教考古学講座』第6巻 經典・經塚、雄山閣、1977年〕などがある。
- * iv 林文理「中世如法經信仰の展開と構造」〔前掲〕も参照。
- * v 藏田藏「埋經」〔前掲〕。
- * vi 例えば和田千吉「常陸国新治郡東城寺村經塚

- の研究」(『考古界』第4編5号・6号、1904年)・川勝政太郎「浄土寺南田町の経塚遺物」(『史迹と美術』第280号、1958年)・吉川聡「読まれないお経」(『奈文研ニュース』No.63、2016年)参照。
- *vii 卷第一は痕跡から判断すると、軸で経巻の右端を扶み、巻首を折り返して、軸が本文3行目の位置にあたったものと思われる。
 - *viii 吉川聡「封をする経巻—如法経の巻緒について」(湯山賢一編『古文書料紙論叢』勉誠出版、2017年)。
 - *ix 武雄誠「兵庫県三木市志染町出土の経筒と埋納経典」(『人文論究』第14巻4号、1964年)
 - *x 佐々木蔵之助「八王子市中山白山神社新発見の経塚遺物について」(『多摩考古』第14号、1979年)。
 - *xi 茨城県土浦市東城寺経塚出土で東京国立博物館所蔵の埋納経も逆巻で(『東城寺と「山ノ荘」』土浦市立博物館、2021年)、保安3年(1122)や天治元年(1124)のものとも言われている(蔵田蔵「埋経」(前掲)・関秀夫「経塚の諸相とその展開」雄山閣、1990年、165頁)。しかしこれは出土状況不明で、年代を決めがたいとすべきだろう(和田千吉「常陸国新治郡東城寺村経塚の研究」(前掲))。

第6章 総括

はじめに

本章では平成9、10年度の発掘調査成果及び平成10年度(1998)から13年度(2001)までの保存処理事業及び令和4年度(2022)の出土遺物の再処理事業の成果を総括し、本経塚の意義を提示したい。

(1) 隅田八幡神社経塚の発掘調査成果

調査の結果、第1区から3基の経塚及び経塚を囲む3基の石垣が確認された。経塚はいずれも、土坑状の穴を掘り、底に板石を据え、その上に経筒及び外容器を置き、周囲を石で囲む構造であった。最も古い時期に造営された第2経塚からは常滑焼甕、経筒、紙本経、銅鏡、青白磁小壺、青白磁合子、短刀、火打鎌、銅銭が出土している。12世紀後半の常滑焼甕は第2経塚の底石に接した状態で検出されており、常滑焼甕の中には経筒、紙本経、銅鏡3点、青白磁小壺2点(身1点、蓋1点)が納入されている。経筒及び経筒内の紙本経は全国的にみても保存状態が極めて良好で貴重な資料である。経筒の蓋及び底板は12世紀代の銅鏡を転用し、紙本経は長寛2年(1164)9月6日の書写があり、妙法蓮華経八巻である。第2経塚の下層では銅鏡4点が出土し、第2経塚の南東には、常滑焼甕の頸部や口縁部の付近に、銅鏡2点、青白磁小壺4点(身1点、蓋3点)、短刀11点、青白磁合子、火打鎌、銅銭等が出土した。火打鎌は2点出土し、経塚供養の際に灯明の火を切るために使用された可能性がある。ただし、第1区で火打鎌が4点出土しているが、火打石の出土は確認されていないことから、実用的な使用ではなく一種の祭祀具として埋納された可能性も考えられる。また、和歌山県下における経塚は30遺跡以上が報告されているが、火打鎌の出土事例は粉河産土神社経塚、庵主池経

塚、那智経塚のみであり(上野・巽 1963、大場 1970、粉河町史専門委員会 2003)、注目される。なお、第2経塚の上層には石組の間に中世の瓦器片、短刀片が挟まって検出され、第2経塚が12世紀後半(平安時代末期)に造営された後、13世紀(鎌倉時代)に手が加えられたとみられる。また、同時代に石垣2は第2経塚が中心となるように周囲を1辺約3.3m(10尺=1丈)四方で囲んで造られたとみられる。

続いて、第1経塚が造られた。第1経塚の出土遺物には備前焼甕、須恵器甕、経筒及び関連部品、銅鏡、青白磁小壺蓋、青白磁合子身、銅銭がある。備前焼甕及び須恵器甕の破片は第1経塚から散乱した状態で検出され、第1経塚の底面には備前焼甕の底部破片が検出され、第1経塚出土経筒は中に小型経筒や環状部品、銅鏡4点、経筒関連部品が納入されていた。当該経塚の特筆すべき点として、2点の経筒の筒身に合う蓋が確認できないこと、経筒内に小型経筒や銅鏡がみられること、出土した銅鏡4点の製作年代が11世紀後半から13世紀代と約200年の間隔があることが挙げられる。これらの点から、第1経塚は埋納当初の状況から何度も手が加えられていると考えられる。なお、小型経筒の筒身及び底板には銘文が確認されたが、年代は明らかでなく、筒身の高さから鎌倉時代以降に流行する六十六部聖の廻国納経の経筒など、中世の納経に伴う経筒であると推察される。このほか、青白磁合子や銅銭は詳細な出土位置は不明だが、第1経塚の石組の間や第1経塚付近等から出土したと思われる。第1経塚の造営時期は真上に建つ宝篋印塔銘が元中2年(1385)であることや備前焼甕の時期が14世紀であることから南北朝時代であると考えられる。同時期には石垣2が西へ延長されたとみられ(石

塚2)、第1経塚を中心とした基壇として機能していたとみられる。

最後に第3経塚が室町時代前期に造られたと考えられる。第3経塚からは銅鏡3点と火打鎌1点が検出され、銅鏡3点の製作年代はいずれも12世紀中葉から後半である。銅鏡3点のうち1点は第3経塚の底石の上から検出された。しかし、經典埋納に係る外容器や経筒は確認されなかった。なお、当該経塚には底石と一部の石組が残っているが、上部は削平されている。第3経塚の造営と同時期に、3基の経塚が一列に並ぶ基壇として石垣3が造られたとみられる。

近世になると、3基の経塚と2基の石垣を囲むように石垣1が造られた。このとき石垣2は石垣1の築造のため、東西の石垣の両端は切り取られたとみられる。なお、石垣1の北面石垣の下からは江戸時代のものと思われる瓦片が出土した。

(2) 隅田八幡神社経塚の変遷

調査結果から、隅田八幡神社経塚の変遷は大きく4期に分けられる(図52)。

【第1期】 12世紀初めに、隅田八幡神社の存在が当地域の在地文書である「隅田家文書」から明らかとなる。12世紀後半(平安時代末期)に第2経塚が当地に築造される。

【第2期】 13世紀(鎌倉時代)に、第2経塚の石組の上半部に手加えされるとともに、第2経塚を中心として、周囲を囲むように石垣2が築造される。また、「隅田八幡神社文書」によると、弘安10年(1287)からしばしば法華経供養が行われたことがうかがえる。

【第3期】 第1経塚が南北朝時代に築造され、第1経塚の上に元中2年(1385)銘の宝篋印塔が建てられる。同時期に第1経塚が中央に位置するよ

うに石垣2が西に延長される(石垣2')。さらに、第1経塚の築造後から室町時代前期までに、第3経塚が築造される。第3経塚と同時期に、石垣3が築造され、3基の経塚が並ぶ壇が造られたとみられる。

【第4期】 石垣1が江戸時代に築造され、現在の形となる。

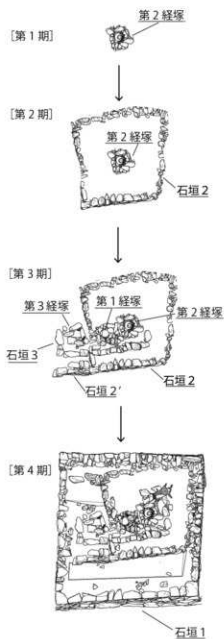


図52 隅田八幡神社経塚の変遷

(3) 隅田八幡神社経塚の特徴

ここでは、第5章の論考を踏まえ、隅田八幡神社経塚の特徴を挙げる。

中川論考では、和歌山県内の経塚の発掘調査研究史を概観し、和歌山県内の経塚は熊野三山及び高野山地区に造営例が多いことを述べ、隅田八幡神社経塚は経塚そのものを発掘調査した数少ない事例であると評価する。また富加見論考では、和歌山県内の経塚の立地が寺社と関係のある場所に造営されており、隅田八幡神社経塚も例外でないことを述べる。

岩倉論考では、平安時代の隅田庄成立から豊臣秀吉政権による庄園制度の解体までの隅田庄の変遷を概説する。また、本論考では平安時代中期の隅田庄の有力者である長忠延や隅田八幡神社経塚出土の紙本経に書かれた藤井氏が古代の那賀郡に基づく豪族である可能性があることから、本経塚のある伊都郡とのつながりを示唆する。

中川論考では、隅田八幡神社経塚の銅鏡の出土状況及び製作年代から、第2経塚出土の銅鏡は強く辟邪を意図した埋納であること、第1経塚出土の銅鏡は中世の経塚でありながら、古代的な要素を残した埋納であることを指摘する。

吉川論考では、隅田八幡神社経塚出土の紙本経は妙法経の中でも、中世的な形に変化していく時期の書写・埋納の実態を示す好例であり、地方寺社における妙法経書写の実例の一つであると評価する。

(4) まとめと今後の展望

本書では「平成10年度 隅田八幡神社経塚発掘調査概報」（橋本市教育委員会1999）刊行時には掲載できなかった資料を整理し、平成10年度（1998）から平成13年度（2001）

の保存処理の成果及び令和4年度（2022）の再整理事業の成果をまとめ、隅田八幡神社経塚について再検討を行った。この結果、改めて隅田八幡神社経塚から検出された複数の遺構の時期変遷を提示し、出土遺物について主要な資料の整理成果を提示することができた。特に第2経塚出土の紙本経の埋納状況や書写内容について、保存処理事業の様子も含め提示したこと及び経筒及び銅鏡についても特徴やおおよその製作年代を提示したことは今後の経塚研究に大きく寄与できるだろう。また数々の資料は当時、隅田庄を統治し、隅田八幡神社を取り仕切っていた隅田一族との関係も考えられ、地域史を明らかにする資料としても貴重である。本書を通して、皆様が古代から中世における信仰の一形態に興味を持っていただければ幸いである。

参考文献

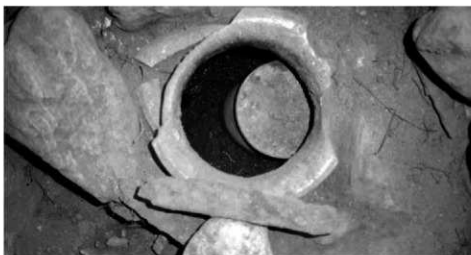
- 岩倉 哲夫 1992 「大高能寺」『日本名刹大辞典』圭室 文雄（編） 雄山閣
- 上野元・巽三郎 1963 『熊野新宮経塚の研究』熊野神宝館
- 大場 巖雄（監）1970 『那智経塚—その発掘と出土品—』那智大社
- 粉河町史専門委員会 2003 『粉河町史』粉河町
- 関 秀夫（編）1985 『経塚遺文』東京堂出版
- 橋本市市史編さん委員会 1975 『橋本市史 下巻』橋本市
- 橋本市市史編さん委員会 2005 『橋本市史 民俗編・文化財編』橋本市
- 橋本市教育委員会 1999 『隅田八幡神社経塚発掘調査概報』橋本市市理文化財調査概報28 橋本市教育委員会



1. 岡田八幡神社経塚（かつての状況）



2. 平成9年経筒発見状況



3. 平成9年経筒・常滑焼甕出土状況

写真図版 2



1. 隅田八幡神社経塚（第2次調査前状況）



2. 第1区全景



3. 第1区南西から



4. 第1区北西から



5. 第1区北東から



6. 第1区南側礎堆積状況 南東から



1. 第1区南側礫堆積 東半分掘削状況



2. 第1区南側完掘状況 北から



3. 第1区石垣2・3 南東から



4. 第1区経塚掘削途中



5. 第1区経塚



6. 第1区経塚青白磁合子身検出状況

写真図版 4



1. 第2 経塚青白磁小壺検出状況



2. 第2 経塚



3. 第2 経塚常滑焼甕、青白磁、短刀検出状況



4. 第2 経塚青白磁小壺検出状況



5. 第2 経塚青白磁小壺蓋検出状況



6. 第2 経塚銅鏡、青白磁小壺蓋
検出状況



1. 第3経塚



2. 第3経塚銅鏡検出状況1



3. 第3経塚銅鏡検出状況2



4. 第2区全景 南から



5. 第2区西側土層断面



6. 第2区土塚跡1・2 東から

写真図版 6



1. 第2区土塼跡1 南から



2. 第2区土塼跡2 北から



3. 第3区全景 北西から



4. 第3区サブトレンチ 南側土層断面



5. 宝篋印塔 遠景



6. 宝篋印塔 正面から



第1 経塚備前烧甕 (1)、須恵器甕 (2)

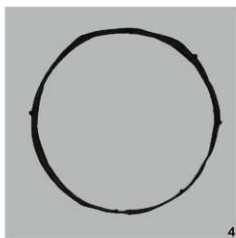
写真図版 8



第1 経塚経筒



1. 経筒 X線写真

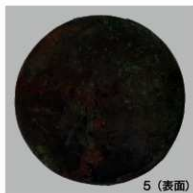


4



4

2. 経筒 環状部品



5 (表面)



5 (裏面)

3. 経筒 蓋



6

4. 不明部品



7 (A面)



7 (B面)



7 (C面)



7 (D面)



底部外面



側面



側面



8 (背面)



8 (鏡面)



9 (背面)



9 (鏡面)



10 (背面)



10 (鏡面)



11 (背面)



11 (鏡面)



12



12



12

1. 第1 経塚青白磁小壺蓋



13

2. 第1 経塚青白磁合子身 1



14

3. 第1 経塚青白磁合子身 2







27 (A面)



27 (B面)



27 (C面)



27 (D面)



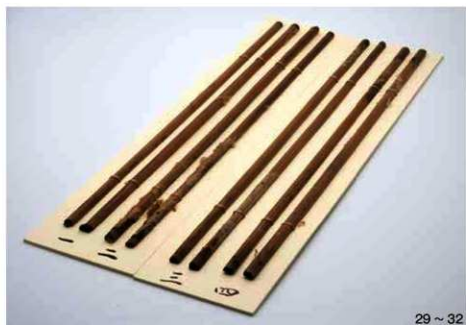
27



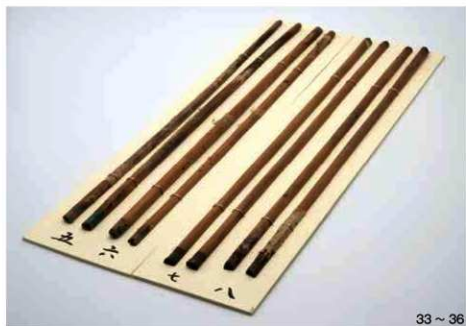
28 (背面)



28 (鏡面)

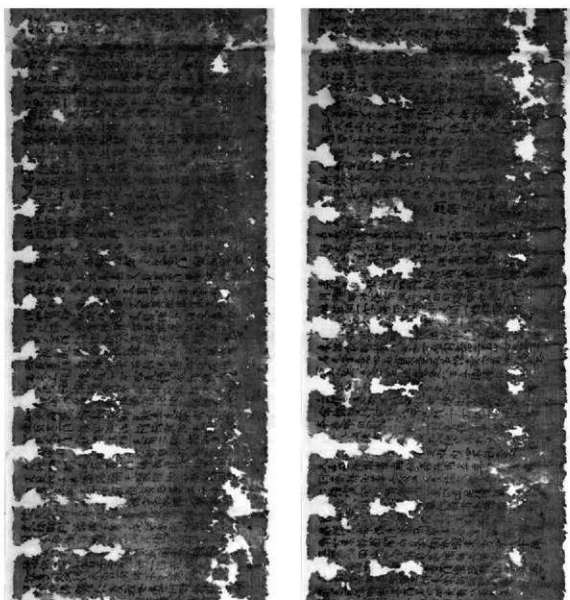


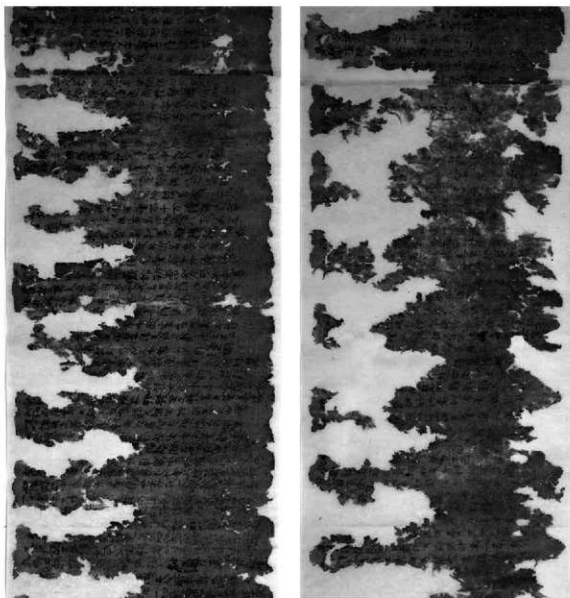
29 ~ 32



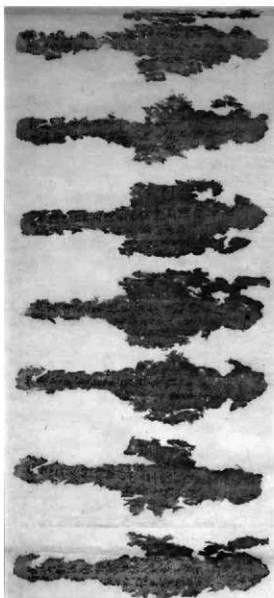
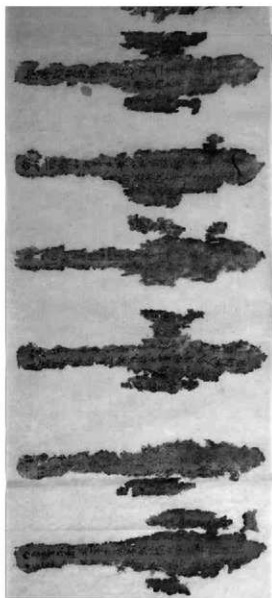
33 ~ 36

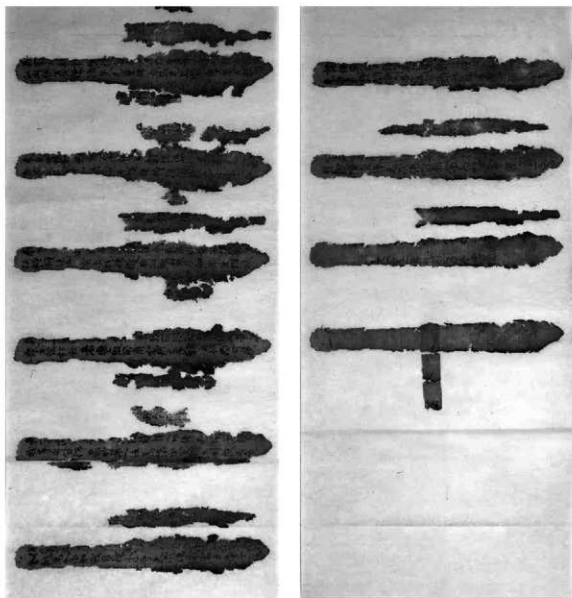


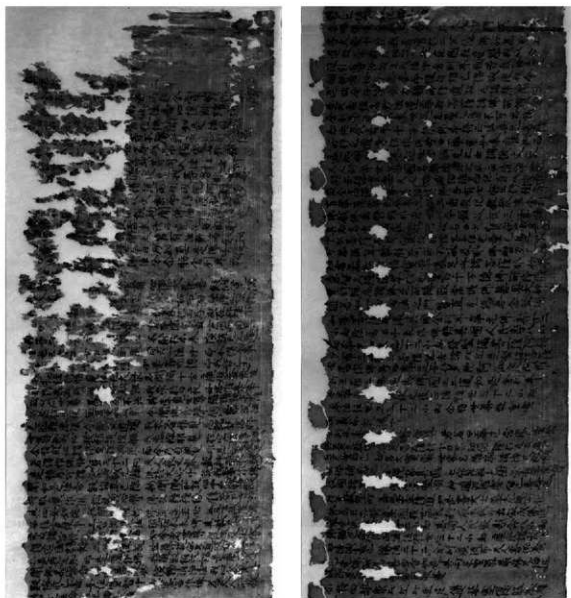


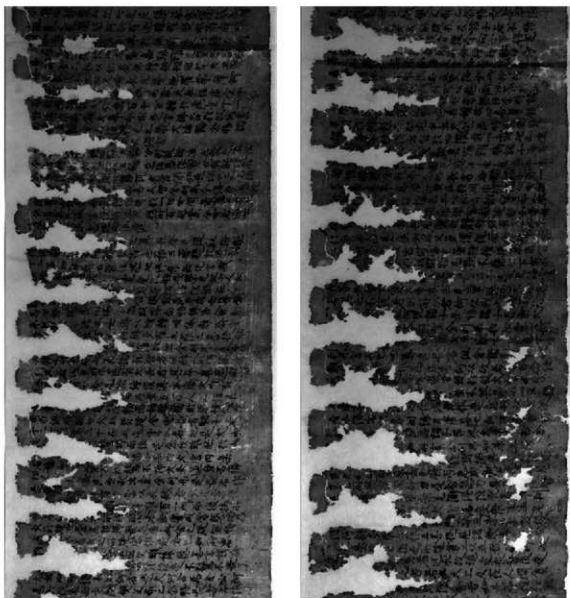




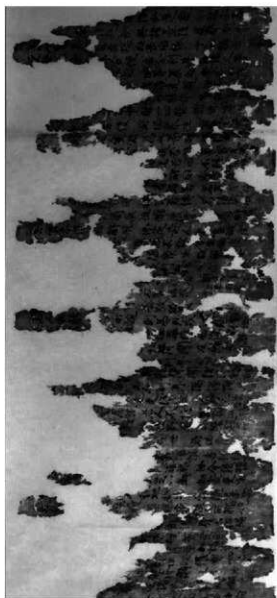


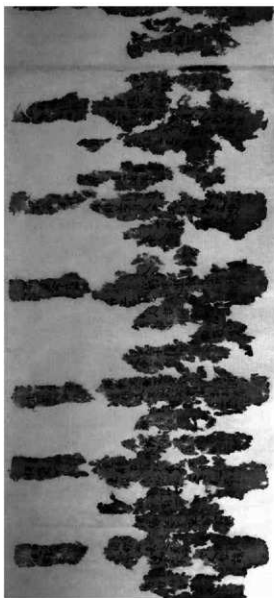
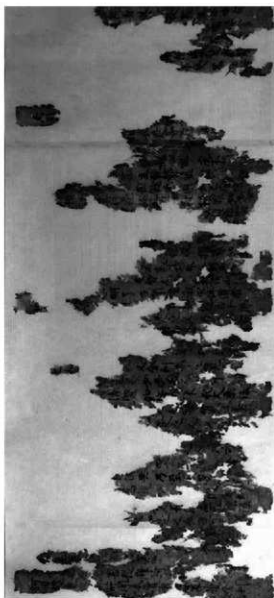




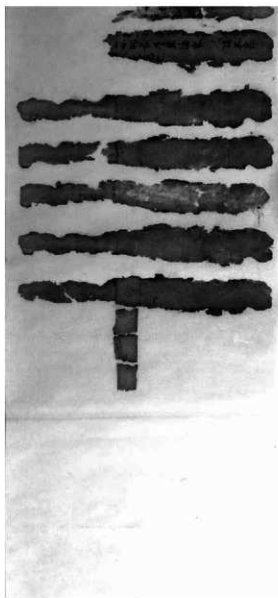
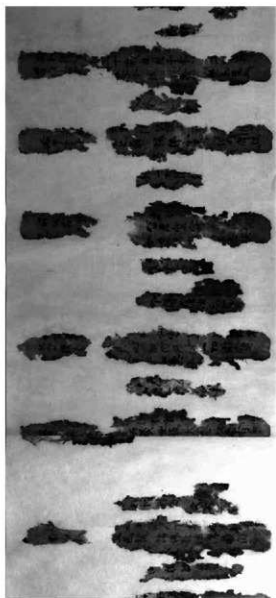


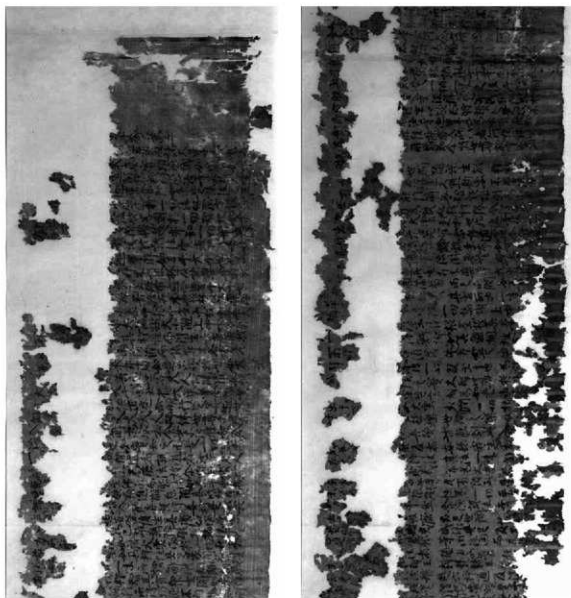






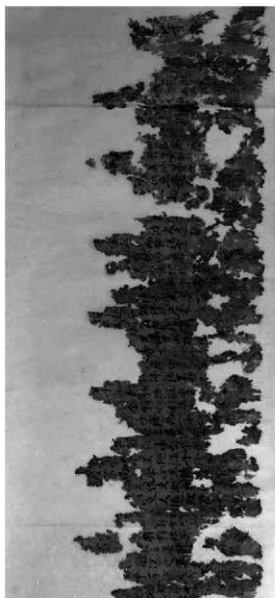
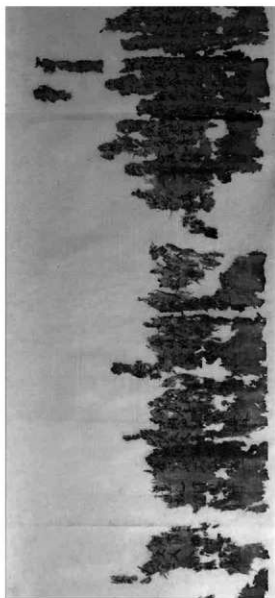


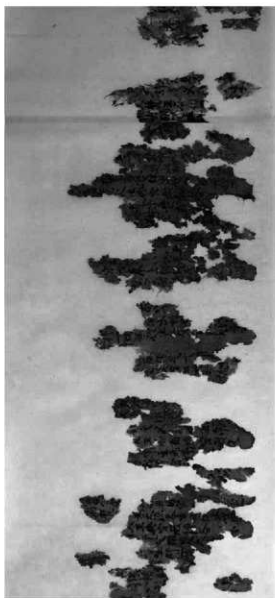


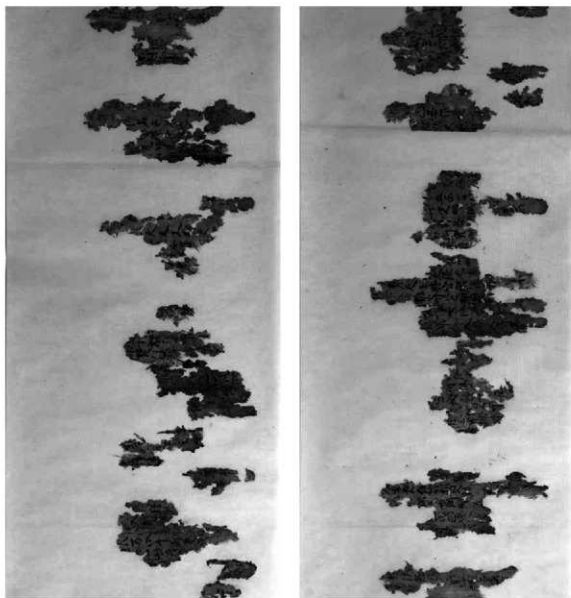


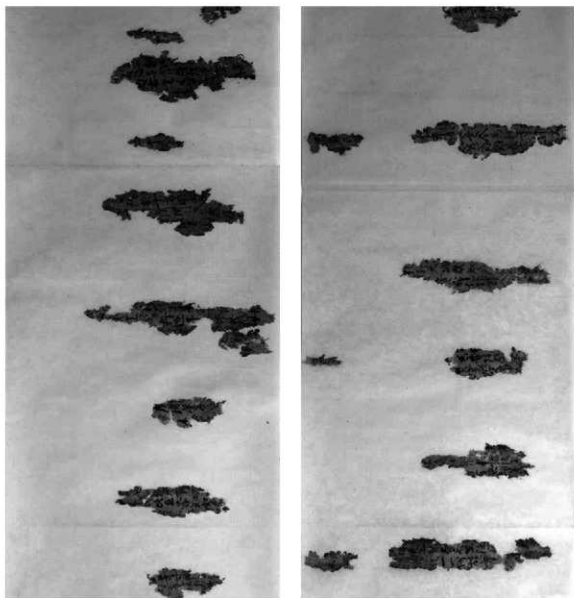
第2 経塚紙本経卷第三 (1)

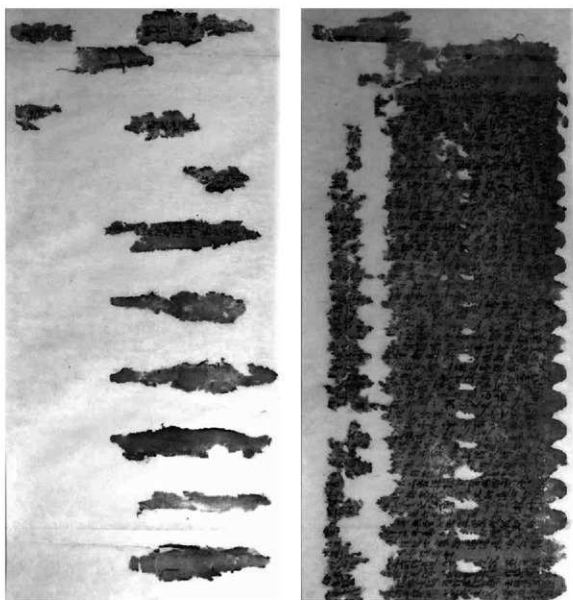




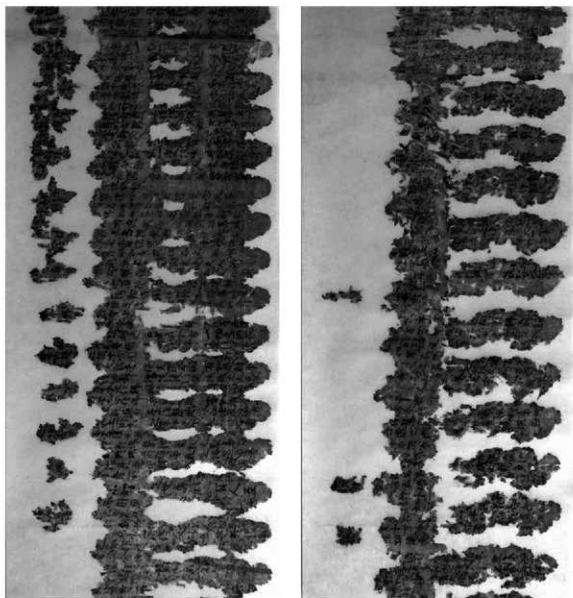


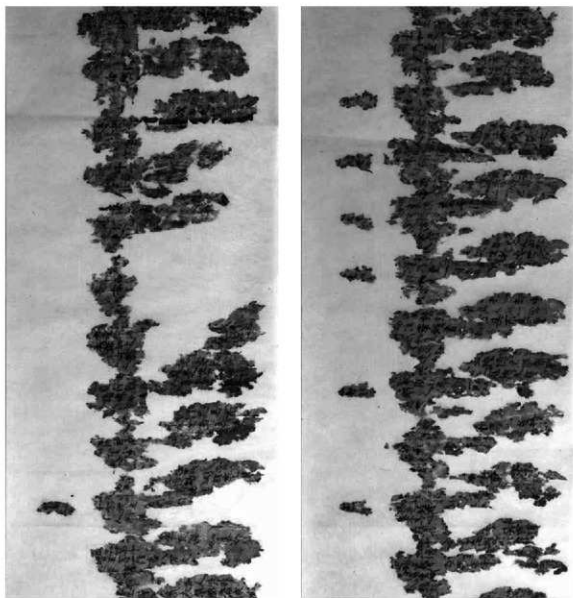


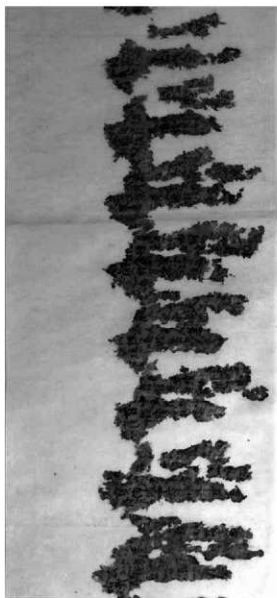


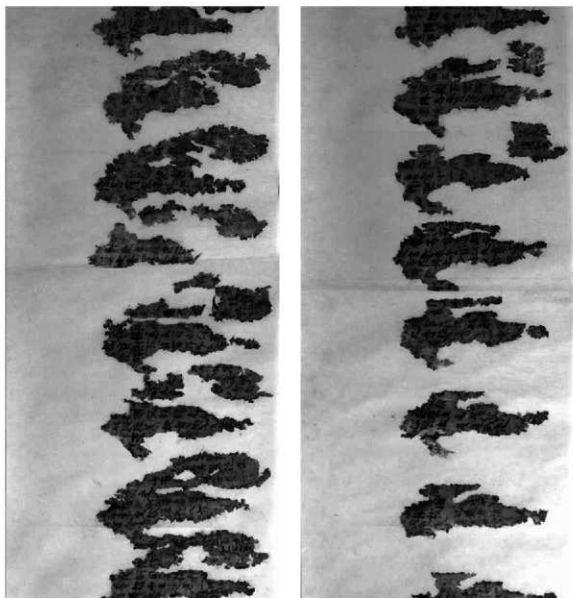


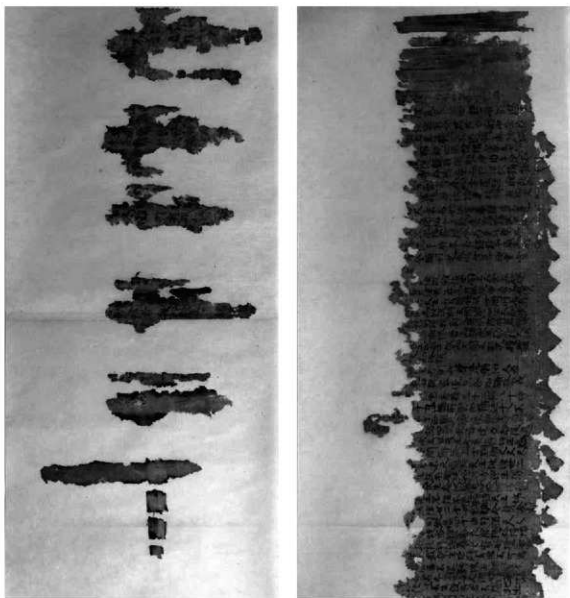
第2 経塚紙本経卷第三 (7)、卷第四 (1)

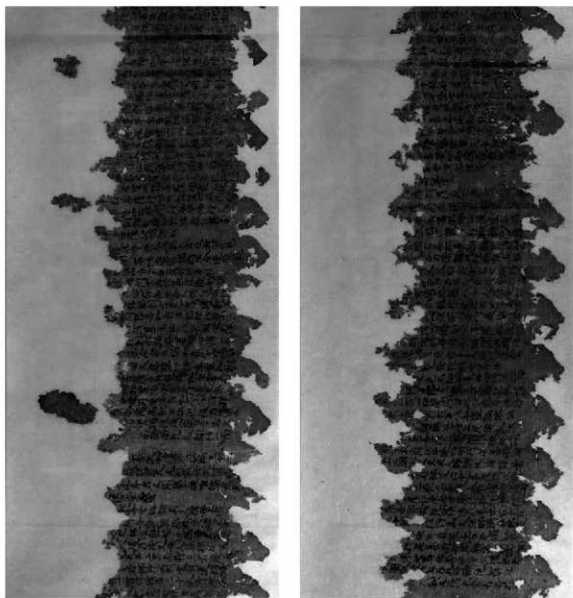


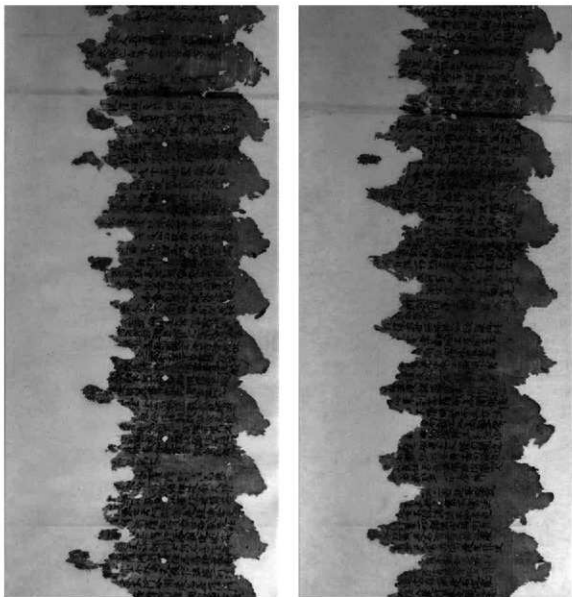


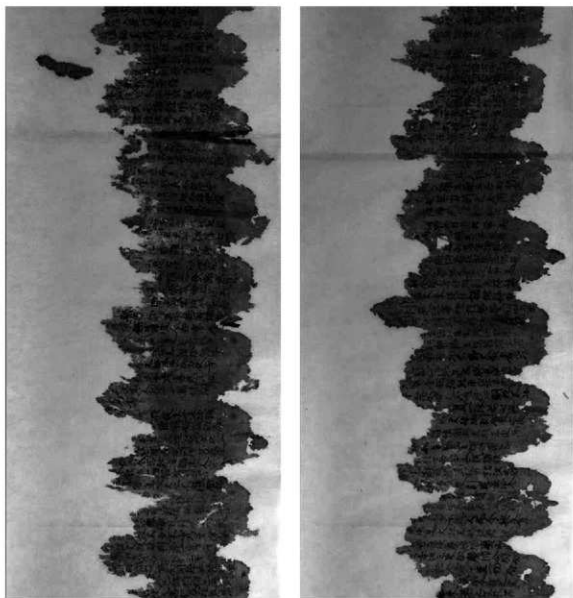


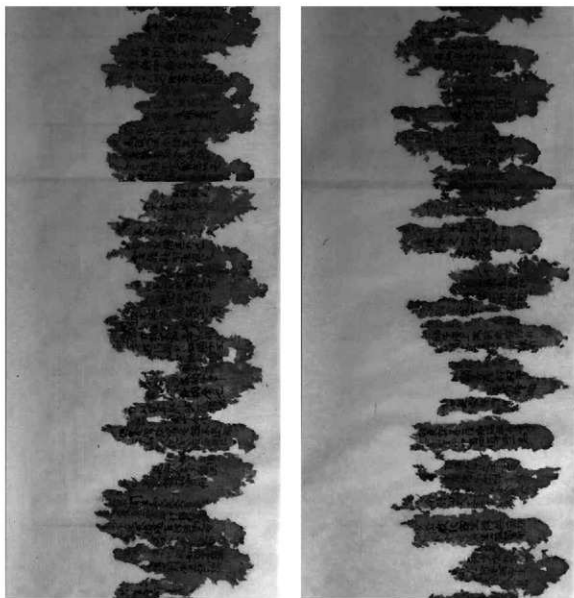


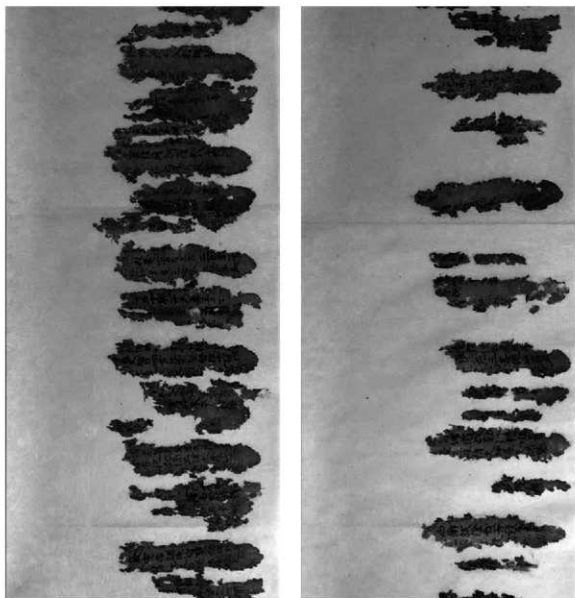


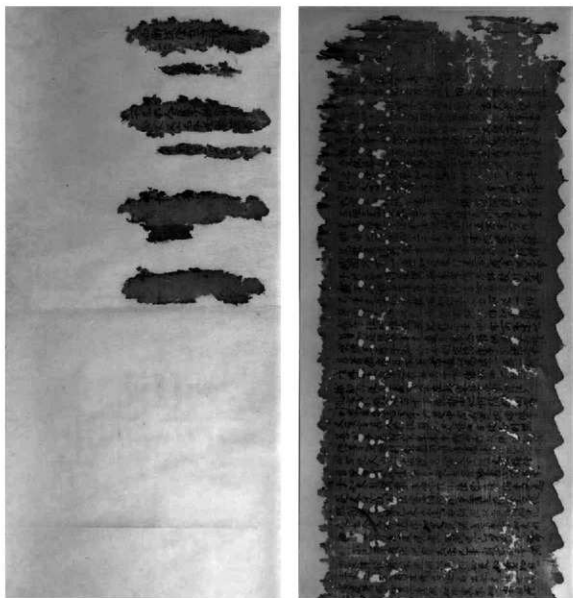


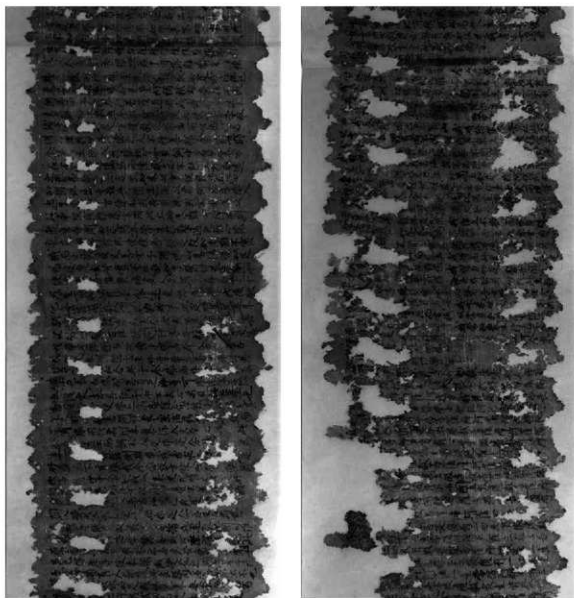


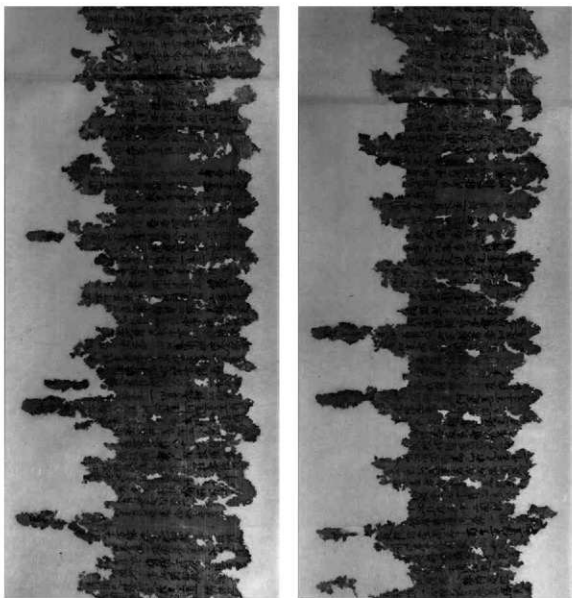


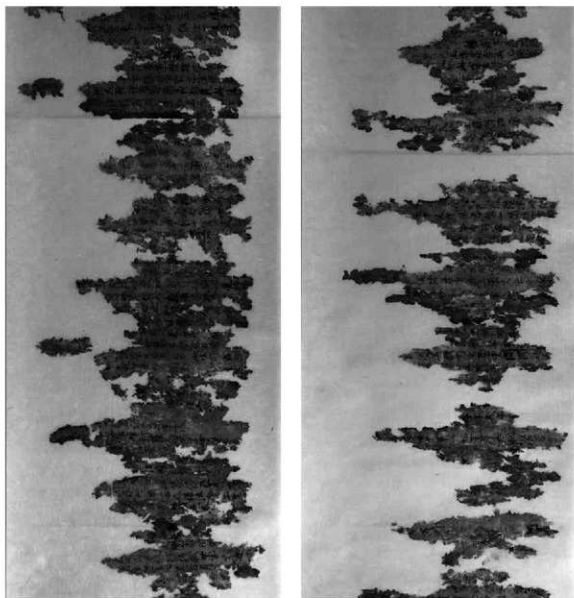


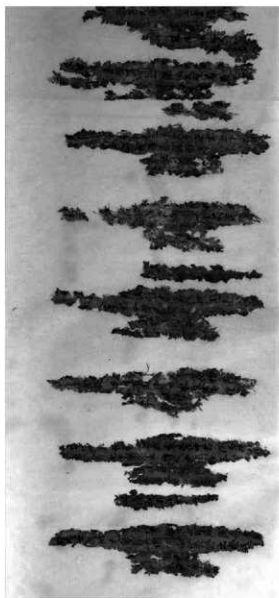
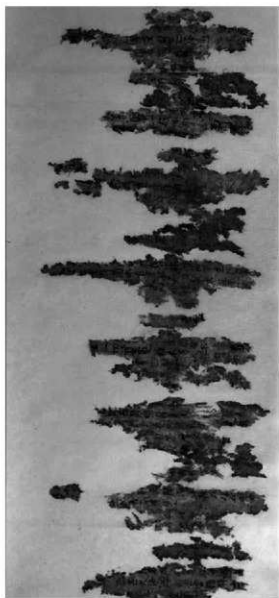




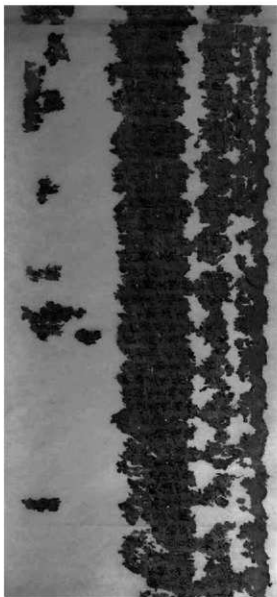
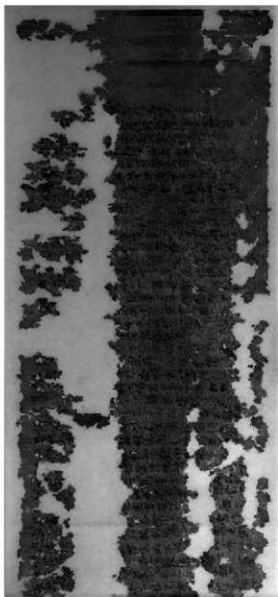


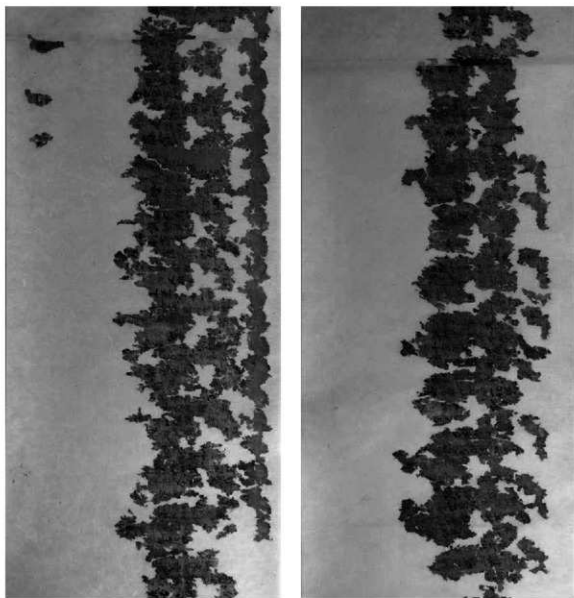




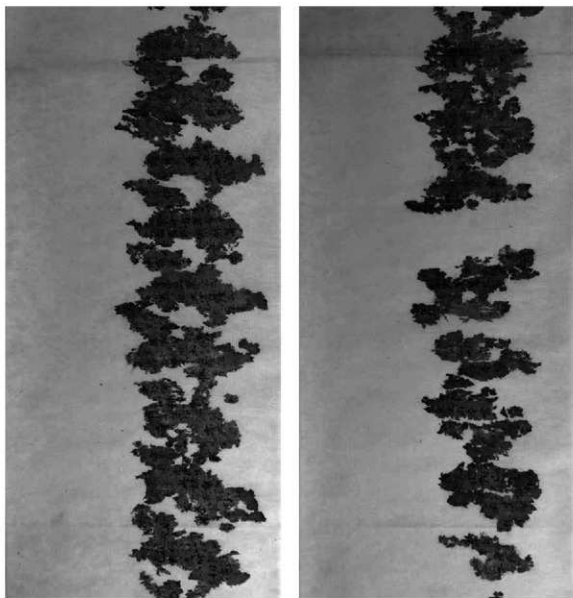


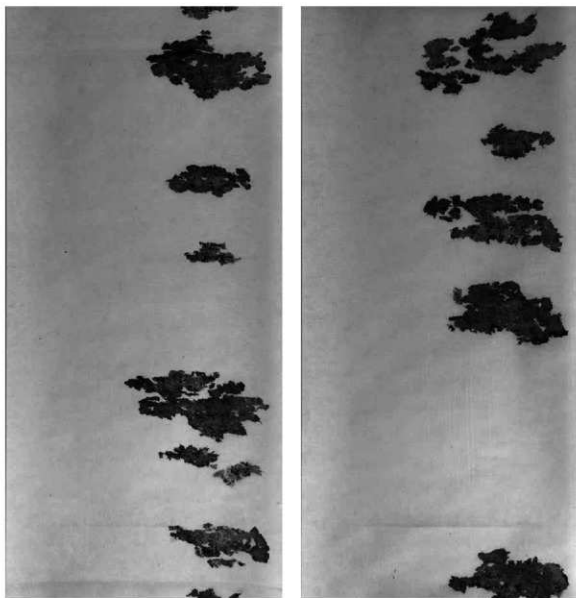




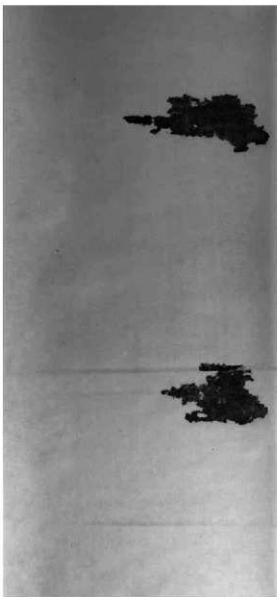
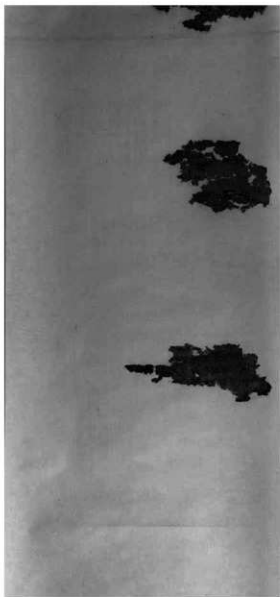


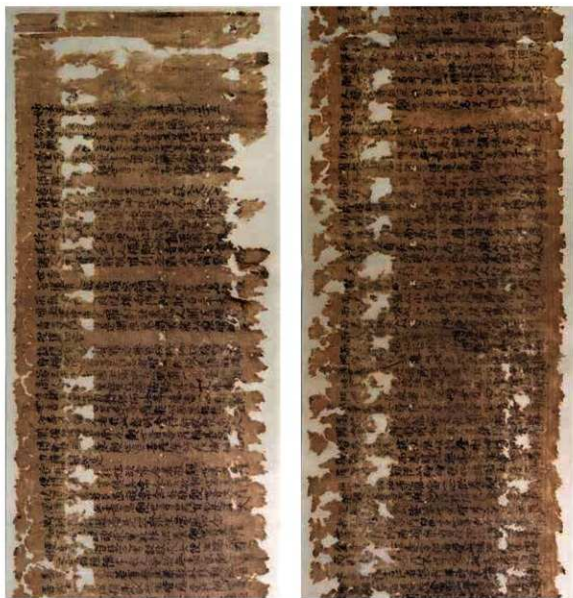
第2 経塚紙本経卷第七 (2)



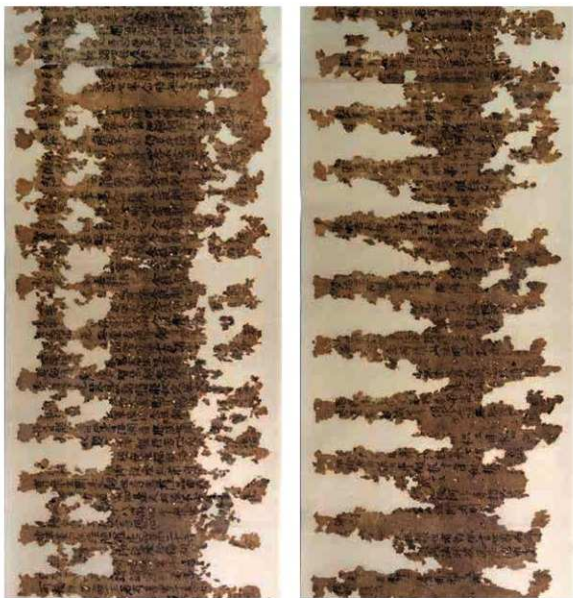


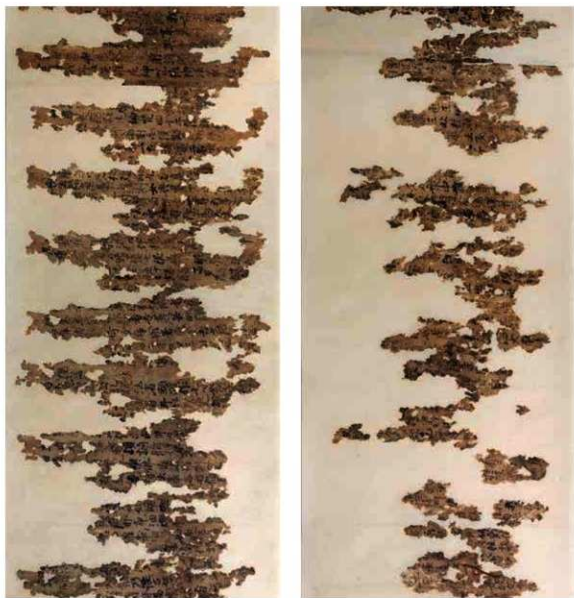
第2 経塚紙本経卷第七 (4)

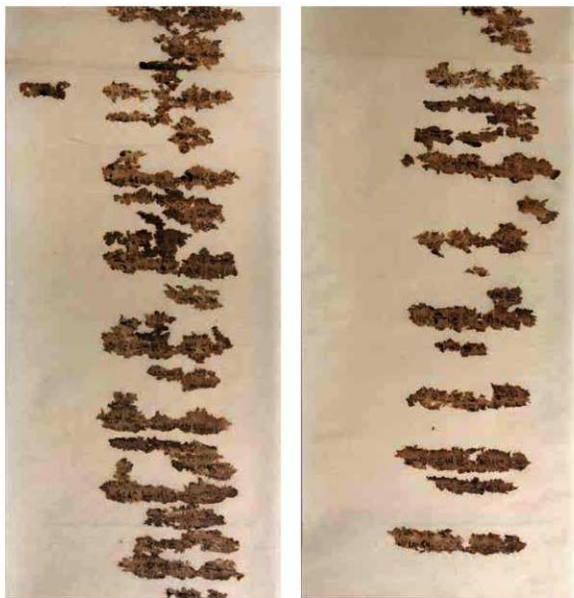


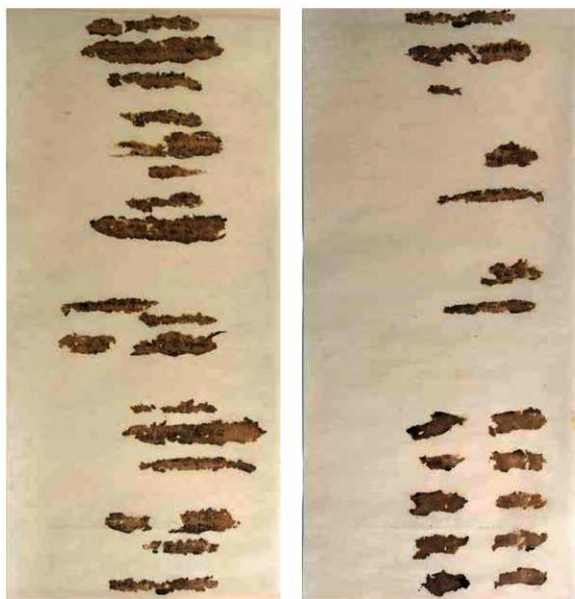


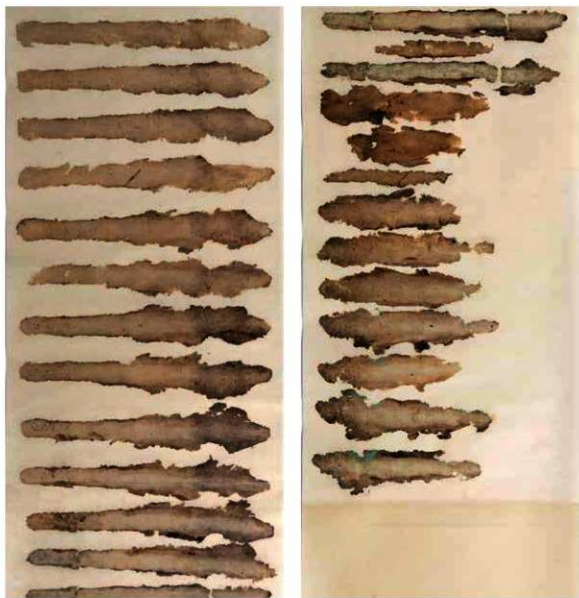
第2 経塚紙本経卷第八 (1)













37 (背面)



37 (鏡面)

1. 第2 経塚銅鏡1 海獣葡萄鏡



38 (背面)



38 (鏡面)

2. 第2 経塚銅鏡2 網代双鳥鏡



39 (背面)



39 (鏡面)



40 (背面)



40 (鏡面)



41 (背面)



41 (鏡面)



42 (背面)



42 (鏡面)



43 (背面)



43 (鏡面)



44 (背面)



44 (鏡面)



45 (背面)



45 (鏡面)



46



47



46



47



48



49



48



49





54



55



56



57



56



57





1. 第2経塚短刀2



2. 第2経塚火打鎌



73



74



75



76



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



87







117 (背面)



117 (鏡面)



118 (背面)



118 (鏡面)



119 (背面)



119 (鏡面)



1. 第3経塚火打鎌



121 (背面)



121 (鏡面)

2. その他出土銅鏡1 草花双鳥鏡





128



129



128



129

1. その他出土青白磁合子蓋



135

2. その他出土火打録



136・137・138

3. その他出土ガラス小玉



130



131



132



133



134



150



150





銅鏡 鈕

報告書抄録

ふりがな	すだはちまんじんじゃきょうづかはつくつちようさほうこくしょ							
書名	隅田八幡神社経塚発掘調査報告書							
副書名								
編著者名	佐々木彩乃(編) / 岩倉哲夫・金澤舞・重金誠・瀬谷今日子・中川あや・中西瑞花・中原七葉子・中村浩道・富加見泰彦・吉川聡							
発行機関	橋本市教育委員会							
所在地	〒648-8585 和歌山県橋本市東家一丁目1番1号							
発行年月日	西暦 2023年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
隅田八幡神社 経塚	橋本市隅田町 垂井	30203	指定107	34° 30' 00"	135° 38' 43.9"	1997.9.24～10.17, 1998.10.12～12.25	約41.63㎡	記録保存調査、 保存目的調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
隅田八幡神社経塚	経塚	古代～中世	経塚3基、石垣3基、土解跡	備前焼甕、須恵器甕、常滑焼甕、銅製経筒、紙本経、銅鏡、青白磁小壺、青白磁合子、白磁皿、短刀、火打鎌、ガラス小玉、銅銭、瓦器片、瓦片ほか			隅田八幡神社経塚群 和歌山県指定史跡 (平成19年6月12日指定) 隅田八幡神社経塚出土品 和歌山県指定有形文化財 (平成17年5月31日指定)	
要約	<p>隅田八幡神社経塚は橋本市隅田町垂井の隅田八幡神社境内にある古代～中世の経塚である。本書は『平成10年度 隅田八幡神社経塚発掘調査概報』（橋本市教育委員会 1999）の発掘調査の内容に加え、平成10～13年度（1998～2001）に実施した保存処理事業の成果及び令和4年度（2022）に再処理事業の成果報告である。</p> <p>主な遺構は、平安時代末期の経塚1基、南北朝時代～室町時代の経塚2基、中世～近世の石垣3基のほか土解跡がある。主な遺物は、常滑焼甕や備前焼甕、須恵器甕のほか、「長寛2年（1164）9月6日」銘の紙本経、経筒、銅鏡、青白磁小壺、青白磁合子、白磁皿、短刀、火打鎌、ガラス小玉、銅銭、瓦器片、江戸時代の瓦片等がある。</p> <p>発掘調査の結果、3基の経塚のうち1基は遺構が良好な保存状態で検出され、「長寛2年（1164）」銘の紙本経等の遺物が良好な保存状態で出土した。隅田八幡神社経塚は当地域で数少ない経塚の発掘調査事例であり、当地域の古代から中世における信仰の一形態を示す。</p>							

隅田八幡神社経塚発掘調査報告書

発行日 令和5年3月31日

発行・編集 橋本市教育委員会
和歌山県橋本市東家一丁目1番1号

印刷 中和印刷紙器株式会社
和歌山市久保丁4丁目53番地